山ぎろう

第40号　平成21年11月　関東氷上郷友会

おもわず　新しい

NEXTA

人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東　京　支　店　111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル　TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッピイ株式会社

東　京　工　場　121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12　TEL 03-3849-6611
千　葉　工　場　270-0202 千葉県野田市関宿台町2192　TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケイ株式会社

栃　木　工　場　323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938　TEL 0282-62-3321

山ぎぶり

第40号

父母在りし氷上の里よ揚雲雀（あげひばり）

山ざる　第40号　目次

〈表紙〉可部美智子作陶彫〝不動心〟二〇〇九年作
〈扉・目次写真〉①柏原町母坪・徳田邸の裏庭（俳句＝渡邊隆男）……徳田八郎衛・撮影
②③朝霧覆う故郷の山
④華麗に咲く彼岸花（誰か故郷を想わざる＝西條八十作詞）……渡邊隆男・撮影

「二十一世紀」の郷友会……坂上勝朗　5
平成20年度「ふるさとの会」開催……6／会計報告書……9
祝寿の方々ご紹介……10／寄附者芳名……13／懇親会スナップ……14

《座談会》「山ざる」誌40号のあゆみ……18

《ふるさと随想》
懐かしい丹波柏原……谷垣　尚　26
ふるさとの歌ふるさとの人……臼井小五郎　29
昭和二十三年の柏原中学校学芸会……丸川健三郎　32
峠のふもとの我が故郷……山中秀雄　36
丹波の友・三題……上野重喜　39
八六人一クラスの思い出……形田恒夫　43
一枚の写真……原谷洋美　45
私の故郷は兵庫五区……徳田八郎衛　48
思いつくままに……齋藤陽子　49

気骨の書家・義積誠堂を識る……梅田重二　52
〝今浦島〟の寂しさ……木村つた江　54
丹波の歳時記……谷　敬三　56
名刹・慧日寺について……細川倫夫　63

《特別寄稿／丹波から》
父との確執の中で起業……坂東隆弘　66

《近況エッセイ》
希望のバトンを渡すまで……清家久美子　76
出かける前の〝呪文〟……井上　巌　79
父が教えた春夏秋冬の心……村上信夫　81
隠居のてすさび……三浦　宏　84
四十代半ばを過ぎて……大河洋介　87
人の手足になって……石倉良介　91
科学教育に体験博物館を……青木保夫　92
かくも愛しき存在―ＰＡＲＴⅣ……岡田昌子　95
医学の進歩に期待する……日置孝彦　97
山ざるの「ラジオ交通情報」事始め……高見秀史　100
ハルよ、遠きハルよ……矢尾鐵太郎　104
私とどてらい男……荻野禎一　106
折々の記(6)……井本義一　108

《丹波を撮る》……徳田八郎衛　70
《山行記》山と温泉に魅せられて・Ⅲ……山本喜則　118
北アルプス・薬師岳縦走記……川端教子　121
《旅のエッセイ》旭川・富良野・美瑛を巡る旅……生田清弘　126
《私の職場》ニュース制作システムの開発……近藤利春　132
《丹波通信》召しませ丹波「鹿肉料理」……荻野佑一　136
ふるさとトピックス……25・139／会員だより……140
BOOKS……144／《インフォメーション》……146
《協賛広告》……151／編集後記……164

誰か故郷を想わざる

花摘む野辺に日は落ちて
みんなで肩を組みながら
歌を歌った帰り道
幼馴染のあの友この友
ああ誰か故郷を想わざる

一人の姉が嫁ぐ日に
小川の岸でさみしさに
泣いた涙のなつかしさ
幼馴染のあの山この川
ああ誰か故郷を想わざる

都に雨の降る夜は
涙に胸もしめりがち
遠く呼ぶのは誰の声
幼馴染のあの夢この夢
ああ誰か故郷を想わざる

（作詞・西條八十／作曲・古賀政男／歌・霧島昇　1940年）

「二十一世紀」の郷友会

会長　坂上勝朗

私の東京暮らしは今年で五十五年を過ぎました。過ぎてしまえば「あッ」という間のできごとのようですが、いちいち過去のできごとを繰ってみますと、それなりに変化に富んだ時間が、分厚い層をなして重なりあっているのに気がつきます。そして、その層を一つひとつめくっていくと、底のほうに、なにやらめっぽうなつかしい化石のようなものが横たわっているではありませんか。これこそ、ほかでもない私を生み育ててくれた氷上郡葛野村（かどのむら）。うまし「ふるさと」の姿なのです。昭和と平成の大合併によって、無残にもこの郡と村の名は、現代の地図から消し去られてしまいましたが、だれがなんと言おうと、私の「ふるさと」はここを措いて他にないのです。はたして、こんなたわごとを本誌の読者諸兄姉は受け入れてくださるかどうか疑問ですが、年を重ねるほどに「ふるさと」観はかたくなになるようで、わがことながら度し難く思うこのごろです。

さて、このたび図らずも本会会長を仰せつかりました。代々の会長は、ここ数代だけを見ても石橋次郎八氏（石橋生糸社長）、足立三治氏（つるや産業社長）、伴仲信次氏（春日建設社長）、村上末吉氏（商店建築社社長、渡邊隆男氏（二玄社会長）など錚々たる立志伝中のかたがたによって受け継いでこられましたのに、いきなり名誉も地位もない一介の素浪人のような私に、白羽の矢が立ってしまったのですから、だれよりも当人が、当惑と驚きで慌てふためいた有様でした。しかし、いったん引き受けからには、百年の歴史を次代に引き継いでいくべく、可能な限りその務めを果たす所存です。幸いにも足立・伴仲・村上・渡邊各会長のもとで、三十数年にわたり得がたい薫陶に浴してまいりましたので、それを元手に二十一世紀の「郷友会」の存続と発展に尽くしたいと考えています。なにとぞ暖かいご助力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年度「ふるさとの会」開催

平成二十年度の「ふるさとの会」は、十一月十六日（日）正午から東京都千代田区の九段会館「瑠璃の間」でおこなわれた。

総会では、渡邊隆男会長挨拶のあと議事に移り、役員改選・会計報告・監査報告・会務報告があり、いずれも理事会提案・報告どおり満場一致で承認された。

役員改選では、渡邊隆男会長の辞任にともない、新会長に坂上勝朗氏を選任し、また新たに三名の理事を加えた。なお、平成二十一年二月の理事会で渡邊隆男氏を名誉会長に推す発議があり、これを採択しご当人の了解を得た。新役員は別記の通り。

満八十歳になられた郷友にお祝いを申し上げる「祝寿会」は、当年は昭和三年（一九二八）生まれの右記五名のかたがたに、坂上会長から祝辞と花束を贈った。

五十音順に、芦田重秋氏、

植田憲雄氏、久保豊氏、小谷崇氏、渡邊隆男氏。太平洋戦争末期から敗戦の混乱期に、最も多感な時代を過ごされた世代のかたがたである。それぞれから、滋味あふれる謝辞をいただいたが、紙面の都合上割愛する。

宴会は、副会長岸本勲氏の乾杯の発声で始まった。当年は、丹波市長の選挙と重なったため、就任以来ご出席をいただいている辻重五郎市長は欠席。来賓挨拶は、兵庫県東京事務所次長の岡田徹氏から井戸兵庫県知事の声のメッセージが紹介された。

宴会の内容は例年通り丹波なまりが飛び交い、終始にぎやかに推移した。

お楽しみ抽選会は、恒例の丹波山の芋十本および丹波黒大豆十本。幸運を引き当てた人たちは、幸せそうな笑顔で九段会館を後にされた。なお、事務局では念のため、山の芋と黒豆当選者に商品発送案内をさしあげているが、それぞれから、着荷のお知らせと心楽しいお礼状を頂戴している。いちいち返書をさしあげていないが、当紙面を借りて、ご丁寧なお便りへのお礼を申し上げる。

午後三時三十分中締め。副会長・岡吉明氏の三本締めで、景気良く今年を締めくくった。

〈平成二十年度改選役員〉（敬称略）＊は新任理事

名誉会長　渡邊隆男

会長　坂上勝朗

副会長　岡吉明　岡田昌子　岸本勲　谷口浩章

顧問　木村つた江　常岡幹彦　村上末吉

常任理事　足立謙悟　足立静雄　足立吉雄　池田忍
上高子　上田道代　植田茂樹　木呂子恵美子
勢川武彦　高見秀史　谷敬三　鶴田ゆき子
徳田八郎衛　中居篤子　仲一聡　原谷博美
藤田徹　本城英明

理事　芦田重秋　足立和孝　足立和巳　足立勲平
足立知佳子　井徳正吾　上田正文　上野重喜
大野善三　小田富士夫　金出一郎　＊可部美智子
久保良雄　直田正　高見嘉都司　＊谷垣邦夫
千種倫幸　藤田純　藤原ひさ子　前田武彦
増井攻　丸川宥次郎　＊山口和久　吉住自由造
吉田勇司

監事　臼井小五郎　岡林逸男

◎平成二十年度「ふるさとの会」出席者

（順不同・敬称略）

〈来賓〉

岡田　徹　兵庫県東京事務所次長

渡邊直樹　同　課長

〈祝寿〉

芦田重秋　植田憲雄　久保　豊　小谷　崇

渡邊隆男

〈会員〉

○青垣町（4名）

足立和巳　足立　聡　足立静雄　飯田光雄

○市島町（10名）

木寺昭三　木村つた江　高見秀史　鶴田ゆき子

藤田　純　藤田千治　藤田　徹　丸川健三郎

丸川宥次郎　山本喜則

○柏原町（10名）

植田茂樹　岡　吉明　岡田昌子　小田富士夫

大野善三　可部美智子　高尾久子　常岡幹彦

徳田八郎衛　吉竹　覚

○春日町（2名）

金出一郎　木呂子恵美子

○山南町（13名）

池田　忍　植木十和子　梅田重二　大野義昭

久保良雄　笹倉鉄平　勢川武彦　仲　一聡

中居篤子　広瀬安伸　広瀬庸世　若森敏郎

渡邊貴美子

○氷上町（17名）

足立明子　足立謙悟　足立吉雄　安達健一郎

上　高子　上田道代　上野重喜　臼井小五郎

岸本勲　小山とし子　坂上勝朗　里　収

谷口　捷　徳桝雅孝　本城英明　八木信行

山森直美

○西脇市（1名）

笹倉郁子

会　計　報　告　書

（平成20年7月1日～平成21年6月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・谷口　浩章
原谷　洋美

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科　目	金　額	摘　要	科　目	金　額	摘　要
繰越金	2,501,097	郵便貯金 1,701,097円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出版費	921,496	『山ざる』39号
			通信・印刷費	133,512	総会・役員会案内等
			総会費	491,698	総会関係支払
年会費収入	385,000	延176名	会議費	197,735	役員会等
総会費収入	388,000	56名	支払手数料	19,890	振替手数料
役員会費収入	186,000	延54名	消耗・備品費	96,513	事務用品・広告費等
寄付金	159,700	延48名	繰越金	2,522,502	郵便貯金 1,722,502円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円
広告料収入	762,000	延61名			
その他	1,549	利子等			
合計	4,383,346		合計	4,383,346	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成21年7月31日

会計監査　岡林道男

臼井小五郎

祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる七名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、三名の方から回答頂きましたのでご紹介します。（順不同）

①生年月日
②ご出身地
③上京の年月日
④上京の動機
⑤これまでに最も印象に残ることは
⑥祝寿を迎えられてひと言

足立　和巳様

①昭和4年2月6日生まれ
②青垣町中佐治
③第1回目　昭和44年1月
　第2回目　昭和47年8月
④日産プリンス自動車販売㈱の本社に帰任したため（当時日産プリンス自動車販売㈱は山手線の田町駅から少し品川駅寄りに行った所にありました）
⑤エジプトのピラミッドとその中へ入ったこと、並びにスフィンクスの眼が当時の店を見ていたと言われたこと。
⑥遠阪小学校の同窓会が昨年開かれ、もう半分程しか同級生が残っていませんでした。父が88歳で亡くなり、母が95歳で亡くなりましたので、親孝行をするには両親よりも永く生きねばならないと思い、今から「私は120歳まで生きるよ」と言っています。だからあと40年間生きるつもりでいます。人間は126歳までは生きられるそうですから、6年間は遠慮しているつもりです。80歳の傘寿とはよく言ったものですね。まだ88歳の米寿と99歳の白寿がありますので、まだまだです。頑張らねば……！

〈生まれた年＝昭和4年・己巳・1929年〉田中内閣の総辞職を受けて登場した浜口内閣が厳しい緊縮政策をとったため失業者が増え、深刻な不景気に見舞われた。またニューヨーク株式市場が大暴落し、世界恐慌の口火となった。

祝寿の方々ご紹介

大垣　忠男様

①昭和4年6月11日生まれ
②山南町草部
③昭和21年3月
④大学受験（家族全員上京。後に、お墓も東京に移した）
⑤a丹波での最も印象に残ることとは＝県立柏原中学校内での工場動員。東洋ベアリングが校内に疎開：終戦まで旋盤工として働いた。
bそのほかでは、昭和28年5月、東京から博多に転勤になり、当時は航空機は勿論・寝台特急もなく普通急行で24時間かかりました。
昭和33年1月に現地で双子の男の赤ちゃんが生まれたこと。近くに親戚（人手）がなく育児に家内と苦労したこと。正月の年に一度の里帰りは赤ちゃん二人を連れて大変苦労しました。
⑥昨年12月末まで中小企業に勤務、今年から毎日が日曜日。家内並びに長男の家族（孫中3・女）次男の家族（孫中3・女：大学1・女）それぞれ皆、これといった病気もせず、健康で元気に暮らしています。他に趣味と運動をかねて週に3日程、家内共々社交ダンスに熱中しています。

前田　和市様

①昭和4年12月27日
②山南町草部
③昭和25年12月末
④当時在学した広島高師数学科を憂国の血？が騒ぐままに中退して、直ぐにも上京する手はずが狂い、やむなく和田村の村役場に勤めておりました。
しかし、自分の器の解らないまま途方もない夢は抑えきれず、二、三の打診の挙句、血縁の小父を頼って豊橋市近郊小坂井町の中小企業に身を寄せたのです。1年経たないうちに会社が業績悪化、昔保険で成功した小父の夢に乗って、夜逃げに近い先遣隊で都

落ちならぬ上京となりました。

⑤自分の器、器量、性格、いずれを取っても向いていないのに、世を憂う思いが強く、政治家が私の夢でした。しかし、現実は厳しく一日一日を保険の行脚で苦労するうちに、いつしかその保険が私の生涯をかけた仕事になっていました。

そして、今80年に近い人生で何が一番印象に残ることか。この紙面を借りるのは場違いと思いますが、他にはありません。それは、35歳の時に頂いた尊い仏縁です。

次男出生の折、陣痛近い家内の病室に盲腸急患の小学1年生が運び込まれ、10日程経って、その方のお父さんが訪ねてこられました。

お話が信仰の話に入ってから、私は引き込まれるように聞き入りました。捜し求めていたものに遇った気がしたのを覚えています。歩みが始まり、土曜日曜が待ち遠しいお寺参りになったのです。人生とは何か。生き甲斐とは。足を運ぶ度に、教えられるように歩むと、仏様は答えを下さるのです。

何でも自分中心の我の世界から、衆生済度を誓願とされる仏様のみ心に触れ、少しでも仏様の手足になれればと心が奮い立ちます。

私の小さな心の中にも、いつしか他人様のために、それを我がことのように、少しずつ祈り、願いを運ぶことが出来るようになったのです。足りないながら、そのように努めるうちに、幾度、難儀な事態から自分自身が、経営する会社の事業が救われたことでしょうか。至らない自分を恥じながら、微々たる精進に生きる喜びをいただいております。

月日ごと慈悲をこうむる人増して
真如み光世にぞ知らるる
（苑歌）

⑥前記、釈尊遺言の教えを説く教団は、日に日に目覚しく国内外に発展しております。私も命ある限り、教えに生きる喜びを語り伝えて、生かされる一日一日を感謝で送りたいと願っております。合掌。

◎寄附者芳名

岡田徹・渡邊直樹殿　一〇、〇〇〇円
（兵庫県東京事務所）
氷上ゴルフ会殿　一四、七〇〇円
植田　憲雄殿　一〇、〇〇〇円
塚口　智殿　一〇、〇〇〇円
村上　末吉殿　一〇、〇〇〇円
臼井小五郎殿　五、〇〇〇円
岡林　逸男殿　五、〇〇〇円
荻野　武殿　五、〇〇〇円
岸本　勲殿　五、〇〇〇円
谷口　捷殿　五、〇〇〇円
中居　篤子殿　五、〇〇〇円
堀井　隆川殿　五、〇〇〇円
足立　和孝殿　三、〇〇〇円
足立　正喜殿　三、〇〇〇円
足立　吉雄殿　三、〇〇〇円
生田　清弘殿　三、〇〇〇円
上田　正文殿　三、〇〇〇円
大野　義昭殿　三、〇〇〇円
金出　一郎殿　三、〇〇〇円

岸田　勇殿　三、〇〇〇円
久下　誠殿　三、〇〇〇円
大録　和代殿　三、〇〇〇円
田中登喜子殿　三、〇〇〇円
谷口　浩章殿　三、〇〇〇円
徳田　初治殿　三、〇〇〇円
藤田　純殿　三、〇〇〇円
山口　和久殿　三、〇〇〇円
渡辺　昌彦殿　三、〇〇〇円
澤田みさを殿　二、〇〇〇円
谷垣　宏造殿　二、〇〇〇円
三島　孝子殿　二、〇〇〇円
山口　泰男殿　二、〇〇〇円
池田　忍殿　一、〇〇〇円
稲岡　俊一殿　一、〇〇〇円
井本　馨殿　一、〇〇〇円
上　高子殿　一、〇〇〇円
上野　重喜殿　一、〇〇〇円
大地富美子殿　一、〇〇〇円
木呂子惠美子殿　一、〇〇〇円
坂上　勝朗殿　一、〇〇〇円
高見嘉都司殿　一、〇〇〇円

千葉　淳子殿　一、〇〇〇円
常岡　幹彦殿　一、〇〇〇円
中里　安子殿　一、〇〇〇円
大石佐代子殿　五〇〇円
笹倉　郁子殿　五〇〇円
塩見みつ系殿　五〇〇円
安原三智子殿　五〇〇円

懇親会スナップ

岡田　百二十三年も続いている関東氷上郷友会の会誌である『山ざる』は、今年で40号をおとどけすることになりました。創刊されてから四十三年になるのだそうですが、創刊当時から今日までお骨折りをいただいている、前会長の渡邊さんと前副会長の常岡さん、それに現会長の坂上さんに『山ざる』の生い立ちについて、お話をうかがいます。

◇生みの親は松山幸逸さん

渡邊　3号（昭和四十七年発行）から、わたくしがかかわったんだよね。だから創刊号と2号発行の際のいきさつについては、あまりよく知らないのだけれど、お金がないので、せめて表紙ぐらいはと二色刷りでやりましたよ。

常岡　創刊号には表紙画はなく、2号から親父（常岡文亀）の絵が表紙を飾ることになったようですね。題字は石橋治郎八さんが書かれました。

渡邊　松山幸逸さんが郷友会を動かした人だけど、

おそらく、彼が強引に文亀画伯にお願いしたのでしょう。この方は丹波人の標本。豪快な酒豪で人懐っこいお人でした。発行にかかわるすべての仕事を、それまでは、ほとんど一人でこなしておられました。

上　『山ざる』生みの親ともいうべき方ですね。

◇毎年発行は3号から

渡邊　おっしゃるとおりです。あるとき話があるとやってきて、「『山ざる』をやってくれ……」「なんとか軌道にのせたい……」と熱心に口説かれ、意気に感じて気軽に「やりますよ！」とお応えして、それからドップリとかかわりを持つようになり、どんなことがあろうと、毎年発行するという決意で臨みました。坂上さんの参加も、そのころからではなかったかな。

坂上　いえ、わたくしは9号か10号ぐらいのころからです。やはり松山さんの説得というよりは命令で、仰せつかるままに雑事をこなしていました。足立三治会長の時代です。以後、伴仲信次、村上末吉、渡邊隆男各会長の薫陶を受けてきました。

常岡　松山さんのような豪快な人はいなかったねえ！。それでいて、こまかいところまで目配り気配りのきく人でしたね。人間的魅力にあふれていて、わたくしは好きだったですねー。とても尊敬していました。

渡邊さんは台北へごいっしょしたときに、旅先にもかかわらず『山ざる』の校正をされていた。昼間の疲れもあるだろうに、これには敬服しました。昭和五十年ごろのことです。

渡邊　もう一人、編集のことでは足立源治さんも忘れられないな。松山さんとも親しく、例によって酒を飲みながら『山ざる』についてはもちろん、郷里のこと政治のことなどを、少年のように何時間も語り合ったものです。編集委員として参画してもらったのは、たしか16号ぐらいから22号までの期間だったけれど、とても里ごころの深い刺激的なお人でしたね。源治さんが来ると、みな田舎弁になってしまうんです。

坂上　わたくしは現代仮名遣いとか、送り仮名の付け方、常用漢字などについて教わることが多かったです。西行に心酔されていて、偶然かどうか、亡くなら

れたのは桜が満開の時節でした。

渡邊　「ねがはくば花の下にて春死なむそのきさらぎのもち月のころ」。あの一首がよく出ました。そこに田中篤郎さんが加わると深夜まで続いたものです。編集会議か山ざる会議だか……。（笑い）

◇親子二代で表紙画

岡田　常岡文亀画伯といえば当時、日本画壇で押しも押されもしない大御所のような存在の方だったとうかがっていますが……。

渡邊　松山さんが「おまえ、よう覚えとけ！　当代一流の文亀さんが表紙をただで描いてくださることになったぞ。将来、郷友会が手元不如意になったときにはこれを売ってつないでくれ！」と。それだけ文亀画伯は有名でした。

上　これを売れということは、原画もただで頂いたのですか。

渡邊　そうです。郷友会の貴重な財産として、ながらく管理していましたが、売れといわれると売れるものでもなく、ご遺族（常岡幹彦氏）のお手もとに戻すのが順当だろうと考えて何年か前にお返ししました。

常岡　2号の「栗」をはじめとして17号までが親父の作品です。そのころ親父は湘南サナトリウムで療養中だったので、わたくしが筆・硯など画具を運んでベッドの上で描いてもらったことを思い出します。10号の表紙画「茄子」を親父が私に手渡すとき「これでおしまい」と言いましたが、まさにこれが絶筆となりました。その後のものは、高島屋での個展に出したものや、郷友の方々にお買い上げいただいたものをお借りして、そのなかから選択掲載しています。

岡田　以来親子二代にわたって36号まで表紙画をお願いしたのでしたが、わたくしたちの年代は、知らない号のほうが多いので、一度機会を作って表紙画原画展とか、本誌バックナンバー展とでもいうべきものを開いてほしいものですね。

常岡　原画展のほうは、丹波市立植野記念美術館で、親子展を開催していただいたときに一度展示したことはあります。

坂上　37号～40号に提供していただいている可部美智子さんの彫塑もすばらしいですね。作品の表情が見る者のこころをホッとさせてくれる温かみを醸している。それに表紙画としての仕上がりも抜群。いやがうえにも本誌の格調を高めています。

◇「おまえたち、なんとかしろ」

上　『山ざる』誌は、会員名簿に記載されている人たちには、すべて無料でお送りしているわけですが、発行部数と経費は現在どれくらいなのですか。

坂上　毎年の決算報告でお知らせしていますが、千五百部刷って八十万円あまりかかっています。一冊あたりで五百三十円見当です（含送料）。賄いは広告費収入が七十万円内外で、不足分を一般会計から補填しています。

岡田　関係された皆様が何かとご苦労され、廉価で済んでいるのですね。

渡邊　当初は郷友会には金がなく、松山さんは「金がない！金がない！」「おまえたち、なんとかしろ」と、しょっちゅう私たち若い者の尻をたたいていました。発刊当初の昭和四十年代は諸物価も高く、なにをするにも金不足で、文章も削りに削ってページ数をへらし、コストダウンに努めたものでした。

常岡　広告も簡単には取れませんでしたね。「広告出してなんのメリットがあるの……」などという声もあったりして……。

渡邊　ともかく財源を確保するには会員を増して会費収入の増収をはかるにかぎるというので、柏原高校や氷上高校の同窓会名簿から、関東～北海道までの地域に住んでおられる方々を抽出して、ご当人たちのご意思とはまったく関係なく、会員名簿に加えたんだよね。

坂上　リスト・アップ、カード起こし、マッチングなど実作業はわたくしが受け持ってやりましたが、そのおかげで名簿収録人数が一挙に三倍近くに増えて（それまでは四百五十名ほど）、手作業ではとても立ち行かなくなって、コンピュータでの管理に移行しました。名簿欄は10号から現在の形態にして、奇数号

掲載としました。個人情報の問題が出てきて、33号以来掲載を見合わせていましたが、39号に復活しました。今後の掲載については、みなさんの声を聞いて決めたいと思っています。

岡田　今の広告集めはどのようになさっているのですか。

坂上　原則的には現掲載者に継続協賛をお願いしています。現在の『山ざる』の編集はホンゴー出版の池田忍さんにお願いしていますが、広告の継続掲載の依頼状発送と取りまとめもいっしょにやってもらっています。郷里からの企業広告は、編集委員でカメラマンの徳田八郎衛さんの努力に負うところが大きいですね。また、役員の方々や氷上ゴルフ会メンバーのご協力もあって、今号は新顔が増えました。

上　あまりにも変化が激しい昨今においては「継続は力なり」という言葉の大切さを感じます。これからも多くの方々の協賛が得られるといいですねえ。

◇若き日の郷友会

岡田　現在の郷友会の集まり「ふるさとの会」への参会者は、六十人から七十人程度のところに落ち着いているようですが、渡邊さんや常岡さんが初めて出席されたころの状況は、どんなものだったですか？

渡邊　はじめて顔を出したのは、大手町の三井ビルでの集まりでした。出席者は総勢十人ほどでしたね。思い出すまま名をあげてみると、芦田均さん、有田喜一さん、伴仲信次さん、堀川萬次さん、松山幸逸さん、渡辺金三さん、西川政一さん。みなおじいちゃんばかりで、ドアを開けてビックリして帰りかけた。そしたら「ちょい待て！」「自己紹介をしなさい」と。昭和三十年二十六歳のときのことです。怖れをなして、その後しばらくは出席していない。（笑い）

常岡　ほかに足立三治さん、石橋治郎八さんもおられたでしょう。芦田均さんは外交官から政治家になっておられ、親父が昭和二十八年に高島屋で個展を開いたときにお目にかかった。長身痩躯の垢抜けしたジェントルマンだったねえ。

坂上　わたくしがはじめて会合に出たのは、日本橋の野村證券ビルでのことでした。たしか昭和四十年だったと思います。場違いのところに来てしまったと

いう思いがしたのは渡邊さんと同じです。そのときに機関誌を出すという話があったように記憶しています。

常岡　わたくしは割合早くから親友の荻野武君といっしょに出ていました。荻野君は先輩方からの信任も厚く、後年、会場の手配から弁当の心配まで、一手に引き受けていました。わたくしもお手伝いに狩り出されることが多かったけど、注文した弁当が時分頃になっても届かないときなど、「弁当まだ来やへんナ」と二人でハラハラしたものでした。

岡田　何かとご苦労いただいて来たのですが、何かほのぼのしたものを感じます。

◇どうなる『山ざる』の今後

上　いまどきの情報メディアは、テレビやインターネット万能の時代。活字媒体の衰退がいわれて久しいですが、紛れもない活字媒体であるわが『山ざる』誌の今後はどうなるでしょうか。あるいはどうあるべきでしょうか。

渡邊　世界中で活字メディアはどうなるか、関係者はみな頭を抱えています。しかし、ものは考えようで、ある会合に出たとき、「テレビは音も出るし、映像を動かすことができる、出版物はそうは行かない。テレビにはかなわない」と言いましたら、ＮＨＫのプロが、「テレビをやっているわれわれから見ると、活字媒体ほど羨ましいものはない。蝉のように紙に食いついていつまでも鳴き続けている。映像や音は右から左に消えて行く軽い文化になって来た」と慨嘆していました。多分にわたくしへの慰めの気分がはいっているとしても、一面の真理ではあるだろうねえ。

常岡　座右の書はもちろん、十年前に買ったものでも、活字は必要に応じて繰り返し繰り返し読むことができるものねえ。たとえ一片の新聞・雑誌スクラップでもね。

渡邊　わたくしは家で、手の届くところに『山ざる』を置いている。どの号も克明に読み込んで校正しているから、そこにどんな文章が載っているか知っている。何度も何度も読みつくした文章でも、読むたびに訴え

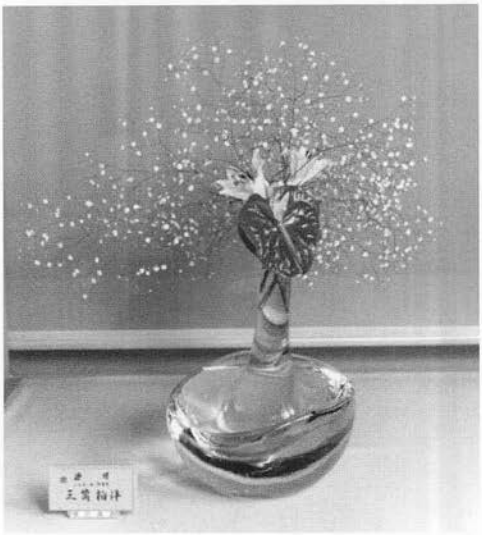
かけてくるものが違っている。活字の裏側にどう切り込むかで感じられるものが違うのだよ。文章ってすごいものだなあと思うね。こんな人がこんなことを書いていたのかと新鮮。ぜひ『山ざる』を読み返してほしいね。

坂上　『山ざる』のような非営利で、しかも超ミニコミの世界では、マスメディアの世界の電子・活字のせめぎあいの図は、直接関係ないのではないか。それよりなお一層、読者の声に真摯に耳を傾けながら、愚直に発行し続けることが求められるのではないでしょうか。とはいえ、近いうちにホームページなんかとの相互補完を考えなければならない時期が来るでしょうが。

渡邊　何度も出ては消えている話だけど、『山ざる』から郷里へのメッセージの発信、また郷里の人達から『山ざる』読者へのメッセージの受信といった、いわば情報のキャッチボールの場を、今後はもっと綿密に企画実行して行く必要があるのではないかな。

常岡　『山ざる』の今後はどうあるべきか、にわかには意見の持ちあわせはないが、わたくしにできることは絵を以ってご郷里の恩に報いるほかないと考えています。

岡田　郷土を同じくする者同士が侃々諤々意見を闘わせながら、楽しそうな飲み会を含めて、無償の熱意で『山ざる』を育て継続して来ていただいたことに感謝申し上げます。長時間ありがとうございました。



（いけばな・三雋柏洋）

出たぞ恐竜
―歯の特徴がより詳細に

丹波竜化石発見現場では、第三次発掘調査（1月9日～52日間）が終了し、調査結果が発表された。今回発見された竜脚類の6本の歯は、さまざまな成長段階のもので、「歯だけで系統を特定する手がかりになり、それを基に分布域も作成できる。世界規模の恐竜の体系をつかむ基礎資料になりうる」と、県立人と自然の博物館・三枝研究員。秋の第4次発掘では、頭部や四肢の発見が待たれる。

（平21・3・15）

丹波竜、地学の教材に

丹波竜の化石を教育現場に生かそうと、「丹波竜―恐竜化石から学ぶ」という地学教材が作られた。

6年生の理科の授業では、地学で「フクイリュウ」（福井県勝山市で発見された恐竜化石）について学ぶが、丹波竜の登場はまだ時間がかかるので、市内の小学校理科担当教諭でなる研究部会と、市教育委員会が立ち上がり、丹波竜について議論を重ねて「ここにしかない教材」を作り上げた。研究の進展状況に併せ、随時見直す。

中学校理科部会でも、教諭たちが、地学の授業で使える丹波竜を盛り込んだ教材づくりを始めた。市教委は「丹波に来れば地学の勉強ができるという土地にしていきたい。子どもたちに夢とロマンを沸き立たせてくれる」と期待している。

（平21・4・5）

丹波竜と特産物で経済効果を

丹波市の「恐竜を生かしたまちづくり課」は、従来の観光振興や商品開発では民間への波及効果が薄いことを認識したうえで、より経済効果を生み出す戦略プロジェクトチームを立ち上げることにした。丹波竜と特産品を包括した新たな地域ブランドの確立を目指す。現在チームメンバーの人選中。市、県、商工会、観光協会、市民などの連携で地域資源を活用した新商品の研究・開発を行い、「民間実行部隊」で地域経済の活性化を狙う。（平21・4・23）

「歯」は定説を覆すか？

第3次発掘調査（1月～2月）で発掘した岩石のクリーニング中に、肉食恐竜「ティラノサウルス類」の歯の化石が見つかった。歯からの推定体長は約5メートル。同類は1億6500万年前の出現から1億2500万年までは小型だったのが、8400万年前には体長10メートルと大型化している。

この進化の過程に化石がほとんど見つかっていないため、巨大化の時期は9900万年～6500万年前と推定されていたが、今回発見の篠山層群下部層は1億4000万年～1億3600万年前という古い地層のため、巨大化の時期がさらに遡ることになるという。「丹波竜（竜脚類）以外の種の進化を知る上でも、この発掘現場の重要性は全世界的に高まった」と三枝研究員。

（平21・6・25）

懐かしい丹波柏原

谷垣　尚（柏原町）

齢も八十路半ばともなると、昔の事ばかり懐かしく思い出されます。私は柏原には小学校・中学校時代と戦後の大学時代合わせて十四年間住んでいました。軍隊生活四年、大学卒業後は横須賀に四十余年、東京に十年、北九州に七年と転々とし、今も横須賀市に住んでいますが、柏原が一番懐かしく、そして父母の眠る此の地こそが我が魂の帰る処だと思っています。

一、宮津から柏原へ

私は昭和八年八月十八日、京都電燈（現関西電力）柏原営業所長として赴任した父について、一家で丹後の宮津から山の中の柏原へと引っ越してきました。兄が小学五年生、私が三年生、弟が一年生、妹はまだ幼稚園入園前で、屋敷大手の建勲神社の前、宮垣町長が住んで居られた家に移りました。この家は、織田藩の

山林奉行の屋敷で、今も玄関の長押（なげし）には槍掛があり、昔の風情が残っているので、お祭りの時は家の前で武者行列の写真やテレビが撮られ、ＮＨＫでも放映されました。現在は兄亡き後の嫂が住んでいます。

崇広小学校の正門は大きな長屋門で、職員室は藩邸が使用されて居り、一本の老松が聳える中庭では休憩時間に児童達がよく毬蹴（まりけり）をして遊びました。校長は鳥居諦岸先生、私の担任は三谷謙三先生、級は男子生徒七十二名の大世帯でしたが、五年生進級時に分かれて私は一組となり、佐々木武雄先生の御指導を頂き、小学校在学期間は短くても実に色々な想い出があり、運動会の賑わいは今もよく憶えています。

娯楽の少ない時代で、父兄だけでなく町民が沢山大内山の下に陣取って飲食しながら応援してくれました。日露戦争に従軍して『右剣左筆』という小冊子を書いた松井拳堂さんという名物おじさんが一際目立っていました。フィナーレの総行進は全校生徒が一斉に運動場を行進する崇広小学校独特のもので、今も瞼に浮かびます。

入船山下五ヶ年の中学生活では支那事変が勃発し、出征兵士の歓送、遺骨の出迎え、勤労奉仕と日に日に戦時色が濃くなり、大東亜戦争へと進んでいきました。楽しみにしていた九州修学旅行は中止となり、三十名が海軍軍事訓練に参加、残りの級友達は大山登山を行いました。私は中学入学後すぐ庭球部に入り運動に熱中していましたが、体は小さく体力も劣っていました。三年生の時、祖父の遺言で軍人になれと言われ、体格検査にパスしなくて苦労しました。

二、戦後の柏原・鴨庄

漸く体格検査に合格して陸軍士官学校に入校した私は、終戦時には重爆撃機のパイロットとして任官しており、特攻隊要員になっていましたが、九月に復員、柏原に帰って来ました。大変な食糧難の時代、次々に復員してくる子供達を抱えて、親の苦労は如何ばかりであったか、と今更の如く偲ばれます。

弟は姫路高等学校に転入し、私は鴨庄に疎開していた阪大理学部の仁田研究室で原子力の勉強をすることとなり、仁田教授、関助教授、田口先生等のご薫陶を頂きました。（仁田教室については「山ざる」39号に

丸川健三郎さんが鴨庄村の戦中戦後の中で書いておられる。星埜さんは二年生だったと思う）鴨庄では大槻明治郎さんのお宅に下宿させて頂いて大変有難かった。小学校の校長は崇広小学校に居られた荻野義夫先生。私の親友青木俊夫先生も復員してこられたので、よく小学校に出かけて六年生には話をしたこともありました。しかし間もなく、私はＧＨＱの追放令を受け方向転換の己むなきに至り、理学部を退学しました。

三、工学部以降

その後、私は医科大学に一年通学後、阪大工学部で溶接工学を勉強しました。大学卒業後は浦賀船渠（ドック）・住友重機械・新日鐵・城水鉄工所と重厚長大型の工場で、造船をはじめあらゆる大型鉄鋼構造物の建造・製作に従事し、祖国の再建と発展に貢献出来たことを喜んでおります。一方、経済的発展に反比例して日本人の精神が崩壊し、国家存亡の危機にある現状には断腸の思いであります。

両親亡き後、私はお墓のある北中の成徳寺の近くの、昔町長であった本庄実次さんの立派なお宅を譲って戴き、父母の命日やお盆など年に何回かは柏原に帰ります。商店街の中心が移り、旧町内は寂れて城下町柏原は大変変わってしまいましたが、小学校・中学校・八幡神社など昔のままで、あちこちに変わらぬ面影を残しています。おだやかな丹波の山々を眺めると、心が和み、水田からは何とも言えない稲の香が運ばれてきて、つくづく平和なふる里を感じます。

昔の同級生も少なくなりましたが、昨秋何年振りかで崇広小学校の同級会が喜作でありました。片山英夫、土谷正男、岡林政雄、磯尾定吉、榊賢夫、内堀保、吉竹雅郎、尾松芳男、西山孝、泉君枝、村岡文子、足立節子の諸君と私で十四名が参加し、卒業以来初めてという人もあり、昔の懐かしい友の顔が次々と浮かんで実に楽しい集まりでした。

これからも元気な間は出来るだけ多く柏原に帰り、あちこちを訪ね、旧友達に会い、過ぎし日を懐かしみたいと願っております。

ふるさとの歌 ふるさとの人

臼井　小五郎（氷上町）

私のふるさとは幸世村柳町である。今、幸世という地名はない。柳町の地名は明治になって県道が新しく作られ、県道沿いに幸世小学校、村役場、農協、郵便局、駐在所などの公的施設が作られ、それを取り囲むように病院、酒屋、文房具店、自転車屋、魚屋、米屋、お菓子屋、指物屋、鍛冶屋、散髪屋などの店舗が軒を連ね、名実ともに幸世村の中心街になり、柳町の地名（俗称）をつけたのではないかと思う。子供のころは柳町に住んでいることになんとなく優越感を持っていた。今は、ここに住んでいる人も昔からの地名「絹山」を使っているようである。

柳町から西を見ると、二㎞ほどのところに安全山（写真）が聳えていて、柳町から見ると富士山のような美しい姿をしている。柳町のすぐ西には佐治川が南北に流れていて、夏は水泳場であり、魚とりをする遊び場であった。佐治川の両岸には高さ四～五メートルの堤防が築かれていて、ここに立って見える景色が子供のころの私のふるさとであり、歌に出てくる景色は全てここから見える景色である。

四月になると、麦がにわかに緑を濃くして背丈が伸び始め、菜の花や蓮華の花が咲いて、堤防から安全山の方を眺めると、モザイク模様のように美しい。夕日が落ちるころの景色は唱歌「朧月夜」そのものである。

里わの火影も森の色も　田中の小路を辿る人も
蛙の鳴くねも鐘の音も　さながら霞める朧月夜

この歌を口ずさむと、田んぼ仕事を終えて家々に帰っていく人たちの若いころの顔が浮かび、終戦間もない頃の質素で純朴だった日々が甦ってくる。

恥ずかしい話であるが、「田中」とは、小学校から一キロ弱のところにある田中という部落のことだと思って歌っていた。

堤防から町の方を眺めると、小学校の美しい講堂が大きく見えていた。木造洋風建築で淡いクリーム色と水色のペンキ仕立てであった。中に入ると美しい吊天井の模様が目に入る。すでに取り壊されているが、勿

体無いことをしたものだと思う。柏原高校時代、父の仕事の関係で、氷上郡内のほとんどの中小学校を訪れたが、こんな立派な講堂はなかったように思う。

小学校五・六年生の担任の先生は師範学校出ではなかった。そのせいだけではないと思うが、歌とオルガンの演奏はかなり下手であった。そのことは先生自身が十分ご承知で、音楽の授業にはあまり熱心ではなかった。朝から雨が降り続いていたある日のこと、この講堂のステージのそばにあるピアノのまわりに生徒を座らせて歌の授業がはじまった。

佐々木信綱 作詞、小山作之助 作曲の名曲「夏は来ぬ」である。

五月やみ蛍飛びかい　水鶏なき卯の花咲きて
早苗植えわたす　夏は来ぬ

先生のピアノ伴奏に合わせて歌うのだが、途中で伴奏を間違われる。その度に「すまんすまん、もう一回はじめから」を繰り返される。生徒達は、どこまで間違わないで伴奏されるかニヤニヤしながら歌った。最後まで間違わずに歌い終わったとき、先生も生徒も一緒になって手をたたいた。薄暗い講堂の片隅でのこのシーンは、必死になって伴奏をされていた先生の表情とともに忘れることが出来ない。

それから三年後、遠阪小学校で久しぶりにお会いした時「小五郎君、ベートーベンの『月光の曲』が弾けるようになったよ！」と満面に笑みを浮かべながらおっしゃった。先生の前向きなお姿に感動した。

この先生は、私が自衛隊を定年退職する前に亡くなられた。そのこともあって、退官した年の夏に帰省したので、小学校、中学校でお世話になった先生方にご挨拶に行った。その中のお一人に小学校三・四年生で担任だった高橋幸子先生がおられる。あらかじめお伺いする日と概ねの時間はお知らせしておいた。青垣町

佐治のご自宅の前に着いたら、先生が椅子に腰掛けて待っておられた。先生はもともと背の低い方であったが、ポッチャリ型の体型だったので、小学生の僕たちにはそんなに小さくは見えなかった。しかし、目の前の先生は別人かと思うほどに小さかった。聞くところによると、骨粗しょう症で身長が低くなったとのことであった。僕が道に迷わないよう一時間ほども前から、八月の暑い太陽の下で長時間待ってて下さったのである。とても優しい先生で、泣きながら生徒を叱っておられた。映画「二十四の瞳」に出てくる「泣き虫先生」そのもののようだった。

童謡「月の砂漠」を教わったのはこの先生からである。この曲は童謡なので音楽の教科書には載っていなかったのであろう。黒板に背伸びしながら楽譜を書かれていた先生のうしろ姿が懐かしい。それまで習っていた唱歌とはどことなく違うメロデーであったが、歌いやすく神秘的な感じのする歌であった。高橋先生は、僕が自衛隊に入隊することに反対であった。毎年の年賀状に必ずそのことが繰り返し書いてあった。久しぶりにお会いしてそのことを話しているうちに、先生になろうと思われたきっかけと理由が、私が自衛官を志した理由とよく似ていたことを知り合った。

私の家の斜向いは鍛冶屋で、家主のおじさんが養子のお婿さんと毎日仕事をされていた。当時の僕たちは、学校から帰ってきたら外で遊ぶのが習性になっていたが、冬の雨の日は遊び場に困った。そこで目に付けたのが鍛冶屋である。雨をよけるだけではなく暖かい。二人の仕事振りは、唱歌「村の鍛冶屋」そのものであった。

暫時もやすまず　槌うつ響き
飛び散る火花よ　はしる湯玉
鞴の風さえ　息をも継がず
仕事に精出す　村の鍛冶屋

歌が上手だったあのおじさんも若婿さんもすでに故人である。

数年前に世を去った演出家久世光彦が書いた『マイ・ラストソング』という本がある。人生を終わる最後の瞬間に聞きたい歌、歌いたい歌は何か、という問いかけと何曲かの紹介である。今の私のラストソングは迷うことなくあの講堂で歌った「仰げば尊し」である。

昭和二十三年の柏原中学校学芸会

丸川　健三郎（市島町）

昭和二十三年というのはまだ十分に戦後の混乱期、変革期を引きずっている年であった。教育制度改革に伴い、新制の柏原高等学校が発足したのが、この年の四月である。従って、旧制の柏原中学校はこの年の三月でその役割を終え、その半分は上級生を収容して高等学校となり、半分は下級生を収容して併設中学校と名前を変えたのであった。

奇しくもこの年（正確にはその前年）に中学校は創立五十周年を迎えていた。表題の学芸会はその記念行事として行われたものである。『柏原高校百年史』をひもとけば、この年の五月に創立五十周年記念行事が挙行され、そのなかで、五月三十日と三十一日に柏原劇場を会場として「学芸会・音楽会」が実施されたことが分かる。多分、初日は学内公開、二日目は一般公開だったのだろう。

この学芸会は私にとっては忘れがたいものだが、残念なことに『百年史』ではたったの一行で終わっている。当時、私はまだ小学六年生だったので、これを記録するには、はなはだしく不適格なのだが、それを承知で少し書いてみたい。この行事に限らず、この年代、この変革期のあたりの事柄は歴史の掘り起こし、あるいは母校の歴史の掘り起こしとして興味がある。

#

さて、「学芸会」の当日である。私と兄（次兄、中学一年生）は昼食を早くすませて、学芸会鑑賞へと出かけた。学芸会開催のことは当時、併設中学校の生徒だった長兄から聞いたものらしい。柏原までは約一里の道のりと汽車で三駅の旅程だから、ちょっとした遠出である。会場の柏原劇場に着いたときには既に学芸会は始まっており、劇場の入口のあたりはかなりの人だかりであった。戦後のあの頃は面白い時代で、旅回りの芝居であれ、村の青年団の演芸会であれ、何事によらず人が集まったのである。「柏原中学校学芸会」の人気も、その時代の雰囲気から考えねばなるまい。

とにかく、劇場の入口は人でいっぱいで、扉が閉まらず、人々はそこから首だけ突っ込んで覗き込んでいると言った状態だった。そこをどのようにして通り抜けたのか記憶が定かでないが、私も兄もうまく劇場の中へと潜り込んだのは確かである。

劇場の中では、ちょうど劇が進行中であった。尾崎士郎原作の「人生劇場」であった。演じているのは中学校の生徒（つまり、新制に移行したばかりの高校生）に違いないのだが、ずっと大人っぽく見えたことを覚えている。劇は途中からであったし、難しい言葉をちりばめた台詞ばかりだったようで、その中身は何も分からなかったが、主人公が「アオナリヒョウキチ」（青成瓢吉）と言う変わった名前の持ち主であることだけはキャッチできた。

学芸会はそのまま音楽会へと続いていた。次に舞台に出てきたのは、中学校の先生方四名であった。特別出演だったのだろう。弦楽四重奏曲だったに違いない。しかし、恥ずかしながら、私にとってヴァイオリンやチェロを見るのは初めてのことだったので、弦楽四重奏曲を鑑賞するには少し早すぎた。先生方の熱演も、私にはギーコギーコとだけしか聞こえなかった。ただし、残念ながら、先生方のギーコギーコは途中で止まってしまい、結局、演奏は中止となった。どうも先生方の練習不足だったらしい。

音楽会のハイライトは二つの独唱であった。先ず男子生徒の独唱があり、続いて女子生徒だった。この時、新制柏原高等学校はまだ始まったばかりの男子校であり、女学校（旧制の柏原高等女学校）との合併が実現するのはこの年の九月である。従って、この女子生徒は賛助出演という形だったのだろう。

男子生徒の歌ったのはシューベルトの「野ばら」だった。「わらべは見たり、野中のばら」と言えば、自然に歌い出したくなるような、ご承知の曲である。男子生徒はリズムに乗って調子よく歌ったので聞いていても気持ちがよかった。しかし、どう言う訳かこの歌唱の間、観客席が少しざわついた。どうも柏原には男子が歌を上手に歌うことに納得しない気風があったらしい。『百年史』にも、その昔、新任の音楽教師に生徒が反抗したという記録が載っている。

次は女子生徒の歌唱だった。幸いこのときには会場

は静まっていた。女子生徒の特別出演ということで注目が集まったということもあったかも知れない。舞台に現れた小柄な女子生徒に、観客の目と耳は集中したと見えた。歌は北原白秋作詞、山田耕筰作曲の「砂山」だった。この詩には中山晋平も軽快な調子の曲を付けているが、私は耕筰のものの方が好きだ。しかし、この曲を聴くのはその時が初めてだった。

歌はピアノによる短い序奏の後に始まった。

「海は荒海　向うは佐渡よ」

私は最初の一節を聞いただけですっかり心を奪われた。ゆっくりとした低音部に続いて、伸びやかな高音部が来る。そして、その曲想の哀れさが心に沁みた。会場の照明は今や薄暗く、歌い手である女子生徒だけを明るく浮かび上がらせていた。女子生徒は顔を上気させていたが、声にゆるみはなく、目は強く前方を見つめていた。

「雀なけなけ　もう日は暮れた」

「みんな呼べ呼べ　お星さま出たぞ」

私は最初の一段が終わるときには、もうすっかりこの曲の虜になっていた。とくに最後のフレーズの物悲しい調べには、涙がこぼれそうになるほどに心を動かされた。

「暮れりゃ砂山　汐鳴りばかり……」

曲の進行につれて、私の目には明るい舞台の向こうにほの暗い海が見えてきた。そして、さらに海の向こうに黒々と横たわる佐渡島がはっきりと見えた。

最後まで歌い終わると、会場は拍手に包まれ、私も我に返った。明るい舞台の上には女子生徒がまだほほを紅潮させたまま、硬い表情でお辞儀をするのが見えた。

＃

この学芸会はもう何十年も前のことだから、その後、何十回となく「砂山」を聴いはずだが、このときを越える感動に出会ったことはない。あの学芸会の男子生徒や女子生徒は、その後どのような人生を辿ったであろうか。多分、専門の歌手にはならなかっただろうが、あの舞台の記憶をしっかりと持って生きて来られたに違いない。

私は舞台で歌ったことはないが、学芸会の劇の思い出なら少しある。他に弁論大会というものもあった。

中学生の時に弁論大会の学校代表になり、隣村の中学校で開催された弁論大会に出場したものの、さんざんの成績だったことを思い出す。隣村からの帰り道は長い道のりだったが、恥ずかしくて、友達に話しかけられないように、皆から少し離れて歩いていたことを思いだす。しかし、良い思い出も良くない思い出も、若い時の思い出は貴重である。

#

ずっと後年のことだが、所用で新潟へ行くチャンスがあった。あの学芸会のときの「砂山」のことを思い出したので、詩の現場を見届けたいと言う思いに駆られ、佐渡島が見えるはずの海岸まで行ってみた。「砂山の碑」はすぐに見つかった。白い石碑は人の背丈より高く立派なもので、「砂山」の詩が彫りつけられていた。しかし予期に反して、その碑は砂山ではなく、林の中にあった。私は林を抜けて海岸に出た。しかし、残念なことにそこにも砂山はなかった。海岸には自動車の通れる舗装道路が続いていたが、その海側はコンクリート製の岸壁になっており、下を見下ろすと、岸壁の根元には護岸用のテトラポットがぎっしりと詰まっていた。これはまあこれでよろしい、と考えた。

この海岸に沿って行けばどこかに砂浜があり、そこに砂山があるのだろうと思った。そして、日暮れを待つことにした。遥か沖を見ると、佐渡島はそんなに近くないことがすぐ分かった。水平線のあたりは低い雲が立ち込めていて、島影はよく見えなかった。

やがて日暮れになり、あたりはだんだんと薄暗くなってきた。私は海岸（岸壁）に立ち、暮れてゆく海を見つめた。幸い海岸の道に人通りはなく、汐風のにおいも、汐鳴りも申し分なかったし、お星さままでもちらほらと見え始めた。そのうちに、うす暗い海を背景として、ぽっかりと明るい舞台が浮かび上がり、そこにはかの歌姫が現れるはずであった。しかし、なかなかうまく行かなかった。何故か私の背後が気になって、気持ちが集中できないのである。さらに暗くなってくると、事態がはっきりしてきた。街路灯が邪魔をしていたのである。暗くなるにつれて街路灯は一層明るくなり、ついには岸壁の影をくっきりと海に映し出すまでになった。私はあきらめて、街の雑踏の中へと戻ることとした。

峠のふもとの我が故郷

山中秀雄（青垣町）

私の生家は旧遠阪村遠阪、丹波の最北端に位置するところ。前も後ろも右も左も山また山の山村である。米麦・養蚕・木材・木炭、冬は酒蔵、寒天つくりへの出稼ぎの集落。小学校へは四キロ、隣の佐治町へ八キロ、柏原へは二四キロと自転車通学で一時間半、幸世中学が中間点である。

冬の朝、道路の水溜りが凍りつき反射光で眩しかったこと、霧が服に纏わり霧氷と化す。雨が途中で霙に変わり傘の柄が曲がりくねったこと。雨の向かい風の日、一時限目の始業時刻に遅れて自転車置き場に辿り着いた。エネルギーを使い果たし、ふらふら状態。自転車を留めようとしたが倒れ掛かり、引き戻す余力なく倒してしまった記憶を思い出す。当時、学校には女生徒にのみ寄宿舎が残されていた。

近くの家庭から荷物を預かり、そこの女生徒へ届けるのに二の足を踏んだものである。

#

さて、遠阪は峠ふもとの集落である。旧くから但馬の影響を強く受け、早くから開けた土地柄であり、但馬街道の宿場街の様相を呈した処でもある。私の記憶している屋号でも紀州や、津の国や、尾張や、泉や、東の森や、松屋、漆や、赤玉や、お膳や、糸や、桶や、饅頭や、豆腐や、升や、桶や、それに庄屋など……。

京、大阪から但馬の国へ。我が家の田んぼの畦に石の道標。「左　今出熊野権現社・右　きのさき。峠を越すと但馬国　柴村・梁瀬・和田山へ」。今は国道（有料トンネルも新設）に昇格。この峠は昔、明智光秀軍の丹波攻めや、大石内蔵助夫人りく女が山科国よりの帰途越した場所である。車の通れる今の路巾にいつごろなったのかは知らないが、所々狭い旧道が顔を出す。東海道の松並木を思わせる巨きな松ノ木が峠の頂き近くに数本残っていたが、いつの間にか絶え果てた。

昔は車の通行も少なく、大八車の行商の人に、牛で先引きを頼まれて峠の上まで行くことがあった。私たちは、この峠が子供の頃の遊び場だった。牛を道路に

放ち草を食めさせ、石投げ、キャッチボール、水浴びを満喫、真っ黒に遊んだ。

雪もかなり積もった。小学校の修学旅行はなく、思い余っての教師の計らいか、夏休みに天の橋立に海水浴に行った。トラックの荷台に揺られ峠を越して。海を初めて見る。このとき京都府警の検問に合い、道路交通法違反で運転手、教師が柏原の家庭裁判所に出頭とか。同じく捕まった他のトラックは荷台に板の囲いをして、警察署の許可を取っていた模様で放免。

#

北に向かえば京都府との府県境、千原峠がある。ここは徒歩の道。頂上に岩をくりぬいたマンポと呼ばれる隧道があり、清水が染み出すところ。初夏に山百合が咲き乱れ、秋にはぽっかりと口を開けた柴栗が実を落とし、趣き深い峠道だった。

幸世尋常高等科三年を出た一回り年上の次兄が少年航空兵に。早朝真っ暗な峠をただ一人で越し、所沢に向かったのもこの峠。営舎から　のらくろ上等兵ではなかったが、この類の漫画本を贈ってきてくれたのが私の本に接する最初であった。

昭和十九年、次兄が休暇を終え、これが最後と言いつつ戦地に赴いた。私が小学校に上がる前の年、弟を背負った母と頂上まで見送りに行く。幼い私には何も知る由もなかったが、このときの母子の心境は今にして想像がつく。先に登っていた次兄が蝉を捕まえたと、後戻りして私に手渡し呉れた思い出深い峠でもある。この峠を越して山陰線、下夜久野駅に出る。今では通る人影なし。

裸祭りの熊野神社でもよく遊んだ。遠阪村、神楽村、柴村の郷社にして、春秋の祭礼には多くの参詣者が峠を越して境内が溢れた。生命の神として勢力は峠を越え交流が盛んであった。

#

遠阪は柏原・石生へ行くよりも福知山に買い物に行くほうが交通の便がよかった。嫁入仕度、家具など全てそのようであった。従って婚姻関係も但馬、京都府側との行き来が多く存在していた。福知山へは他に榎峠、穴の裏峠がある。いずれも車通行可。

遠阪村の山垣、中佐治には五世紀頃の古墳が数箇所点在している。先の戦時中、近所の子供が古墳の近くで拾ったと言って輝く金環を持って遊んでいた。小学校の教師がそれを知り、これはいけないと何がしかの品と交換し、保管されているのを成人してから見せてもらった。

山垣には丹波の足立姓のルーツ足立遠政の城址、墓所がある。一三三二年、武蔵国より地頭として移り築城したもの、防備のため城址も方々に残されている。

子供の頃、近所のガキ大将が、東京を見せてやると言っては、両手で小さい者の両方の耳を引っ張り上げて悪戯をしていた。今何処で何をしているのやら。そのような縁でもあったのか、上京以来半世紀有余が過ぎた。

人生さまざま、失敗ばかり。これも小学前の経験。当時十五、六歳の少年が川原で指し針という方法で鰻釣りをしていた。やっと一匹吊り上げた。じっと見ていた私が、もう一匹釣れると言いねと言ったとたん、彼のいわく、釣れたら貰おうと思っているのだろう！

小学六年のとき、学芸会の役割決めの席で。先生がA君〇〇の役。黙っていればいいものを、小生が〇〇ええな！ と冗談を発した。お前にこの役出来るの

か？　と叱られる。

後年、幼馴染が事業を始めることになった。休日ごとに手助けに通った。勤め先の主いわく「手前そんなに羨ましいのか。そんな暇あったらどぶ掃除でもしろ！」

いづれも思っても考えても見なかったことばかり。冗談と好意は、人・ときによってはとんでもない誤解を他人に招くことあり、心すべしと悟る。

時代と共に故郷の風習・住民の意識も変わってしまった。年に一、二度の帰省はいま浦島である。日本人、丹波人のよさは何であるかもう一度噛みしめてみたく思う。

文筆家の文の巧みさ、歌い手の歌のうまさ、滔々と発する弁舌家、はたまた種々ものを考え創り出す学者の頭脳は。凡人には不思議あるのみ。

才も財も持ち合わせなく、何の弾みか古稀を過ぎ幼き日の思い出を認めてみた。功なり名遂げし人々の紙面に寄稿するのは恐れ多く憚るばかり。恥を忍んで記す。辺境の故郷紹介まで、人様に迷惑のかからぬ老後を歩みたく思う一丹波人。

丹波の友・三題

上野　重喜（氷上町）

この夏、七月末に三日間ほど丹波に帰郷した。墓の草取り・掃除が目的だった。故郷を後にした長男としては、日ごろ心ならずもなおざりにしがちな郷里のことが、いつも頭から離れないもので、郷友の方々の多くも同じ思いであられるに違いない。

墓の守は、もっとも気がかりなことの一つで、親戚やマキウチの人たちに心配をかけるのも心苦しいので、今回、地元（氷上町）のシルバー人材センターにお願いして、年に三回ほど掃除と供花をしてもらうことにした。これも先日、小中学校時代の同窓会で、友だちから情報を得たおかげである。

故郷の友はありがたい。私の生家（写真）の母屋は、江戸時代末の建築で老朽化し、とくに屋根のいたみが激しく悩みの種であったが、幼友だちの一人が買ってくれた。彼、高橋義治君は、お父さんの代から宮大工

で、郷土の文化財保護委員でもあり、古い家をそのままに修理して保存してくれている。それどころか、亡母が新建材で改築したところなど、昔のままに復元してある。

「上野君、この家は、屋根さえ修理をしといたら、まだ百年でも平気や。都会の君の家よりずっと長もちするで」。ほんとうは、陋屋の修理保存は、たいへんなはずだが、高橋君はそう言ってくれた。我が家は、大正の末ぐらい、八十年余り前までは、旧成松の商店街の北端で、農具・雑貨を扱う荒物屋であった。元

は、伯耆（今の鳥取県）から来たというので、屋号を「伯耆屋（ほうきや）」と言った。高橋君の話では、この家の造りは、大阪の商家の形で、生活のにおいが、そのまま残っているところが良いとのことだった。太い梁も剥き出しで、いかにも質素ながら頑丈な造りだった。

＊

高橋君に私の生家を買ってもらうにあたって、仲介をしてくれたのが、同じ小学校時代からの友、岡本吉正君である。上野が家の処理に困っているので、何とかしてやろうや、と高橋君にもちかけて話をまとめてくれたのである。岡本君は、丹波ひかみ農協の幹部として活躍した人、その後、福祉施設や中国語学習グループのお世話をするなど、地域の文化福祉活動に格別の情熱を注いでいる。

今回の帰郷時も、岡本君に車を借りたり、墓掃除につきあってもらったり、線香やシキミの用意まで、この上ない配慮に与った。

それに今回の忘れ得ぬイベントは、岡本君の提唱で「丹波の文化を語る会」ともいえるような集いが開かれ、私も参加させていただいたことである。場所は、

石生の水分れの割烹旅館「大和」、集まられた方々は、まさに多士済々で、既に郷里を離れて五十五年にもなる私には、丹波について知らないことを、さまざま学ばせていただく最高の機会となった（写真）。

この集いは、まったく政治色なく、利害に関わらず、ただ、丹波を語り合う会であったがゆえに、一献傾けながらの談論風発、自由なダベり合いの中で、あっという間に時間が過ぎた。ね「色のつかない会」ということで、別段プライバシーの問題もないと思うので、お集りの方々を五十音順に列記させていただく。

（敬称略）芦田拓雄、足立青宙、植田憲雄、上野重喜、臼井晴子、岡本吉正、荻野正裕、小田晋作、片山美代子、勝川浩幸、河津義幸、木村寿彦、高見吉一、田口勝彦、時里孝子、余田浩子。

以上のみなさんについては、この郷友会でもおなじみの方もあり、みなさんの中には親しい方もおられるにちがいない。植田憲雄先生は私の恩師でもあり、私には、それぞれの方とのご縁が想い出され懐かしいかぎりだった。

＊

勝川浩幸君も小学校以来の友だちで、母親同士も柏原高女の同級生という間柄である。勝川君は、校長として、また丹波市中央図書館の館長としても活躍した人だが、囲碁六段の達人、丹波市のみならず、関西の棋界で有名である。この三月、NHK・BSの番組「熱中時間」で、アメリカの大学教授との郵便碁（以前は手紙、今はEメールで一手ずつ送り合う）が紹介され、話題を呼び一躍有名になった。ところで、ここでは、

囲碁の話ではない。

昭和二十八年から十年間ほど、神戸大学の教育学部に森信三という教授がおられた。元来は、京都大学哲学科で西田幾多郎の門下だった。旧満州の建国大学の教授なども務めた人で、教育界の師父として今なお慕う人が多い。勝川君は、神戸大学教育学部の出身なので、森先生について尋ねたところ、森先生は、丹波にも足を運ばれていたとのこと。というのは、当時、大路村（今の春日町内）の第二小学校に、綴り方（作文）教育で有名だった小西健二郎先生がおられ、この小西先生のところを森先生が訪ねられていたというのである。小西先生は、地元、丹波ではさほど知られていないが、その道では全国的に有名な方で、私も大阪のＮＨＫ在勤中お目にかかったことがり、何度かお便りもくださった。

もう一人、丹波には、日本の国語教育界の大先達ともいえる芦田恵之助という方があり、二五巻もの国語教育全集の著作もある。東京高等師範付属小学校（今の筑波大付属小学校）で教え、綴り方教育を全国に広め生徒の自主性を重んずる教育の先覚者だった。市島町下竹田の出身で、今も竹田小学校には、芦田先生直筆の掛け軸が残っており、顕彰会も平成九年に生まれた。実はこの芦田先生が、森信三先生と互いに尊敬しあい肝胆相照らす仲であった。

今も、このお二人の教えを受け継ごうという機運は全国的に盛んである。思うに小西先生も芦田恵之助先生に影響を受けられたに違いない。

教育界には、他に東京大学に印度哲学科を創設した村上専精師や日本女子大学校（現日本女子大学）教授で、後に校長も務めた井上秀（ヒデ）女史、俳界では、古くは田ステ女、その後、高浜虚子の高弟として知られた西山泊雲、野村泊月兄弟、さらには細見綾子といった諸師が輩出し、詩人の深尾須磨子女史も有名だ。

丹波市は、各界に人物を輩出しているが、肝心の郷里においてすら忘れられようとしている人々も少なくない。そうした郷里の先達たちの記録を後世に伝える努力が、人々の流動で資料が紛失しやすい現今こそ極めて大切であると思う。「山ざる」誌は、お互いの断片的な郷土の知識を交換しあう場としても、大いに有意義であると思う。

八六人一クラスの思い出

形田恒夫（山南町）

昨年還暦と定年を迎え、もう少しパート契約で延長しませんか、と三八年近く勤めた会社から誘いを受け、迷いはあったが、同じ仕事の延長なら頑張れると思い受けた。

そんな時節に、「山ざる」誌からの寄稿依頼を受け取った。しかし、定年を迎えた虚脱感が残る状態で、何を書けばよいのかという思いで月日を過ごした。

五〇〇戸余りの村落の山里で育ち、小学校八六名二クラス、山南中学校三〇〇名六クラス、柏原高等学校七〇〇名（？）一三クラスと、団塊の世代の真ん中で教育を受けてきた私にとって、戦後の貧しい時代にもかかわらず、多くの同級生がいた記憶と楽しかった学校の思い出が残っていることに気がつき、同世代の人々と思いを共有したいとペンを執った。

二〇人学級、三〇人学級が普通で、先生も二〇人前後の児童を見るのが適正ですと言われる今の時代であるが、昭和三六年頃、大変な経験をされた小学校六年生の担任の田畑耕司先生のことを皆さんに知ってもらいたいと思う。

小学六年の二学期に入り、二人の担任の先生のうちお一人が病で入院され、代用教員も足りない時代でもあり、もう一人の三〇代半ばの田畑先生が二クラス八六名を一クラスとし、一つの教室に集め授業を進められた。

いかに小学生とはいえ、八六名の机と椅子が一つの教室に並んだ様子を想像してみてほしい。横三人並びが四列で一二人、通路が三箇所で、大人が横歩きできるほどの幅で、縦は七～八人であったと記憶している。

後の中学の五〇人クラス、高校の五五人クラスも窮屈であったが、「八六人クラスはすごかった」の一言であった。私にとって全く楽しい思い出である。田畑先生は八〇歳を越えて今尚ご健在でおられることが、年賀状からも窺い知ることができ、喜びに堪えない。

先生に一度尋ねてみたい。「八六人一クラスの景色と教育方針は如何でしたでしょうか？」と。八六人に

いじめ、不登校の生徒はいなかった。授業は八六人で受け、テストのときは両隣が近すぎるため一、三、五、七、九、一一列がテスト中は、二、四、六、八、一〇、一二列は運動場か体育館でドッジボール、サッカー、ソフトボール等の自習体育の時間となったことが多かった。次の時間は逆の列となる訳である。いずれにしても体育の時間が多かったような気がする。男女が共通に楽しめるドッジボールは人気の球技であったと記憶している。

ここで多人数のクラスの効用を、私の見方から述べてみたい。

効用①　先生は多人数のこともあり、児童に教科書を読ませることを多くしない。本読みの苦手な児童にはありがたい。

効用②　先生は順番に質問したりすることが少なくなる。当てられることが苦手な児童にはありがたい。又当てられるにしても四三人と八六人では、当てられる回数が少ない。さらに先生は授業を進めるために、答えがわかっていそうな児童に質問をし、早めに答えを得る行動を取る。答えを用意できない児童にはありがたい。

効用③　体育の時間が比較的多いのは、児童にとって楽しい学校生活を過ごせる。

以上のようなことから、大変仲の良いクラスができる。教室が鮨詰めの状態も、児童にとってはワイワイガヤガヤと楽しいことであったと記憶している。先生の目が全ての児童に届かなくては授業が成立しない「少人数教室がベストである」と考えておられる教育者は、私の見方をどう思われるでしょうか。単なるサボリ好き！

先生に当てて欲しいと思う子は、顔を上げ先生を見つめる。今日はちょっと調子が悪く、当てて欲しくないと思う子は、うつむき加減かも知れない。それでも順番に先生が当てて辛い思いをさせると、学校が嫌いになり、不登校やいじめにあうことがあるかも知れない。私の体験から、多人数のクラス大賛成である。

さて話を戻すが、勉強の遅れがないように、先生手作り（ガリ版刷り）の宿題がよく出されていたように記憶している。おかげで、塾がない山里の小学校ではあったが、勉強が遅れることはなかったと思う。先生

のご努力に対し、今更ながら感謝を申し上げたい。

私事で恐縮であるが、勉強の楽しさ、面白さを知ることの喜びは、田畑先生の授業で教えていただいたと、今でも有難く思っている。

田畑先生の児童に接する態度は公平そのもので、できる子供、できの悪い子供のいずれに対しても声のトーンは変わらず、穏やかでにこやかであったように覚えている。背がスラリと高く、ハンサムであったが、三〇歳代半ばで頭頂は悲しいほど毛髪はなく、頭だけを見るなら六〇歳代であったが、同級生の母親のアイドル的存在であったことも追記したい。

多くの担任を経験されている田畑先生も八六人一クラスは、このときだけの経験と思うが、当時の同級生の中には、私のようにいつまでも記憶に留めている人も少なくないと思う。

一枚の写真

原谷洋美（山南町）

もうすぐ九月一日の八朔である。丹波下滝の八幡神社ではこの日、土俵を設えて子供相撲が奉納された。

神社の斎庭は、大晦日には年越し火がそれこそ古い山桜を炙り燃やしてしまうのではないかと畏れる程の勢いで火の粉を上げた。

宮当番の年はお昼間から太い大きい丸太を組み上げ、宵の口から火の様子を見い見い木をくべる。三々五々御参りの村人達と一年の無事を感謝し、迎える年の息災を祈念しつつ、火を絶やさないようにした。大晦日のお宮さんは年越し火の周りだけが火炎で浮かび上がり、淵は闇に沈んでいた。御参りの村人は手を焙り、頬っぺたをリンゴのようにしつつ、火の粉が舞い上がると歓声を上げ、それでも背後は真冬の寒さが張り付いていて、くるりと向きを変えて背中とお尻を暖め、何回かくるくると裏返りながら、ほっこり躰の芯

まで温まったところで「佳いお年を」と帰ったものである。

小正月の十五日には、とんど焼きで注連縄のお焚き上げをし、節分には立つ春を迎える年越し火が焚かれた。

年に三回も歳神様を呼ぶ焼き跡に、八朔にはおが屑を盛り上げた特設土俵が現れた。農繁休暇があったその頃の二学期は八月二十六日から始まった。だから九月一日は寄り道をせずに一目散に帰宅して神社へ急いだ。男の子は東西に分かれて何回も取り組みをし、女の子は少し離れて応援。おじさん達は神事の終わった気易さからか、拝殿で御神酒に顔を赤くして、やんやと拍手していた。おが屑にまみれながら勝った子には、勝ち名乗りと共に五円玉や十円玉の賞金が渡された。

父は毎年行司をやっていた。猪首をくきくき折りながら「はっけよいのこった」と調子を取り、子供力士の名前を上手に伸ばして呼び上げ、頭を撫でて賞金を渡す姿は、ちょっと誇らしげだった。それを見に毎年喜んで行っていたのかも知れない。

○八朔の子供相撲の大鋸屑（おがくず）の土俵は秋の木の香が立ちぬ

○軍配を真直ぐに持てる名行司　裸の子供はがつぷり四つに

○ミンミンが間近に鳴きてほつとする雷多かりし夏の終はりか

亡父の姿は下滝で活き活きと動き回るのだが、同居の祖父は山高帽にトンビの外套を着て大阪に行く姿と兵児帯で薪割りや風呂焚きをしたり、長火鉢の前で炭を熾している姿ばかりで、村のそこここには一向に像を結ばない。ところが、六月半ばに帰丹した折り、姉が一枚の写真を持ち出して来た。名刺版で左上の角が破れている、セピア色に染まりかけた写真だった。

小学校と覚しき建物の鳥籠の前で、村のお爺さんが八人とお婆さん九人の記念写真である。ネクタイに背広の男性が二人、着物の六人は羽織姿の正装で、女性九人は全員、帯に白足袋。その後列向かって左から三番目に祖父が写っていた。

姉と二人の頭と口は下滝中を廻り始めた。曰く「木

造校舎がモルタルに建て替わったのはいつ？　この背広の人は上筋の村上さん。あっお兼おばちゃん！　谷のおいちゃんやね」等々。村の道を描いた紙に十七人の顔と家と苗字を組み合せる、時の経つのも忘れるジグソーパズル。なぜ各戸一人ずつなのだろう、何の集まりだろう、みんな何歳位なんだろうと興味は尽きない。

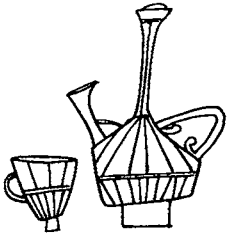
写真を片手に、お墓参りの帰りに立ち寄った村一番の物知り小母さんとも、隣のお姉さんとも話は大いに弾んだ。背広のお爺さんの享年が七十二歳と判り「全員六十歳後半か七十歳前半かもしれないねぇ」と、隔世の感のある今のお年寄りの若々しさを感歎した。

共通の思い出は一瞬に昔を甦らせてくれる。十七人の懐かしい顔は尚更である。村付き合いをしているようには見えなかった祖父は村人たらんと胸を張っている。小鳥が電線に押しくら饅頭するように膝に手を揃え肩を並べている前列のお婆さん達も、頑固さが見え隠れするお爺さん達もみんなみんな、田圃や縁側や畑の畝の中や庭先やで記憶に焼き付いている、働き者の姿を彷彿とさせた。一人だけ確認出来ないでいるお婆ちゃんの顔を思い浮かべながら、姉と電話の度に「きっと二隣保のあそこの家やよ」と言い合っていて、姉妹の糸の先はまだまだ丹波下滝に繋がっているのである。

○椋鳥がおしくら饅頭するやうなセピアの媼が囀り出づる

○おせはんやおかねはんやと祖母の声母の声満つ写真の上に

○婿殿は写真の祖父に少し似し丸刈り頭のとんがるところ



私の故郷は兵庫五区

徳田　八郎衛（柏原町）

何度も本誌で嘆いたことですが、少なからぬ偉人を輩出した郷里なのに氷上郡や柏原の知名度は非常に低いのです。平成の大合併で丹波市となっても同様で、大江山を連想する人、篠山のことだと思う人、いや散々です。そこで、最近は「私の故郷はマーシャル群島、いや失礼、兵庫五区」で通しています。政治に興味のある方にはこれで通じるし、昭和史に興味を持つ人であれば、「おお、斎藤隆夫の選挙区ですね、すばらしい先輩をお持ちですね」と褒めてくれます。

だが、戦後六十四年も経つと、斉藤について不正確な事柄を話したり書いたりするジャーナリストや識者？が出現し、増殖してきました。実に困ったものです。たとえば斉藤の「反軍演説」を称える人がいますが、彼を著名にしたのは二・二六事件直後の「粛軍演説」です。彼は国軍の名誉に傷がつくのを憂えて粛軍を説いたのであり、反軍政治家ではありません。また彼が衆議院から除名されたのは、東条内閣を相手に「反戦演説」を行ったからだ、と思っている人もいます。とんでもない。彼が「支那事変処理に関する質問演説」を行ったのは昭和十五年で、相手は米内内閣でした。

だが、本当の矛先は、国民の人気を集めて宰相となったものの、優柔不断で支那事変の泥沼へ入り込んでいった近衛文麿に向けられていました。もっとも最近、近衛も犠牲者だったとして庇う文筆家も出てきたので、毎年、似たり寄ったりの終戦記念番組を続けてきた結果、「自らも飽きてきた」メディアが、この見解を取り上げる可能性は大ですが、私自身は、斎藤の指摘が正しく、近衛の責任は大きいと考えています。

第一次近衛内閣を組閣した近衛は、昭和十二年から十四年まで、もっとも緊要な時期に政権を担当し、「支那事変早期解決」を謳いながら何一つ手が打てなかったにもかかわらず、この演説によって斉藤が議会から追われた直後の十月、第二次近衛内閣首班として再登壇し、大政翼賛会を結成します。

昭和十七年の選挙では、大政翼賛会から推薦を受け

られなかった候補者はバタバタ落選しますが、何と非推薦の斎藤は、兵庫五区最高点で当選します。第二位となったのも、これまた非推薦候補で全国に兵庫五区の名を高めました。その候補者は、わが氷上郡葛野村在住の佐々井一晃です。戦後の佐々井は、どの選挙に出ても落選して不遇でしたが、東京で活躍する奥むめを主婦連会長（後に参議院議員）の夫君として、我々小学生にもよく知られていました。

ちなみに、出石出身の斉藤の地盤は但馬ですが、丹波でも多くの票を集めました。特に遠阪峠を越えて但馬と交流の深かった佐治地域では、熱狂的な支持者を獲得していたと、佐治町の古老から聞いています。また但馬の政治家といえば、佐々木良作民社党委員長も全国に名を知られた著名な代議士でしたが、わが氷上郡にも多くの支持者がいました。今のポピュリズム選挙を見るにつけ、昔は政治家だけでなく選挙民も見識が高かったと思います。

思いつくままに

齋藤陽子（春日町）

〝故郷は、遠くにありて思うもの〟

横浜に来て三十数年。毎年お正月とお盆には帰省しています。友だちによく、「今年くらいは、一緒に旅行しましょうよ」と誘われますが、毎年帰省することが親孝行だと思い帰っています。

夫も兵庫県なので、両方に家族で帰っています。でも、今年からは、義母が施設でお世話になるようになり（義父は亡くなっていますので）、両方とはいかなくなってしまいました。昨年暮れには、父が緊急入院していたので、その間、ずっと兵庫に帰っていましたが、その父も今年の二月に旅立ちました。今は、母のことが心配なので、毎月丹波に帰省している状況です。

故郷を思い出すことの一つに季節の花があります。

春の桜、たんぽぽ、すみれ、れんげ草を見ると、丹波の桜やれんげ田で、たんぽぽや白つめ草で首飾りを

作った幼い頃のことを思い出し、六月の紫陽花は、学校帰りに友だちの家に咲いていた青紫の花を思い出します。

そして、暑い夏には、大輪の向日葵は勿論ですが、先月、犬の散歩をしながら、この頃余り見かけなくなったダリアとカンナの花を見て懐かしく思ったものでした。また、秋といえば秋桜の花ですが、子どもの頃は、畦道に咲くピンク色のカワラナデシコの花が好きでした。今は、箱根や鎌倉でワレモコウやマツムシ草、色付いた紅葉や銀杏を見て、秋を楽しんでいます。

冬は赤くなった実、クロガネモチや千両が好きです。丹波の千両や万両、南天の実が雪の白さに映えてとても美しく、その風景も浮かんできます。

今年は忘れられない花がもう一つできました。父の病院へいつも持って行った花、赤、ピンク、黄色、うす紫等のスイトピーです。ほんのり春の香りがして、父が大層喜んでくれました。毎回毎回スイトピーを飾りました。旅立った父ですが、きっと天国でも、スイトピーの花を眺めていることでしょう。

関東へ来て、嬉しかったことがあります。それは富士山が見えることです。横浜でも、場所によって大きく見える所があります。辛いことや悲しいことがあった時も、嬉しいことや楽しいことがあった時も富士山を眺めます。いつも気持ちが癒されます。

歌でも故郷を思い出します。今年の春、丹波篠山の施設で過ごさせてもらっている義母に義姉と夫の三人で会いに行きました。久し振りに会った義母は九十七歳ですが、とても元気で安心しました。

その義母が、食堂にあるピアノで『靴がなる』の曲を弾いていました。

「お義母さん上手ね」と声をかけると、くり返し弾きました。若い頃のことを思い出しているようでした。一緒に弾きながら懐かしい日々を思い出しました。

久し振りだったので、夫が「ぼく、誰かわかる？」と尋ねると、

「○○ちゃんやわかるよ。でも、老けたね」の言葉に、夫は少々機嫌を悪くしていました。

私が「年を重ねていくと、小さい頃のあなたの様子がはっきり思い出され、今と比べると老けたということになるのよ。きっと」と説明しても、なかなか受け

入れられないようでした。

私のことも、「まあ、陽子さん遠い所、よく来てくれましたね」とわかってくれました。

私も月に一度、童謡の会に行き、童謡を歌っています。今月も『夏の思い出』『われは海の子』『森へ行きましょう』『故郷を離るる歌』などを十曲以上歌って来ました。ここでよく歌われる歌は『ふるさと』です。

♪うさぎ追いしかの山、小鮒つりしかの川♪と、みんなそれぞれに故郷を思い浮かべながら、しみじみ歌っています。

関東へ来ても、関西弁が出ます。仕事の関係で標準語で話さなければと思うのですが、疲れます。それがささやかでも気になっています。ですから、話す時、すぐに言葉が出てこないのです。

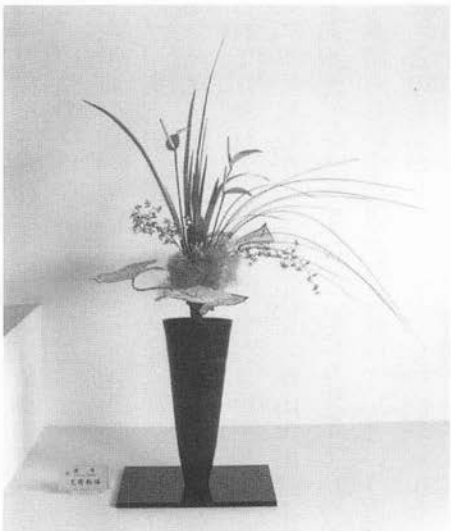
「関西の人は、ゆったりと話しますね」と言われても、ちょっとしたストレスです。

関西のウ音便、「買うてきて」が、関東では「買ってきて」となり、促音便が多いのです。

関東に来たばかりの頃は、言葉がとてもきつく聞こえました。今では、イントネーションなど少し違っていますが、気にしないで、話すようにしています。

いつの時代になっても、生まれ育った所は懐かしいものです。これからも故郷を思い出しながら、健康に留意し、明るく前向きに生活していこうと思っています。

思うままにペンを走らせました。読んでくださった方に感謝です。ありがとうございました。



（いけばな・三蒔柏洋）

気骨の書家・義積誠堂を識る

梅田　重一（山南町）

私は、昭和五年生まれの七十九歳、物心ついた頃には、日支事変、国民学校六年生で日米開戦となった。旧制中学二年からは勤労学徒動員となった。旧制柏原中学校は、柔剣道の道場を中心に東洋ベアリング製造㈱の工場となった。二交代制の徹夜で製作に没頭した。頑健な同級生は鍛造、普通体は旋盤・研磨、痩身者は組立か検査工場に回った。

私は研磨工場勤務で、一晩五〇〇個の完成がノルマであった。上級生はもっと過酷で、尼崎市の大日電線㈱の工場に動員され、鍍金工場で働かされていた。

それはさておき、社会生活で定年を迎え、何故か無性に勉強がしたくなった。青少年時代、勉強したくても出来なかったことへの反動ではなかろうか。八年前より英語教室に通い、今も継続している。教室で知り合った生徒さんの一人に、書家故柳田泰雲先生の高弟で、中堅のプロ作家が居られた。

六年前の夏、辛己会展なる全国組織のプロ集団の書展が、東京銀座画廊美術館で開かれていた。「丹波出身の書家が世話役をやって居られます」。その声に釣られて銀座行きとなった。会長は戸田提山先生（愛知県）、事務局長が三宅剣龍先生（篠山市出身・東京在住）であった。三宅先生は、「私より先輩で、丹波の黒井に素晴らしい字を書かれる義積さんという方が居られた」とのお話があった。

丹波には、吉住・吉積・義積とあるが、私の親戚にも、黒井の野上（のこの）野に義積姓があり、一族に書家がいらっしゃることは承知していた。六年前に財団法人書壇院に所属し、書の勉強を始めた。幸い良き師にめぐり会え、六年間で十二ランク昇級することが出来た。それにつけても、旧制柏原高等女学校で戦前戦中を通じ、教鞭を執られた義積誠一（誠堂）先生のことが気になって仕方がなかった。

偶々、『山ざる』誌の会員録を見ていると、野上（のこの）野

出身富田（旧姓能勢）貞子さんとあるではないか。思い切ってダイヤルを廻した。勿論、義積家のことは良くご存知で、現状の詳しいことは、丹波の兄が良く知っていると思うので、兄に相談するとのことであった。直ぐ返事が来て、義積誠堂先生（平成九年十二月没）のご子息、啓太郎氏（平成二十年十二月没）のお嫁さん、寿子様が「斯様なお話なれば嬉しいので直接電話が欲しい」とのことであった。

私の母は、黒井町野村の荻野家の長女として生まれ、山南町和田の梅田家に嫁し、次女の菊江は、義積誠堂先生の義兄、義積滝右衛門氏に嫁した。そんなこんなも、充分ご存知の寿子様は、「私は大路の畑家より義積家に嫁いで参りました。義父誠堂は、永年に亘り、青少年の書道教育に携わり、それを生き甲斐として参りました。各種展覧会に出品することが大嫌いでありました。日展に推挙するとのお話もありましたが、頑なに拒んでおりました。従いまして、展覧会での入賞・表彰状は一枚もありません。只、氷上郡教育委員会（昭和五十年十一月三日付）と氷上郡学校校長会（昭和五十七年五月十三日付）で、永年に亘り、青少年の書道教育に熱意と情熱を傾注したとの感謝状があるのみです。誠堂の孫娘である卯野寿美が、おじいさんの遺伝でしょうか、書を書くのが好きで、おじいさん似のとても良い字を書きます。書道塾を開いて、後進の指導に当たっているのは嬉しいことです。尚、此の地区で、数多くの表札を頼まれ、又、殆どの墓石は見事な楷書で残っております。」

それに付けても、横浜書作展だ、書壇院展だ、更には、毎日展で入賞を果たそうと、意気込んでいる私がさもしくて、恥ずかしい気持ちになりました。㈱二玄社会長の渡邊隆男氏の口癖「展覧会で一度や二度賞を取ったかと言って、決してうまくも何でもない」という、お言葉をしっかりと胸に受け止めたいと存じております。初心に帰り謙虚な気持ちで、明日から又、修練に励みたい所存であります。

ご協力を戴きました、富田（能勢）貞子様、能勢英一様、義積寿子様に感謝あるのみです。

〝今浦島〟の寂しさ

木村　つた江（市島町）

「今日はメーラン取りをするから、授業は午前中でおしまいにします。岩戸、喜多、南の部落の者は、午後一時に岩戸の塩谷さんの家の前に集合するように」

と、受持のK先生が四時間目の国語の授業の始めに言われました。私はその頃、兵庫県氷上郡鴨庄村尋常高等小学校の四年生でした（旧姓塩谷）。午後一時に、男女十人近い生徒が私の家の前に集合しました。間もなく教頭のT先生が見えました。T先生は私が尊敬している大好きな先生でしたので、今日のメーラン取りが一層楽しくなりそうでした。

その日は、昭和二年五月上旬の良く晴れた日でした。皆は先ず素足になり、私の家の苗代に入りました。

苗代には、水面から二十センチほどに延びた苗が緑に輝いていました。その葉の裏側に害虫が卵を産み付けているのを見つけて、その苗の葉を一本ずつ取るのです。取ったメーランは銘々が紙で手作りした小さな袋に名前を書いてその中に入れます。そして最後の苗代から上がり、寺の縁側で数をかぞえて記入し、先生に渡します。先生はそれを信用組合でお金に替えて翌日私たちに配って下さるのです。貰ったお金は、夏の盆踊りの屋台で買い物をするのが皆の楽しみでした。

冬の楽しみは、手作りのスケート場での遊びです。五時間目の授業が終わるや否や外に飛び出し、三十センチほど積もっている運動場の雪を、長さ十メートルほど踏み固めて細長い道を作っておくのです。翌朝には、ピカピカの手作りのスケート場が出来上がっています。そこを皆、一列に並んでスイスイと滑るのです。一時間目の授業が始まる寸前まで滑り、放課後も夕方まで滑り、家に帰った頃は薄暗くなっていて母に叱られたものでした。

#

私は昭和六年三月に鴨庄小学校の高等科二年を卒業しました。そして、T先生の妹さんの嫁ぎ先が東京本郷にあったので、T先生の勧めもあり、この年の十二月に見果てぬ夢と希望に胸をふくらませて上京したの

です。

それから今日までの七十八年間の私の東京生活を振り返ってみますと、二十五歳で平凡な見合い結婚、一男二女の子供に恵まれましたが、第二次世界大戦で夫の出征、復員後の事業の失敗、夫の大手術、死。波瀾万丈の生涯でした。

その間に、私の七人の兄弟姉妹のうち六人が他界し、生家も人手に渡ってしまいました。今年こそ先祖の墓参りをと思いつつ、私も膝関節炎を患い、杖をついての遠出は気が進みません。村に帰っても、往き合う人は皆、顔も知らない人ばかりになり、私は昔の浦島太郎そっくりだと。長生きってめでたいのだろうかと、つくづく考えさせられる今日この頃でございます。

童謡　浦島太郎

(1)
昔むかし浦島は
助けた亀に連れられて
龍宮城に来てみれば
絵にもかけない美しさ

(2)
乙姫様のご馳走に
鯛や平目の舞い踊り
唯珍しく面白く

(3)
月日のたつのも夢のうち
遊びに飽きて気がついて
おいとまごいもそこそこに
帰る途中の楽しみは

(4)
土産に貰った玉手箱
帰りてみればこわいかに
元居た家も村もなく
道で往き合う人々は

(5)
顔も知らない人ばかり
心細さに浦島は
開けてびっくり玉手箱
中からパッと白煙
忽ち太郎はおじいさん

丹波の歳時記

谷　敬　三（柏原町）

昭和26年に生まれた私は、昭和44年に高校を卒業し丹波を離れるまでの18年間を柏原で過ごした。ここに記載したのは、その頃の柏原と我が家の生活である。

《1月・お正月》

我が家のお正月はいつも暗いうちに明ける。井戸から汲み上げた水を「とことんぼり」と唱えながら木桶に移し、その水を遣って顔を洗うのである。真冬のまだ薄暗い朝六時頃なので、その水は肌を刺すほどに冷たく、とてもお正月の晴れやかさを感じる余裕などなかった。「とことんぼり」の意味も良く分からないままにあるが、神事の言い伝えがあったと思われる。

六人の家族がそれぞれ井戸水で顔を洗い終え、神棚や灯篭などの昔から神様が宿っているとお供えをしてきた場所にそれぞれ挨拶をする。ラジオからはＮＨＫの雅楽が流れていたが、家族のお祝いが始まる。

全員が座敷の間に集まり、祖父母と両親、兄と自分が、男女両側に分かれて向き合いながら座り、神妙な雰囲気に浸ることになる。祖父から年の順に、床の間に飾られている鏡餅に向いお祝いをし、鏡餅の脇に供えられている蜜柑、干し柿、するめなどの好きなものを取り、自分の席に戻る。最年小の自分が席に戻ると、全員で「おめでとうございます」と無事に新年を迎えられたことを慶びあうのである。母が入れてくれた梅干しの入ったお茶を飲み終えると、一連のお祝いの儀式が終わり、席を変えてお雑煮が始まる。

《2月・やくじんさん》

「二月は逃げる」と言われるが、柏原の2月のハイライトは八幡神社を中心に開催される〝やくじんさん〟である。三丹一の大きな規模の厄除祭には、2月17日と18日の2日間に5万人が集まると言われている。旧町内には交通規制が敷かれ、柏原駅から神社に続くどの筋にも露天が連なり客筋で賑わっていた。その頃は

今のように娯楽が多くなかったので、金魚すくい、ゲーム、お好み焼き、お菓子他のたわいもないものばかりではあるが、一つ一つの屋台を覗く顔は、皆が嬉しく幸せそうな表情をしていたように映っている。

私の生家は書籍業を営んでいるので、この2日間は雑誌を中心として子供向けの書物の需要があり、書き入れ時であった。店の前には臨時の縁台を出し、その上に雑誌などを山のように積み上げていたが、それらが2日目の午後にはほとんどが売り切れてしまうほどであった。こうした2日間であるから、午前中に短縮された学校の授業を終えると、夜まで手伝わされるのが通例であった。

こうして1年間の最大の行事を終えると、丹波にも漸く春が来ると言われている。

《3月・教科書》

3月の日本は学校の1年が終わる月である。生徒にとって夏休みと冬休みは多くの宿題に悩まされるが、学年が終わった春休みの2週間は宿題がなく、一番ゆっくりできる長期休暇の筈である。ただ、新学期からお世話になる担任の先生や、新しいクラスへの不安を感じながら過ごすことになり、春ののどかな気候の中で草木は芽吹き始めるのに、不思議なほどの落ち着かない2週間であった。

このような学校の1年のサイクルの中で、書籍業を営む我が家にはこの時期ならではの出番があった。新学期に使用する教科書を各学校に届ける役割である。昭和39年から教科書の無償化が始まったので、それ以前の〝販売する〟から〝届ける〟に仕組みは変わったが、新しい学年に胸を膨らませる生徒達に教科書を贈ることには変わりがない。

2月頃から次々とそれぞれの出版社より送られてくる、新しい教科書を学校別学級別の必要な冊数に仕分けをし、3学期中に各学校に配送する。日々の仕事が終わった後に、父と母は夜なべをしてこうした作業を行っていた。書籍業にとって、社会的な意義を感じる季節ではあるが、縁の下の大変な仕事でもあった。

《4月・桜》

丹波の春は柔らかい花の季節である。新学期が始ま

ると、待っていたかのように全学年が花見遠足に出かける。遠足に適した柏原の桜の名所といえば、高谷公園と鐘が坂であろうか。下町にある手軽な高谷公園は小学校の低学年、歩く距離の長い鐘が坂は高学年の定番であったが、高学年では石生の水分公園などに出かけることもあった。鐘が坂は山全体に染井吉野が咲きほこり、奇岩をなす鬼の架け橋や滝などもあり、楽しみに満ちていた。

我が家の裏の小川（奥村川）に懸かる小さな木の橋を渡ると畑が広がり、畝数が30畝ほどあろうか、ちょっとした憩いの場所でもあった。春は祖父が育てた黄色の菜の花や薄いピンクのエンドウ豆、白い大根などの花が咲き誇っていた。幼稚園に入る頃までは、穏やかな日差しの下で、畑にご座を敷いてお弁当を食べながら過ごすことが多かった。傍では母が洗濯物を干し、たくさんの蝶も集まってきた。のどかな春の一日である。

《5月・大掃除》

最近はあまり大掃除をやる家を見かけなくなったが、以前は乾燥した気候が続く4月から5月の中旬にかけての時期に、各家庭では大掃除が年中行事として行われていた。昨今ほど、この時期に休日が集中することはなかったが、それでも4月29日（天皇誕生日）、5月3日（憲法記念日）、5月5日（子供の日）と祝日が続くことも、各家庭での大掃除の計画を立てやすくしていた。

その頃の我が家は旧式な家であったので、家の真中の土間にお九度さん（かまどと煙突）や台所があるなどやたら広かった。毎年のように大掃除は、店（書籍業）、本宅、隠居の3か所を行い3日を費やしていた。主役は父と母であるが、勿論、兄と自分も手伝わされた。勉強がある、と言っても家中に埃が舞っているので言い訳にならなかった。店の掃除は全ての本を移して埃を払い、本宅と隠居は家具を移し、畳を上げて日干しを行うが、毎年のようにこういうことを繰り返すのである。

大掃除の楽しみは、畳を上げた時に、乾燥用に敷いてある1年前の新聞が読めることであった。もっぱら1年前のプロ野球の記事には、長島や稲尾の連夜の活

躍が踊っていた。

《6月・梅と梅干し》

我が家の裏の畑に咲く梅雨時期の木々や草花といえば、紫陽花と菖蒲などであろう。

麦が黄色い穂をつける一方で、野菜類は生長し、柿の木々の緑も深くなる。2月から3月にかけて咲いていた二本の梅の木にも、葉の色より少し薄めの緑色をした実が付き、梅雨の時期に育ちきる。

梅雨の合い間の晴れた日には、梅の実をもぎ、梅干しを作る作業を行うことになる。籠にもいだ梅を入れ、裏の川で余洗いをした後、井戸水で丁寧に洗い終えると、梅干しの準備が出来上がる。このような洗い終えた１０００個ほどの梅を、次々と紫色の紫蘇と塩を溶かした水に浸し、ござに敷いて天日干しをする。こうした作業はもっぱら母の役割であるが、晴れた日を狙っては、こうした紫蘇に漬けた梅の天日干しを繰り返し行っていた。

天日干しの紫蘇の色が浸み込んだピンクの梅は、漬け終えた深い味のする梅干しとは違い、紫蘇の香りが新鮮でどこか頼りなげな味がするような柔らかさがあった。日干しをしている時の盗み食いにも緊張感があった

《7月・夏休み》

梅雨が明けると、暑い夏がやって来る。すごく暑いけれども長く楽しみな夏休みが始まる。夏休みの宿題の植物採集や昆虫採集は、もっぱら家の裏の畑で採集をした。畑であるから草花には事欠かないが、種類には限界があるため、もう少し集めたいと思う時は、麦わら帽子をかぶりながら町中を歩きまわった。

昆虫採集の蝉やトンボは畑で、水中の虫たちは裏の川で採集をした。さすがに勇猛なカブトムシやクワガタは山でないといないので、西山へ入ることも多かった。蝉の種類は夏の間に変わってゆくようで、夏の初めのころは、黒色で小ぶりの「にいにい蝉」が主流であり、盛夏に向い茶色をしたアブラゼミの鳴き声が多くなる。メスのアブラゼミは鳴かなかった印象があったが、ネットで検索しても、そのような記載は見当たらず記憶間違いかも知れない。夏の盛りを迎えるお盆

の前後からは、クマ蝉やヒグラシ、つくつく法師が多くなる。

蝉の鳴き声は種類によって違うように聞こえるので、蝉の声により夏休みの時期を意識していたようである。アブラゼミの鳴きはじめの頃は、まだまだ残る休みも長いが、ヒグラシ等の鳴き声が多くなると、宿題の仕上がりが気になり始めると言った具合であった。クマ蝉やヒグラシの透きとおった翅の蝉は美くしかった。

《8月・お盆》

関西のお盆は8月である。その頃の柏原駅の前には広場があり、お盆の季節には二重三重の盆踊りが賑やかに催されていた。八幡神社のすぐ下にある市庭で催されていたこともある。盆踊りに相前後して、古市場通りでは7月から8月の毎土曜日に、「土曜夜店」と称した夜祭があり、こちらも屋台が出るほどの活気があった。婦人会の盆踊りなども行われていたようである。その頃の柏原の旧市内には商店が連なっていたが、駅から続く我が実家のある石田通りよりも、銀座通りや古市場通りの方が賑やかであった。

お盆の時期には、東京や大阪から伯父母・叔父母や従兄弟が帰省してくることもあり、家中が賑やかになる。暑い季節なので、墓掃除は決まって午前中か夕方かに行われ、菩提寺に出かけていた。墓参りや家族でお経を読むことを通して、子供心に先祖や家族を意識する季節でもあった。

日常を離れたお盆の時期が過ぎると、夏休みも余すところ1週間余りとなり、宿題の進捗が非常に気になり始め現実に戻されていく。

《9月・運動会》

2学期が始まり、少しすると運動会の練習が始まる。最近の学校は1年間の行事が分散し、運動会も初夏に開催されることがあると聞くが、その頃は、気候が爽やかな9月から10月と決まっていた。柏原では、小学校、中学校、高校に町民体育大会と4回の運動会が開催されていたので、楽しみは多かったが、兄弟の多い家族にとっては、お弁当の準備が大変であったようである。

この季節のお弁当は、ノリ巻きと卵焼き、秋の野菜類のお惣菜に枝豆、果物は二十世紀梨とパターンが限られていた。お昼前になると、それぞれの家族がござを敷いて集まり、まさに家族団欒の趣があった。隣り合わせとなった近所の家族とも和気藹々に、賑やかなことこの上もなかった。カメラやビデオで子供の成長の記録を映すような時代でもなく、出場者も応援も一瞬一瞬を楽しんでいた。

運動会のハイライトのひとつに、男子生徒の集団体操である組立体操がある。一連の組み立てはピラミッドで締めくくりとなるが、体が大きく、いつも一番下で支えていたので、笛に合わせて一斉に崩す、いよいよの瞬間には緊張感が漂っていた。痛いとか怪我を恐れるようなことはなかったが、ピラミッドの上に乗っていた仲間が、どういう気持ちだったのかを考える余裕もなかった。

《10月・秋祭り》

10月の半ばになると、八幡神社を中心に町内あげての秋祭りがあった。町の青年団の皆さんに担がれる勇壮な神輿の隊列と地区毎の神輿が列をなし市街を練り歩いた。

我が石田部落には大きな太鼓神輿があった。4人の子供達が神輿の上で太鼓を叩くが、大きな子供では重いからなのか、神輿に乗るのはその年の小学1年生と決まっていた。男子も女子も可愛らしい法被を着せてもらい、少しお化粧をして乗り込んだ。大人しい太鼓の囃子で、「伊勢のなあ……」と言った囃子詞であったが、正確には思い出せない。他の地域で似たような囃子を聴いたことがなく、石田の祭囃子の原型は良く分からない。子供にとっては、1か月ほど前から毎夜公民館に集まり練習をするのも楽しみであった。

秋祭りの2日間の我が家の食事はサバずしと決まっており、母が、祭りの初日の朝にたくさんのサバずしを握っていた。冷蔵庫などが普及する前の時代であるから、季節に応じた生活の知恵だったのであろう。

《11月・丹波の霧と時雨》

10月から11月にかけ、晴れた日の丹波の朝には深い霧が立ち込める。気象学的には、霧が発生する要素は

いくつかあり、そのうちの放射霧ではないかと思うのだが、霧が晴れると、その日は間違いなく快晴になる。これには例外の記憶がない。高校生の時に自転車通学をしていた同級生から、朝の通学途中に数メートル先が見えず怖い思いをした、との話をよく聞かされたものである。この深い霧を全国的に売り出す算段はないものか、と考えたこともあったが、妙案は未だに思い付いていない。

霧の朝は11月まで続き、そのうち霜が降り始めるようになる。午後から時雨ることも多くなり、明らかに丹波の季節の移ろいである。秋の爽やかで澄み切った気候は長くは続かず、寒い冬の準備が始まる。この頃になると、裏の畑の野菜も寂しくなり、冬支度が始まる。来春に向けた準備中のもの以外で畑に残っている野菜類は少なく、白菜と大根ぐらいしか見当たらなくなる。6、7本ある柿の収穫も終わり、吊し柿の準備が始まり、こちらも冬支度である。

《12月・餅つき》

12月27日、28日ごろの日曜日に、我が家の餅つきが行われていた。この日は朝から店を閉め、倉に仕舞ってあった重い臼や杵などの餅つきの道具一式を揃え、準備が始まる。蒸籠で蒸されたもち米の用意ができると、父と母が餅をつき始めるが、子供はもっぱら祖母と一緒に餅をこねる役割を担っていた。エプロンを着せてもらい、丸餅をこねるのであるが、鏡餅やあんこ餅・きなこ餅などは少し技術を要するので、祖母と母親が担当した。

我が家の杵は大きく重かった。子供には難しいとの判断があったのか、父は子供につかせることはなく、半日を掛けて一人でついていた。お寺などのお年賀にお供えするお餅なども用意していたので、自宅でつく正月用の餅の数は多く、20臼ほどはついていたようである。それを一人でこなしていた父には重労働であった、と感心しているが、愚痴の一つも聞いたことがなかった。

高校を卒業した翌年に、店と本宅を建て直したことで土間がなくなり、それ以降は我が家で餅をつくことはなく、電気餅つき器を購入した。

名刹・慧日寺について

細川倫夫（山南町）

小生のふるさと旧上久下村には、今や全国区となった丹波竜・川代のサクラ・吊り橋など有名なものがあるが、太田の名刹「慧日寺（えにちじ）」はあまり知られていないような思いがする。本誌第38号（平成19年11月）「丹波を撮る」で徳田編集委員が境内を紹介してくれているが、資料（＊）等を引用して詳しく紹介したいと思う。

＊「ふるさとの寺」（平成8年4月丹波新聞社）、「氷上郡の文化財」（平成元年8月氷上郡教育委員会）、「さんなん観光案内」リーフレットなど慧日寺からいただいた資料

慧日寺（臨済宗妙心寺派）は山号を萬松山といい、旧上久下村太田に在し、約四百米に及ぶ参道と境内は静寂な深い木立に囲まれている。山南三山寺院として常勝寺（谷川、天台宗）、石龕寺（岩屋、真言宗）とともに指定されている名刹で、現住職は開山以来百二十五代目（中興以来二十二代目）門脇靖巖師（高19卒）。

永和元年（一三七五）建立とされているが、本尊釈迦如来の軀内から貞和四年（一三四八）の印仏が出てきたため両説がある。開山の特峯禅師は丹波国管領細川頼之の弟にあたり、那須の雲厳寺を開いた高峰顕日の教えを受けて日本海を渡り仏道を究めた名僧である。嵯峨天龍寺の開山夢窓国師と同門で、鎌倉円覚寺開山の佛光国師の孫弟子である。

帰朝した特峯禅師は、関白家ほかの請いを断って京都を去り、久下谷（旧上久下村）太田の横山に庵を結び大衆教化に努めた。慕って集まる門人が多く、管領細川氏が七堂伽藍を建てて寺領千石千貫を寄進し、慧日寺としたのが永和元年の春とされる。

管領細川氏の権威のもと、ひところは末寺四十六、寺坊十八の本山として独立し、草深いこの地は一大法域として教化の中心となった。時を経て、世は戦乱の世となり、開山二百年後の天正三年（一五七五）明智光秀の丹波攻めの戦火で寺坊を全焼した。

この復興はなかなかの大事業で、妙心寺から入った別心禅師により寛永十九年（一六四二）により再興が成り、中興開山としている。しかし、二十五年後の寛文七年（一六六七）に堂宇を全焼し、妙心寺から入った生鉄禅師により再興し、将軍家より朱印状を得て寺領は安泰となり、このときから妙心寺末の中本山となった。

（撮影・徳田八郎衛）

山南町に臨済宗の寺院が多いのは、同宗中本山の慧日寺が古くから栄え、当時の勢力を維持するための寺院配置からであろう。因みに旧上久下村には慧日寺を含み五ヵ寺あるが、全て慧日寺と本末の関係にある。

県指定文化財の檜皮葺仏殿（一七〇二年再建された入母屋造りのほぼ完全な禅宗様式の建造物）、茅葺本殿、茅葺庫裏、経蔵、鐘楼など十九の建物があり、檀信徒が積極的にこれらの保存に努めている。開山特峯禅師ゆかりの佛光・佛国・夢窓国師の絹本彩色の掛け軸が県指定文化財となっており、その他にも徳川八代将軍から十四代将軍が下付した境内竹木の領有や諸役免除の確認書となる七通の朱印状など貴重な文化財が多く保存されている。

境内に「八百姫髪塚」（脱離墳神髪塔）の碑がある。お参りすれば美貌と長寿の願いを叶えてもらえる、と言われているが、その「八百姫（やおひめ）伝説」を紹介しよう。

若狭小浜の長者の娘として生まれた八百姫は、膚は白玉のように輝き、顔形も優美で、生まれながらにして知徳がそなわり、気品が漂い、神か仏の再来と崇められた。幼い時に父の持ち帰った人魚の肉を食べて以来、若さと美しさを保ちつづけ、何年たっても十八歳

の面影で、亡くなった時は八百歳であったといわれている。

その八百姫について、慧日寺の言い伝えや古文書で次のような話が残されている。

八百姫は尼となり唐天竺に渡り、各地の名刹を遍歴し問答をして、相手を悉く打ち負かした。「自分は仏の道を究め尽くした。自分を凌ぐ者は誰も居ない」と有頂天になり、日本に帰って来た。後に、慧日寺開山特峯禅師の噂を伝え聞き、この地に訪ねて来た。禅師は「まだまだ修行が足らぬ」と言い入門を許さず、厳しい問答を繰り返すうちに、八百姫は自分の悟りが浅いことに気付いた。禅師のもとで真の悟りを得た八百姫は大いに喜び、禅師に帰依し髪を剃り落として改めて修行に専念したが、年老いぬままの美しさのままで太田の地で亡くなった。時に八百歳。和尚はその仏心を憐れみ、遺骸は生国若狭へ送葬し、若い頃剃りおとした黒髪をここに埋めたというのが、この脱離墳である。

慧日寺は、山南三山観光コース寺院として指定されており、事前に予約すれば精進料理がいただける。また、7月初めには境内で杜の妖精「姫ボタル」がカメラのフラッシュのように短く明滅しながら群舞する様を観ようと、多くの方が京阪神からも訪れる夜の観光スポットになっている。

帰省された折には、境内の一石一木にも寂び、由緒が秘められた名刹・慧日寺をぜひ訪ねていただきたいと思う。

（いけばな・三觜柏洋）

丹波から

父との確執の中で起業

坂東隆弘（市島町）

昭和五十二年春。大学受験に失敗し、東京の予備校へ通うために、西船橋にある予備校の寮へ入った。二十名ほどのキャパの寮で、二階の東端の自室のすぐ横を京成電鉄の車両が、窓から飛び込んできそうな勢いで走る。最初は窓ガラスがガタガタと鳴り、部屋も揺れて地震かと思ったほどだ。ただ、丹波の静かな環境で育った者には、朝の一番電車が、充分すぎるほどの目覚まし代わりにはなった。

大学受験失敗、一浪……。あんなにガックリと肩を落とした父の姿を見るのは生まれて初めてだった。志望校に落ちたことよりも、父の期待に応えられなかったことがショックだった。この体験は、楽しかったはずの高校生活を、充実していたはずの高校時代を全否定することでしか是とできず、自分自身でもそれなりの代償を、と思ったのであろう、「合格するまで家には戻りません」と両親に告げ、故郷から逃げるように上京した。卒業式の日も校門を出て、振り返ることなく一目散に逃げ帰ったような記憶がある。

予備校通いの一年間は、まるで人が変わったように、とにかく勉強した。食事の時と睡眠の六時間以外は、通学時の電車でも歩行中もトイレでも意地で勉強した。たまの息抜きは、寮内で流行った個人開設ミニFM局、寮の友人がリクエストに応え電波を飛ばしてくれる。その当時はやっていたアリスの『遠くで汽笛を聞きながら』を夜中一時過ぎになると、リクエストした。歌詞が、故郷を拒絶し、自分を否定しているその当時の心理状態に嵌ったのだろう。さびの部分の〝何もいいことがなかったこの街で……〟そうつぶやき歌っては、眠い目を擦って、また机に向かった。回送電車が無言で窓を揺らす。

そんな甲斐あってか、運よく、受験した大学全てに合格した。父は自分の経験から、歯科大学へ行くように勧めてくれたが、父と同じ薬学へ進むことにした。

家業を継ぐことを決めたことに、母は素直に喜んでくれた。父の母校も選択肢ではあったが、「男なら東京へ行って来い」という父の一言で、東京薬科大学へ進んだ。

#

大学生活は、浪人時代の暗い洞窟から抜け出て、太陽のふりそそぐ広いビーチに出たように、東京ライフを……、大学は八王子の外れにあったので、都市生活とまでは行かなかったが、それなりに楽しいカレッジライフだった。受験勉強からの解放感か、合格効果か、それまで高校や予備校時代に頻繁に起こっていた胃痙攣の発作も、嘘のように全く起こらなくなった。

けっこう勉強もした。いや、させられた。実習、レポート提出、そして試験、前期試験に後期試験、それに追試……。卒業論文と、最後には国家試験より難しい卒業試験と最終目標の国家試験。バイトや遊ぶ余裕はあまりなかった。

休みに帰省すると、父は冷蔵庫を覗き、「ビールが冷えとらんやないか」と母を叱った。晩酌の習慣のない我が家に普段ビールは入っていない。夏休みに大学の友人三名を連れて、車で東京から帰省したときなどは、料亭や高級？クラブやと、やたら気を使って、学生には過剰な接待を張り切ってしてくれた。父と同年代の昔のお姉さまが居る少々年季の入ったクラブで少し閉口したが、今思えば父はよほど嬉しかったのだろう。

そんな父の同じような笑顔を、以前にも見た記憶がある。父は厳格な人だった。95点でも、間違った5点をきつく叱った。満点をとっても字が汚いと叱られた。あまり褒められた記憶がない。挨拶やマナーにも厳しく、先生には駄目な時は殴ってくれ、と目の前で頼んでいた。そんな父が珍しく笑顔で褒めてくれた。「良かったな」と言ってくれた。それは高校合格の時である。父自身、絶対大丈夫といわれた柏原高校の受験に失敗した苦い経験があるからだ、と叔母が教えてくれた。風呂で柏高の校歌を父が口ずさんでいた幼い記憶がある。かなりの想い入れがあったのだろう。

#

大学を卒業し、就職は大阪に本社のある薬局の全国チェーンに入社した。仕事は頑張った。二年目には店

長を任された。さらに頑張った。売上、営業成績はいつもトップで、常に社内表彰された。同期では一番出世、仕事が楽しくて面白くてしょうがない時期だった。

入社六年目、店長から部門マネージャーへの昇格の打診があった、同時に家からは「帰って来い」と。そして「長男」を選択した。

意気揚々と十年目の凱旋帰郷、大阪での実績と自信を引っさげて、故郷丹波へ。家業の発展……、そんな想いは父との闘争の種となった。経営をめぐり、それこそ保守と革新、理念や方法がことごとく違い、衝突した。若さゆえの傲慢な自信は、やがて父の土俵で発揮出来ない現実、ジレンマに木端微塵に砕かれた。やる気をなくし、まるで座礁した船である。

見かねた叔父が助け舟を出してくれた。新会社設立、そして独立。父は新会社の社長になるつもりでいたようだが、叔父が「若いもんにまかせろ」と。よって、父とは同業種の別会社、それは狭い地域、同じ町内でのライバルとなった。

修行時代のノウハウを生かした開局のオープンセールは、三日間で六百八十万円の売上げ、二千八百名もの客数。ちなみに、市島町の全世帯数は約二千八百世帯である。周囲の業界の度肝を抜く、計画通りの大成功だった。それでも父は褒めてくれなかった。それどころか売り出しのやり方が悪いとお説教までされた。父の寛容のなさに、以前に増してことごとく反発するようになっていった。

そんな矢先、今まで忘れていた胃痙攣の発作が再発し、仕事中に倒れた。入院、摘出手術……。胆石症で度重なる発作からか胆のうが変形していた。ここまで酷いのは、原因にはストレスもありますね、とドクターは告げた。

一ヶ月半のブランクは、設立仕立ての会社には非常に厳しいものがあった。売上げを戻し、仕入れの支払い、運転資金……、と療養する間もなく働いた。決して怠けたわけではないが、死体に鞭打つように父は責めた。ついに我慢できずに、父の襟首を掴み、脾臓を絞るような声で父に言った。

「あんたの期待には応えられてへんけど、これでも精一杯、一所懸命なんや。これ以上、僕に何せいいうんや。胆のう切って、次は何や、心臓取るんかい」

言い過ぎた。でも解って欲しい精一杯の言葉だった。その時、父に言葉はなかったような気がする。記憶がない。それからは、父はあまり口出しをしなくなった。仕事は順調と行かないまでも、何とかあえぎながらも少しずつ借金を返した。地元のいろいろな役にも積極的に着いた。消防団、恵比寿会、商工青年部、薬剤師会、青年会議所……。行く先々で常に父と比べられた。田舎の宿命である。逃げても、避けても、違いを主張しても、既にレッテルは貼られている。

#

平成七年、阪神淡路大震災の年、僕は癌になった。リンパ節にまで転移していた。抗癌剤治療で入院している時、父が交代として珍しくベッドサイドに座った。会話があるわけではなく、僕は、テレビを横目で見て、目を合わさないようにしていた。父は看病するわけでもなく、ただボーッとベッドのヘリを見て座っているだけだった。

チラッとその姿を見たとき、「あぁ、ひょっとしたら、この父より早く逝ってしまうのかもしれない……。それは、一番親不孝なことだ」と思った。そう思ったとたん、「意地を張ってごめん。これまでありがとう」と、父に素直に言えるような気がした。意地を張らずに、父を少しだけでも立てていれば……。

その時、偶然、テレビが『父からの短い手紙』という特集。その中の一文「息子よ、何も言うな。ビールが冷えている」。瞬間、ふと昔がよぎった。布団を頭からかぶり泣いた、涙が止まらなかった。ただ泣いた。そして、結局「ありがとう」と言えずじまいに終った。この頃から、父の認知症が始まったように思う。

#

『山ざる』誌に投稿するにあたり、故郷について書こうと思い書き始めたが、こんな話になってしまった。厳格だった父は、今は認知症となり、何を言ってもただうなづき、微笑んでいる。僕が息子だとかろうじて分るくらいである。いま心残りは、「よくやった」の一言が聞きたかったことと、もっと早く分るうちに、父に感謝の気持ちを伝えたかった。

「ありがとう」と……。

（柏原高校二十九回卒）

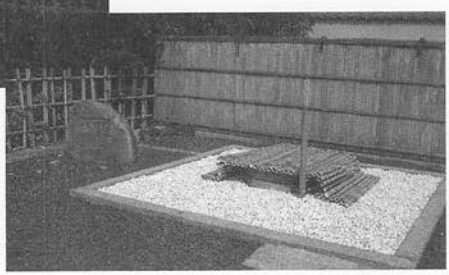
丹波を撮る

西山酒造場（市島町中竹田）

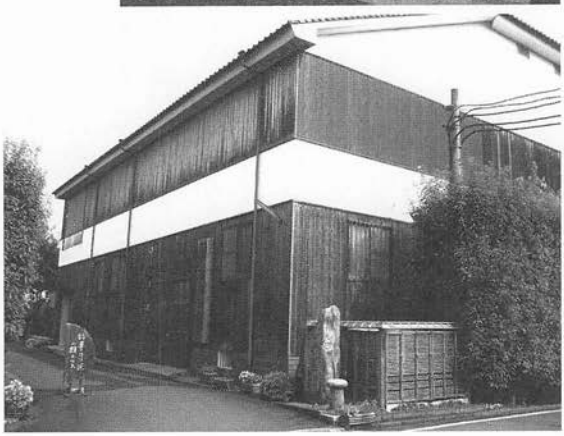
撮影：徳田八郎衛

わが丹波市を代表する名産物と名企業、それも全国に通用するものは？と問われれば、当会会員の多くがイの一番に挙げるのは、銘酒「小鼓」と「西山酒造場」であろう。創業は何と嘉永２年である。また俳人、高浜虚子と三代目当主、泊雲との交流は、明治・大正・昭和の郷土文化史を飾るものであろう。

西山酒造場正面
主屋、塀、離れ「三三庵（ささあん）」の３つの建造物は、このほど国の登録有形文化財に登録された。



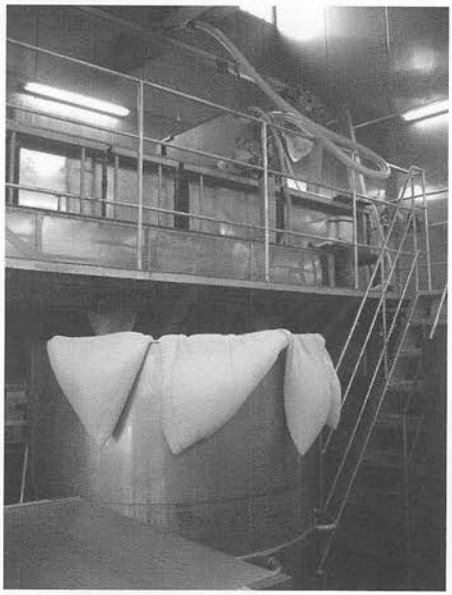
銘酒を生み出す三大条件の一つが名水である。明治 24 年に当酒造場が中竹田の谷の奥からここへ移ったのも、この井戸の発見が発端であったという。毎月、１日と 15 日に杜氏は井戸にお参りする。



平成３年に新築の酒貯蔵庫前に佇む碑は「是より解憂郷」の宣言である。

丹波を撮る

西山酒造場の中



仕込みの際は、年末年始でも蔵人は交代で勤務する。米は地元産である。兵庫県播州産「山田錦」、地元丹波産「兵庫北錦」「五百万石」「但馬強力」という４種類の酒米を使っている。

蒲公英（タンポポ）や一座一座の花盛
泊雲（三代目当主）

打ち伏すも横向くも落椿なる
小鼓子（四代目当主）

「花閑一鼓」も「路上有花」も同社のヒット商品であるが、軽薄で子供っぽい名称の商品が氾濫する今日、芸術と深く結びついた蔵元ならではの命名である。

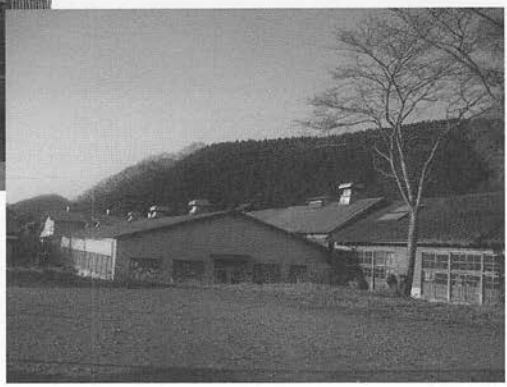
造り酒屋の郷、市島町

市島町には西山酒造場を含めて４つの酒造場がある。正に造り酒屋の郷である。水がいいのだろうか。もっと PR して欲しいものである。

←中大槻酒造場（中竹田）
ブランド商品は「玉つるぎ」

山名酒造場（市島）→
ブランド商品は「万蔵」

←鴨の庄酒造（上牧）
近所の衆が集まって造る酒の銘が「鴨の庄」とはうれしい。



鴨の庄酒造の酒蔵→

丹波を撮る

変わる丹波変わらぬ丹波

わが福知山線

昭和40年代まではタクシーも待っていた丹波竹田駅。「まず乗って沿線郷土の活性化」と訴える看板が痛々しい。

駅前の飲食店は消滅しましたが悲しまないで下さい。市島駅や黒井駅も同様ですから。

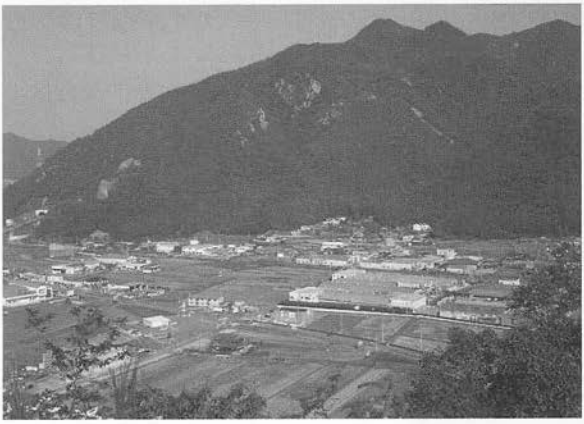
2008年8月から一斉に投入された223系車両。これでドア開閉が容易に

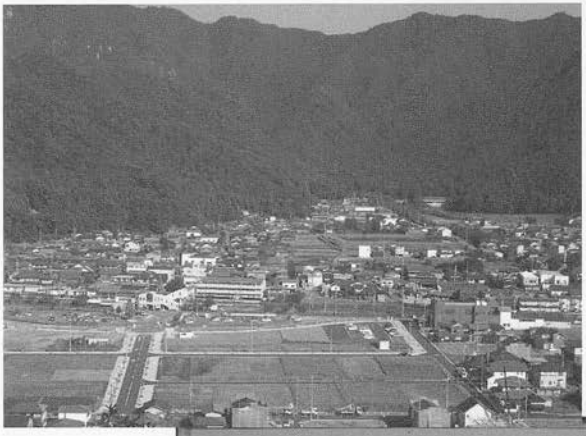
変わらぬ運転室。さあ出発、進行

丹波を撮る

新しい展望台　　石生の城山公園（氷上町石生）

わが丹波市には眺望を楽しめる城跡や峠が数多くあった。だが植林された杉や檜は伸び放題、そして山道も荒れ放題なので眺望はおろか山頂へ到達するのも困難になってきた。しかし地元有志の奉仕作業や行政の施策で新しい展望台も誕生している。ここで紹介する氷上町石生の城山もその一つで、２度にわたって山頂および登山道が整備され、登り易くなった。



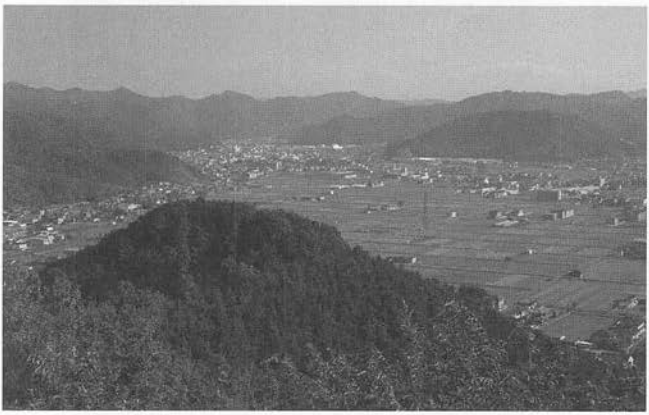


←山頂より東北の船城・黒井方面を望む。背後の峰は向山連峰。

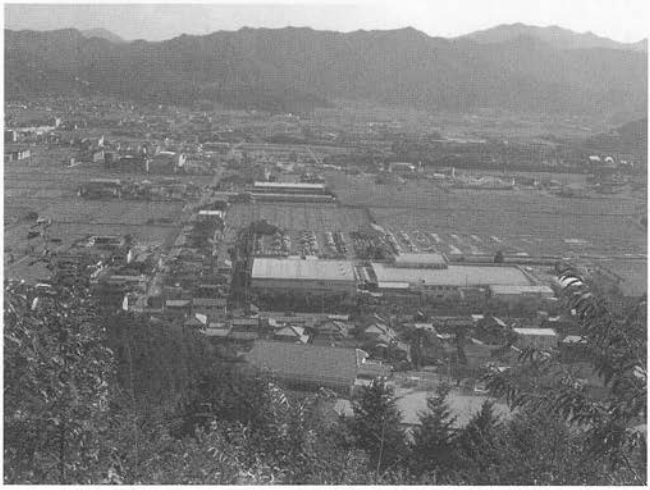
←山頂より東の石生市街地・水分れの分水線方面を望む。眼下のさら地は石生駅西口の再開発地域。

丹波を撮る

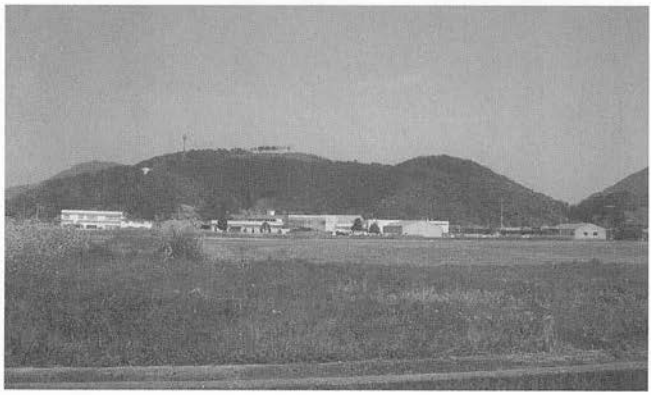
石生の城山公園（氷上町石生）



←山頂より東南に柏原方面を望む。



←山頂より南に氷上・新井工業団地方面を望む。麓の広場は東小学校の校庭。



←氷上工業団地から北に城山を望む。右裾の麓が本州中央分水界でもっとも低い海抜 95m 地点。左裾から僅かに顔を出すのが氷上町氷上の霧山。
「丹波戦国史」が提起した「氷上城は霧山ではなく、氷上郡の中心点である、ここ城山にあった」という論議は今も続いている。

希望のバトンを渡すまで

清　家　久美子（青垣町）

本誌前号「私の職場」欄で取り上げていただきました、秋田県にある社員三五〇人の株式会社「わらび座」に勤務しております。わらび座は一九五一年に創立された劇団が母体となっており、この十数年間で、ホテルや温泉、地ビール製造などの業務も手がけてきておりますが、こういう形態の会社は、国内はもとより、世界でもあまり例を見ないのではないかと思います。

再来年の二〇一一年には創立六十周年を迎えることとなり、次の世代にバトンを渡すべく、その準備にとりかかっているところです。

これまでに困難にぶつかったことは多々ありましたが、この仕事の面白さ、奥の深さに取りつかれて、ここで三十四年を過ごしてきました。

定年まであと六年となり、先輩たちから受け継いできたこの魅力ある仕事を、どう次の世代に引き継ぐか、

日々、記憶力と体力が衰えていることに悔しさを感じながら、劇団付属養成所の講師として、若者たちを前に格闘しています。

さて、今年も世界陸上でジャマイカのウサイン・ボルト選手が一〇〇ｍで九秒五八という驚異的なタイムを出しました。人間の身体能力はいったいどこまで伸びるのか、ボルトを超す選手が出てくるのか、これからも目が離せませんが、決勝に残った選手は全員がアフリカ系の選手たちでした。

そんな中で、昨年の北京オリンピック男子四〇〇ｍリレーでは、日本チームは見事、銅メダルを取りました。四〇〇ｍリレーは、バトンの受け渡しがいかにうまくできるかが鍵を握っています。アメリカや他の国のチームは九秒台で走る選手が何人もいてずば抜けていますが、バトンパスを失敗して予選で失格してしまいました。

その中で、日本チームは見事なバトンパスでゴールまでつないで、トラック競技でははじめてという悲願のメダルを取ったのでした。そして、今年の世界陸上でも四位という成績を収めました。

日本人とアフリカ系の人たちの筋力の差は歴然としています。背骨と大腿骨をつないでいる大腰筋という筋肉は、お年寄りの転倒予防に欠かせない筋肉としてＴＶや雑誌などでも大腰筋エクササイズが紹介されていますが、これがアフリカ系の人たちは日本人の三倍あるそうですので、筋力にも当然差が出てきます。走る前から勝負は決まっているようなものですが、日本チームは自分たちの身体に合った走り方と、「つなぐ」ということを一番大事にして練習を重ね、銅メダルを獲得しました。自分たちの持てる力を何倍にも大きくしたわけです。

今、私達はこの四〇〇ｍリレーでいうと、第三走者で第四コーナーに差し掛かるところです。第一走者、第二走者の先輩たちがつないでくれたバトンをしっかり握って、ここを走りきって最終ランナーにうまくバトンを渡せるかどうか、私たちも同じだなあと思いながら観ていました。

先日、一年半のロングランの舞台を終えたばかりのわらび座ミュージカル「龍馬！」（作・演出＝ジェームス三木）の終幕では、こんな合唱が歌われています。

希望のバトン

♪若者は心閉ざして　ふれあいを求めず
なげやりなその瞳　傷の深さを思わせる
けれども私は　私たちは　同じ時代を　生きる仲間
その手を広げて　振り返れ　希望のバトンを　渡す
まで
♪悲しみの時を重ねて　人々は老いゆく
ほのぼのと蘇る　あの日あの歌あの場面
けれども私は　私たちは　歴史を走る　中継ランナー
その手を広げて　振り返れ　希望のバトンを　渡す
まで
その手を広げて　振り返れ　希望のバトンを　渡す
まで

幕末を全速力で駆け抜けていった龍馬の姿は、今の時代の私たちとも重なります。しっかりとバトンを受け渡したい――わらび座の舞台で輝きたい。人に夢を与えられる仕事がしたい、と大いなる希望と少しの不安を抱いてやってきた研究生たちが、必死に自分と向き合い、仲間とのアンサンブルをどう作っていったらいいのか悩みながら、ひとつの作品を作り上げるのに格闘している姿に、「この若者たちに確かにバトンは渡せる、その未来は確かに信じられる」とうなずいていました。

秋には、戦争をテーマにした作品を授業の中で取り上げることになり、ふたたび、この若者たちと格闘します。その時代、時代に生きた人間の姿に自分自身を重ねながら、これからの時代をどんな風に、人とつながって生きていくのかを一人ひとりが考えるきっかけになればと願って準備しているところです。

「アラ還」世代の私たちも、若者たちのその手にしっかりとバトンを渡すまで、まだまだ、へたばってはおれません。

出かける前の〝呪文〟

井上　巌（氷上町）

〈は・め・か・け・さ・て・は・ち〉――三九年間務めた花王を退職してから四年になる。その後も少し仕事はしているが、毎朝の出勤のあわただしさから解放されたことが大きな変化だった。すごく楽になった。

しかし一方で問題も起きた。毎朝のリズムがなくなり、出かけようとすると、身支度にやたらと時間がかかる。その上にもっと困ったことは、加齢で物忘れがひどくなったことも加わり、とにかく持ち物を忘れることが多いのである。靴を履いたところで、マンションのエレベーターに乗ったところで、駅へ向かう途中で……忘れものに気が付き、取りに戻ることが頻繁だった。ひどい時は三回ぐらいこれを繰り返す。何とかしようと考えたのが、出かける前の持ち物チェックのための冒頭の呪文である。

〈は〉は歯。若い時にもっと歯を大事にしておけばよかった――でももう遅い。十年ぐらい前から部分入れ歯の持ち主になってしまった。朝食後、歯を磨いた後に、これを嵌めるのを忘れるのである。忘れたまま出かけてしまい、昼食に苦労したことも度々である。今のところ部分入れ歯は一か所だけであるが、その他に二か所「風前の灯」みたいな歯がある。八〇歳で自前の歯を二〇本持つ「八〇二〇」はどだい無理な話にしても、自前のこの歯を一日でも長く使えますようにと祈る毎日である。

〈め〉はメガネ。元来眼はいい方であるが、老眼は早かった。その上乱視も加わり、文字を見るには遠近両用眼鏡が不可欠。これもよく忘れる。昔は背広の左内ポケットが定位置だったんだが……。

〈か〉は鍵。市川の戸建住宅から新小岩のマンションに移ってから四年余が過ぎた。十年余り打ち込んだバラづくりとも縁を切り、「駅近・都内」という便利さに惹かれてきたが、それなりに快適に暮らしている。〝マンションは鍵一つで安全に気楽に生活できる〟――その通りであるが、鍵を失くしたり忘れたりすると大変。出かける時に忘れるのはまだ良いとして、過

去に三回、私の前から消えたことがある。一回は不注意で、あとの二回は思い違いで。いずれも運良く出てきたので助かった。

〈け〉は携帯電話。電話もメールも使う頻度はあまり多くはないのだけれど、忘れた日に限って必要になる。最近どんどん新しい機能が付いてきているようだが、とても活かしきれてはいない。が、やはり不可欠な道具になってきた。携帯はメールが便利だ。ちょっとした連絡にお互いの時間を制約しなくて済む。カメラもよく使う。他人に話をする時、写真があると便利だ。

〈さ〉は財布。最近の財布は現金入れというよりカードホルダーだ。現金を使う頻度も大幅に減ったので、財布を忘れても困らない日も多いが、持っていないとやはり不安だ。私の財布にもいろんなカードが入っている。クレジットカード、銀行のキャッシュカード、電器店やドラッグストアのポイントカード、外食チェーンやビジネスホテルの会員カード、臓器提供意思表示カードなど。

〈て〉は定期入れ。もちろん電車の定期券はもう要らない。重宝しているのが「Ｓｕｉｃａ」。ＪＲだけでなく、私鉄もバスもこれが使えるようになり、切符を買うことはほとんどなくなった。

また、弁当やビールなど旅行の買い物のほか、駅中のレストランや駅につながる地下街など、利用範囲も大幅に増えた。

それだけに、これを忘れた時は不便さも大きい。クレジットカードとセットになった「オートチャージのＳｕｉｃａ」を使っているので金額不足の心配はないが、毎月の引き落とし明細書を見てはビックリしている。

〈は〉と〈ち〉は、子供のころから習慣づけられているハンカチとちり紙。春先の花粉症シーズンは特に大事な持ち物である。

#

この呪文の効果は抜群で、忘れものの頻度は大幅に減った。「確認したはずなのに！」と嘆くことも時々はあるが……。

父が教えた春夏秋冬の心

村上信夫（春日町）

◇おやじという存在

おやじと寿司屋に行った。

カウンターに「そっくりな顔」が並んで座った。

さりとて、話が弾むわけでもないが、そこは男同士。

微妙な空気を感じ合うことで、無沙汰の感は一気になくなる。

父というと、気取った感がある。おやじという響きが好きだ。威厳を感じさせつつ、どこか愛嬌もある。しかしながら、どうも息子にとって、おやじという存在は照れ臭いものだ。向こうは、いつまでも「子ども」と見て、なんやかんやと言ってくる。息子としては、いつまでも「子ども」と見てほしくないが、人生経験において、かなう術もない。

ましてや、こうしておやじのことを原稿にして、人様に読んでもらうなどということは、恥ずかしさを通り越したものがある。しかし、おやじから教わったことばを共有してもらいたいという思いが、息子の照れより強かったということなのである。

◇おやじのことば

おやじは、大正十三年生まれ。仕事は、和装小物の卸売をしていた。私の幼いころ、おやじは、ほとんど家にいなかった。全国各地の得意先まわりをしていた。仕事の性格上、商売相手には、おじぎが欠かせない。しかもそのおじぎは、腰を九十度近くに折るものだった。首をちょこんとかしげるだけの挨拶をすると、よく叱られたものだ。

おやじは、早々と定年前に仕事をやめ、読書三昧に耽り、神社仏閣巡りを楽しんでいた。

おやじのことばで忘れられないものがある。

私の最初の赴任地は、北陸富山であった。見ず知らずの土地で、生まれて初めての一人暮らし。表向きは平然としていたが、内心不安で一杯だった。

着任してまもない頃、おやじが様子を見に来た。引っ越しの荷物も片付けきれずに雑然としていた家は、几帳面なおやじによって、見事にきれいになった。仕事も私生活もおぼつかないない息子の様子に、おやじの方が不安になったに違いないが、そう長居も出来ず、私の仕事中に、帰って行った。

家に戻り、部屋の電気をつけたとたん、畳の上に置かれたくしゃくしゃの新聞紙が目に飛び込んできた。引っ越しの荷物をくるんでいた新聞紙だろうが、几帳面なおやじにしては珍しく片付けるのを忘れていったのかといぶかしんだ。だが、それは一瞬のことだった。新聞紙に青いマジックで太く書かれた文字が見えた。

「元気でナ、頑張れよ」

◇おやじのハガキ

ちょうど十年前、一年に渡って、おやじは、息子宛ての葉書を書き続けた。三百六十五日、一日も欠かさなかった。そこには、身辺の何げない出来事、読んだ本の感想、神社仏閣巡りの報告などが日記風に綴られている。おやじの不満は、息子がほとんど返事をよこさないことであったようだが、息子としては、おやじの心を読み取るのを、毎日楽しみにしていた。目標の一年を達成したとたん、葉書が来なくなると頼りなく感じた。

目標達成直前の葉書に、おやじはこんなことばを書いてきた。

人に接する時は、暖かい春の心。
仕事をする時は、燃える夏の心。
考えるときは澄んだ秋の心。
自分に向かうときは厳しい冬の心。

感じ入った。座右の銘にしようと、大きな文字で書き写し、机の前に貼ってある。「春夏秋の心」は、な

んとかなったとしても、「冬の心」で自らに臨むことは至難の業である。

最も息子に欠けていることを伝えるために、おやじは一年間葉書を出し続けたのかもしれない。

いまとなっては、この葉書は、おやじの遺書となった。

◇おやじ、ありがとう！

おやじは、故郷の丹波をこよなく愛し、「丹波で死にたい」が口癖だった。長患いの末、ついに、その願いがかなうことなく、逝った。八十四歳だった。

二〇〇八年十月一日夕刻、病院に立ち寄り、体をさすり、新品のパジャマに着替えさせた。かなり節々が痛かったようだ。食事の時間になり、体を起こし、ベッドに腰掛けさせた。おやじは、夕食を食べようと意欲を示し、ずっと食事を見つめていた。

結局、口にしたのは、差し入れの丹波栗のスープ二口だけだった。最後に口にしたのは、故郷丹波の味だった。丹波出身のレストランの山本シェフ（郷友会員）に頼んで特別に作ってもらったものだった。

午後八時ごろ、右手を上げる得意のポーズで「気をつけて帰れよ」と言ってくれたのが最後の言葉になった。二日未明、おやじは旅立った。臨終に立ち会えなかったが、前夜、いいひとときが過ごせたと思う。

叱咤激励してくれる存在がいなくなったことは、寂しい限りだが、天から見守ってくれているおやじに恥じない生き方をしていこうと心に誓っている。

一冊目の『元気の出てくることばたち！』が出版されたとき、ことのほか喜んでくれた。書店に買いに走ってくれた。続編にあたる本には、おやじの言葉を載せたいと考えていた。

おやじ！　おやじのことを書いたよ。読んでね。

春夏秋冬の心を教えてくれて、ありがとう！

〈ＮＨＫエグゼクティブアナウンサー〉

＊村上信夫氏の最新著書『ことばのビタミン』は、近代文藝社から発売中です。

隠居のてすさび

三浦　宏（山南町）

本稿を書いている八月中旬は、甲子園球場で高校野球の全国大会が真っ盛りである。私の趣味の一つとして高校野球の県大会を決勝戦まで球場に出かけて観戦し、その後はＴＶで全国大会を観戦することがある。きっかけは私が週一回、日頃の運動不足の解消にかよっているプールの近くに神奈川の高校球界では強豪の一つに数えられている高校があり、プールの行き帰りに、この高校の野球部の練習をみることが習慣になったことによる。選手や監督と言葉をかわすようになり、ついには夏の県大会を見に行くようになり、最盛期は春期、秋期大会も見に行った。この高校は甲子園出場を二回経験しているが、最近は県大会三位までの進出が二回にとどまっている。この二回の準決勝の中では、現レッド・ソックス松坂を擁する横浜高校との試合が特に記憶に残っている。この日の松坂は七安打散発、八奪三振の完封で、打っては横浜高校打線は六、七回を除く毎回得点の二十五点を取った（高校野球県大会では準決勝からはコールドゲームはない）。

この試合の数ヶ月後、例のプールへ行く途中に監督に会う機会があった。私は「準決勝まで勝ち進んだ選手達は、このスコアをどんな気持ちで受け止めて、自分を納得させたのか、優勝劣敗は世の習いであることを、高校時代の晴れの舞台で、このスコアで思い知らされた人間にとって、その後の人生はどのように見えるのか、トラウマとなることはないのか」と聞いてみた。監督はしばらくかなたの空を見つめてからきっぱりと一言「弱かったから負けたんです」と言って、選手達のほうへ去っていった。私は、この一言に勝負師にして教育者である監督の胸のうちをみたように思い、下司の勘ぐりのような私の質問を恥じた。

私は、高校野球の神奈川県大会では攻守交代の時の横浜高校のダッグ・アウトを見るのが好きである。この際、出張で行ったドイツはシュツットガルトで購入したカール・ツアイスの双眼鏡が威力を発揮する（シュ

ツットガルトにはカール・ツアイス財団のシュツットガルト社がある)。デジタルカメラでは日本に押しまくられているがレンズはやはりカール・ツアイスだ。監督の、そして選手の表情が手に取るようにわかる。選手達は監督を囲んで微動だにしないで監督の指示を聞く。私は企業と大学で四十数年働いたが、二十人の人間がこれほどに集中力を高めて指導者の言葉を聞いている姿を見たことがない。この瞬間に監督と選手達の間にかもしだされる雰囲気は、教育のあるべき姿の天啓にさえ思える。これは野球部監督としての渡辺監督の実績、力量と人間力のしからしめるところであって、たぶん、監督の至福の時なのではないかと推察している。

今年の甲子園では大分県代表の明豊高校に注目している。明豊高校の何に注目しているかというと、あの「神田川」の南こうせつ(作詞は奥さんの育代氏)が作った同校の校歌である。ここに歌詞のすべてを掲載してもいいが、ページ数ばかりとる上に著作権の問題もあり、以下ではかいつまんで紹介したい。

一、明日の光が　見えない夜も
　希望だけを　支えに
　……
　夢を　あきらめないで
　勇気　自分を信じ
　愛を　その手で　育てながら

このように、この歌詞には普通校歌に見られる郷土の山河名も校名も一切ない。この歌詞を最初に見た時の私の印象は、これはあえて時流におもねることを恐れずに言えば、「身を立て名をあげ　やよ励む」ことをやめて自己実現だけを目指したものか、夢や勇気、愛はこの世で一番重要なことはわかるが、だからといってストレートに繰り返すのはいかがなものか、校歌なのだから、これらの上位概念を優しい言葉で言えないものか、学校行事の事ある毎に、全校生徒が夢・勇気・愛を大合唱するのは精神の内向あるいは退行ではないか、とするものであった。

しかし、である。しかし、南こうせつはただ者ではなかった。明豊高校が甲子園で勝って、選手が汗と泥

のユニホーム姿でホーム・ベースを中心にセンター方向に向かって並び、肩を組み合って左右に体をまげながらリズムをとる応援団とともに夏の照りつける日差しのなかで、この歌を歌い始める。ここで重要なのは、この状況は精神の内向とは対極にある状況であることである。つまり、夏の日差し、汗と泥にまみれたユニホーム、甲子園の勝利、肩を組む応援団、は内向する精神とは無縁である。すると、私が恐れた歌詞における精神の内向は、これとは無縁のこの状況がバランスして、夢・勇気・愛などの言葉が、使い古されていない、手垢のつかない原初の言葉として聞こえてくるのであった。幾百とない回数のライブを手がけ、出演している南こうせつにとって、上記のことは計算ずみのことであったのかも知れない。

現時点で、明豊高校は三回戦まで進出したからベスト八を決める戦いに勝てば、もう一度この校歌を聴ける。前述のことを確かめるためにも明豊高校にはぜひ勝ってもらいたいと思っている。

私のスポーツ観戦は、この高校野球のほかに全日本オープン・テニス、大相撲があり、スポーツ以外では映画、クラシック音楽鑑賞があり、さらに読書がある。年をとるにつれて身体的制約から自分がプレイすることから見るほうに比重がシフトして、一昔前のTVコマーシャルの「見てるだけ（あるいは聴いてるだけ、読んでるだけ）」状態が増えてくる。しかし、意外やこの状態は悪いことばかりではなく、岡目八目に似て、プレイしないからこそ見えてくるものがある。

すなわち、私のような凡庸な人間でも、この年まで生きていると物の見方が少しは分かってきて、いわゆる見巧者にいくらかは近づける。老齢を重ねるごとにこれらの観てるだけ、読んでるだけの手遊びから、大げさに言えばこの世のからくりが、そのなかで蠢（うごめ）く人間存在の真実が、眼前にその姿を次第に現わし始める。あるいは先人達が残した世界観を自分の事として理解し、共有することが出来てくる。これはプレイが出来なくなった老齢者にして初めて享受が可能な楽しみである。私としては、かの孔子よろしく「朝（あした）にこれらを知って夕べに死す」のが理想である。世界観と人間存在の何たるかを知るまでは死ねないし、知ってしまった後の人生には空漠たる虚無しかないだろうから。

四十代半ばを過ぎて

大河洋介（柏原町）

今年は年男であり、私も四十八歳になる。気が付いてみると柏原を離れて三十年、会社に勤めて二十六年という年月が過ぎた。企業に勤める以上、転勤は宿命のようなものであり、入社後、大阪→東京→札幌→つくば→東京→横浜（現在）という勤務地を経験した。札幌→つくばの五年間は、家族を東京に残して単身赴任。運が悪いことに、札幌転勤直前に小さな家を無理して購入してしまい、結局、購入後五年間は新しい家に住むことが出来なかった。再度、東京へ戻ってきて、初めて自宅から通勤することができるようになり現在に至っている。

今回、このような原稿の依頼が送られてきた訳であるが、さて、何を書こうかと悩んでいた。故郷を離れてからの流れは上述の通りである。しかし、このままでは一ページも埋められないので、四十歳半ばを超えて、何となくやり始めたことを記載してみたいと思う。

◆その1：散歩&お参り

一年ほど前から健康の事を考え、休みの日は近くを散歩するようになった。距離にして三～四㎞位であろうか、駅で二～三駅を歩き、電車で帰ってくるパターンである。その途中に八幡宮があり、何となく一度お参りしたのがキッカケで、休みの日は欠かさずお参りするようになった。不思議なもので、今ではお参りしないと「何かやり残してしまった」という気分になってしまう。何を祈願するでもなく、御賽銭を入れて手を合わせる……といった具合である。

面白いのは、毎回同じような時間に行っているので、同じ人に出会い、自然と挨拶をするようになったことである。知らない人ではあるが、挨拶をするというのは何となく清々しい気分になるものである。

私の父も、毎朝四時に起きて柏原の八幡山に登ってお参りし、鐘をついて降りてくるということを二十年も続けている。私が帰省した時、寝ていると父がバタバタと出ていくので目が覚めてしまう。そのまま眠れ

ずウトウトしていると、鐘の音が聞こえるのである（柏原ご出身の方で帰省された時、早朝四時頃に鐘の音が聞こえると思います。間違いなく私の父です）。父に「もう少しゆっくり寝とけばいいのに」と言うのであるが、逆に誇らしげである。考えてみると、父のように早朝ではないが、今の自分も同じようなことをやっている。姉や家内に言わせると「あんたも結局、お父さんと同じや！」ということらしい。傍からみていると「やはり親子だな」という印象であろう。今は仕事があるので、父のように毎朝という訳にはいかないが、自分が定年になった時、毎朝欠かさずお参りしているような気がする。

◆その2：読書

この年になって、本をよく読むようになった。二〇〇四年十月から東京勤務となり、生まれて初めて電車通勤をするようになったのがキッカケである（中学と高校は自宅から徒歩通学。大学時代は大学のすぐ裏に下宿。会社に入ってからは仕事が営業であった為、入社以来、通勤も仕事での移動もほとんど車であった。二〇〇七年十月からは横浜勤務で、また車通勤に逆戻りしたが……）。電車に乗っている間は暇で、「何か本でも買って読むか」と思って、売店で一冊の本を買って読み出したのが始まりである。

特に、ジャンル・作家に拘りはない。経済小説や歴史もの等、ここ三年、いろんなものを読んだ。強いて言えば歴史ものが好きで、最近は北方謙三が多い。『三国志』（13巻）を読み終え、今は『水滸伝』（全19巻）に挑んでいる。このように長編小説を読むということは、以前の自分では考えられなかった。今思えば不思議である。

上述したが、休みの日は散歩とお参りをする。その後、駅近くのドトールかスタバに行き、コーヒーを飲みながら本を読むのが楽しみの一つになってしまった。コーヒー一杯で二時間位いるので、店からすると余りいい客ではないかもしれない。いつも土日の同じ時間（午前九時頃）に行っているが、よく見ていると同じ人が来ているのに気がつく。新聞を読んでいる人やPCで仕事をしている人等様々であるが、何となく自分と同世代の人が多いような気がする。私のように

いつも単行本を読んでいる人も何人かいる。神社のお参りと違って挨拶はしないが、どこかで出会ったら会釈位はしそうな気がする。

自分の部屋も単行本でいっぱいになってきた。そろそろ処分しなくてはならないと思っている。学生時代も含めて、若い頃は全く読書というものに興味がなかった。今考えると不思議である。同時に、若い時にもっと本を読んでいた方が良かったなとも思う。おそらく、読書はこれからも続けていくであろう。

◆その3：スポーツジム

昨年の夏から、スポーツジムに通うようになった。自宅から三分位の所に区立体育館があり、一年前にその中に開設された。一回二〇〇円と安く、週に最低三回は通っている（土日で何もない日は必ず、ウィークデイも早く帰宅した日は通っている）。

キッカケはやはり健康の為。三年前から人間ドッグを受けているが、年には勝てず、最近メタボの兆候が出てきたようで、ドクターからも運動を薦められていた。自分でもマズイと思ようになり、また家から近くて安いという好条件が重なり、通うようになった。

内容は機器を使ったウェイトトレーニングとランニングマシンによるランニング。当初、ランニングでは、八km／hで一五分走るのが限界であった。少しずつ時間を延ばし、速度も上げていった結果、今は一〇km／hで四〇～五〇分走れるようになった。ウェイトトレーニングで上半身も鍛えているので、走り方も安定してきたように思う。自己満足かもしれないが、自分なりにかなりの進歩であると思う。

体を鍛えるということは、社会人になって初めてのことである。中学ではバスケット、高校ではワンダーフォーゲル、大学ではバスケット、と学生時代にスポーツはそれなりにやってきた。社会人になってからは、付き合いゴルフや若かりし頃はスキー等をやっていた程度だった（仕事上の付き合いがほとんど）。この年になって、「体を痛めつけて鍛える」ということに目覚めるとは夢にも思わなかった。また、家族の予想に反して継続しているのが、自分でも不思議である。

私がジムに通っているということを会社の部下も知るようになった。五月二十四日に谷川真里の企画する

「谷川真里駅伝」というのがあり、うちの若手所員に誘われ、有無を言わさずメンバーとしてエントリーされた。他の営業所からもエントリーし、四チームで競争することとなった。荒川の河川敷のコースを五㎞／人×四人で二〇㎞をリレーで走る。スタートは各営業所の所長（要は年配者）ということで、私が1番走者で走った。一応、ジムで鍛えているという変なプライドと、実際どの位で走れるか試してみたいという気持ちもあり、内心は楽しみでもあった。結果は四人中三番目のタイムで二七分。自分なりにはまあまあかなと思っている。どちらにしても、取りあえず完走できたということがうれしかった。今後は、一〇㎞、ハーフマラソン、フルマラソンとレベルアップしていきたいものである。

ジムに通いだして一年、体は何となく軽くなってきたように感じる。また、GFで一八ホール回っても、以前より疲れを感じなくなった。八月二十八日に人間ドッグに入る予定であり、結果が楽しみである。

以上、四〇代半ばを過ぎてやり始めたことを三点記述した。私は以前から「趣味は？」と聞かれて、「これ」と答えるものがなかった人間である。何でも適当にやるが、「これは……」という趣味がなかった。この年になって始めた上述三点は、今後も継続できそうな気がして、自分の趣味といえそうな気がする（「散歩&お参り」が趣味と言えるかどうか疑問であるが）。

また、この三点は土日に行っており、日中の大部分を使ってしまう。お陰で、土日に家で仕事をすることが少なくなってしまった（一時期は一日中家で会社のPCを開いて仕事をしていた）。いいのか悪いのか解らないが、土日は充実感を感じるようになった。今後も継続していこうと思っている。

人の手足になって

石倉良介（栢原町）

ふとした縁でケア・介護の仕事に携わっている。それまでは全く未知の分野であった。今回ケアの分野で原稿を書こうと思っていた矢先、アメリカからビッグニュースが飛びこんできた。ご存知のバン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した辻井伸行さんと母親いつ子さんのことである。

たまたま全盲というハンディがあったにせよ、そのハンディを、天は優れた耳と努力する資質に変えられた。ご両親は当初、どんなに精神的混乱から、逆境に負けない精神力で事実を受容され、海のように深く大きい愛で、二人三脚で伸び伸びと育てられたか、痛いほど分かる。

五体満足である私達は周囲に対し、誘惑、習慣、思いやり等、社会生活上神経の使うことが多く、結果、中途半端なことが多いと思う。古くは天才画家の山下清さんも、絵画で美事な花を咲かせた。地域作業所で働いている人達の中でも、「バイオリン、ギター、ピアノ等音感に対し鋭い感覚を持つ者」「絵画、書道にみる特別優れた才能」「常人では分からない作詩の世界」「玄人はだしのマジックの達人」等、人との付き合い方は上手くなくても、エンパワーメント・アプローチで損得はなく、ただ好きなことに没頭するという一点で、自分自身の得意分野を開花させつつある。

しかも、あの明るさはどこから来ているのだろう。一瞬の内にスキンシップ出来ることもある。障害を持った方は、人を見る目が研ぎ澄まされていると思う。他人の手と足を貸してもらい、ケアを受けなければならないので、数十秒で人を見分けてしまう。決して、これは素晴らしいことではないと思う。

車椅子を押すと、歩道の凸凹、傾斜の多さ、店内に入る段差がつくづくと気になる。更に鉄道会社でバリアフリー化に対し、かなりの対応の違いが見られることである。私鉄はエレベーター、駅員の対応が概ね良

好だが、ＪＲは駅の数も多いが未整備の所が多く、社員の教育も不充分と感じられる。

礼儀として、立って歩ける人は車椅子の人を見下ろして話しかけるとセミナーで聞いたことがある。ブラジル、インドの人に会う時は、彼らはかがんで目線を合わせて話をしていた。腰の悪い人でない限り、なるべく人と人とは目線の高さを同じくして話すべきであり、欧米諸国では更に徹底されていて、福祉を学ぶ学校でもっと厳しく教えるべきだと思う。

猛烈に進む少子、高齢化社会では世界的にも経験のない〝ケア社会〟になる。誰もが見知らぬ人と出会い、励まし合い助け合っていかなければならない時代である。障害が重くなればなるほど、利用者は〝ケアを受けるプロ〟である。現状は介助者に対し、これ以上注文をつけられない、人間関係が気まずくなると困るから、とわがままを出来るだけ抑え、じっと我慢している。今後、利用者がはっきりと自分の思いを伝えた時、真の高齢社会化、弱者のない社会が訪れると思う。それこそが地球の財産となり、世界の中で日本の歴史を創り、文化を創るのだと思う。

垣根が早く消え去り、お互いが更により良い共生社会が生まれることを願って。

科学教育に体験博物館を

青木保夫（市島町）

Ⅰ・あなたの観察眼は？

先ずは次の問題をお読み下さい。解説は、この文の最後に。

①入浴の前後で、あなたの体重は増えるでしょうか？減るでしょうか？

②コップに水道水をとり、この水を30～50㎝の高さから、例えば流しの上へこぼして、その音を覚えておいて下さい。次に水道水のかわりに熱い湯で、同じ実験をして下さい。両者で音の高低の区別がつきましたか？　さて、熱湯を30分ほど室内に放置して冷まして下さい。この白湯をコップにとり、同じ実験をして音を聴いて下さい。水道水と熱湯のどちらの音がしますか？

③人間と鶏では、どちらが頻繁に「まばたき」をするでしょうか？

Ⅱ・体験型博物館（Exploratorium）

先の問いは、日常経験から答えが導かれるはずです。多くの人に、この種の疑問を持つ・持ち続ける教育が出来ればと希望します。それには、体験博物館を創るのが良いと思います。

日本にも沢山の博物館がありますが、僕の目で見ると箱物行政が主流、特定の展示物、主にティラノサウルスにお金を掛けすぎています。壊してもよいから、触って・使ってみるような安価な展示物を多く置く方が良いと思っています。体験型博物館で最も成功しているのが、exploratoriumであると思うので、先ずは、これを真似るのが良いでしょう。

これからの日本が国際社会の中で旨くやっていくには、平均的な科学リテラシーの程度を上げる努力が必要です。欧米では、トップの人間の指導の下に作業をしますが、日本では「数の論理」又は、「平均値を上げて」これに立ち向かうのです。第二次世界大戦での敗戦から日本が立ち直れた最大の理由は、文盲率が非常に低いことが原因だと考えています。このシステムはある時期まで、非常に旨く機能しました。この日本で成功したシステムを伸ばすのが良いと思います。国内に、科学教育に努力している個人や団体は多いと思いますが、成功していると評価できるところは非常に少なく、その理由の一部は、組織的に人を動かすためのシステムが不足しているためだと思っています。この一環として体験博物館型の組織を支える文化系人間の養成が課題だと思います。僕の観測では、博物館の中身を支える理科系人間は、今ならば国内に沢山いるでしょう。

文部大臣か兵庫県知事さん！　**民博のような体験型科学博物館を日本につくりませんか？**

Ⅲ・問いへの付言

①１００gの体重変化を検出できる体重計があれば、すぐに実験できます。入浴時に体重が増える要因と減る要因を考えて下さい。

②前半はロゲルギストの「物理の散歩道」に登場し、後半は僕が追加したものです。白湯が熱湯の音をたてるならば、過去の状態を記録しているという意味で「水には記憶がある」という、エセ科学者が飛び

つきそうな結論になります。

この実験を急須と湯飲みで行うことを考えて下さい。急須から湯飲みに注ぐ時の擬音が「トクトク」か「パシャパシャ」で、熱湯が注がれたか冷水が注がれたかを判断出来ませんか？

そうです。日本人はずっと前から、熱湯と冷水のたてる音の相違は認識していたのです。

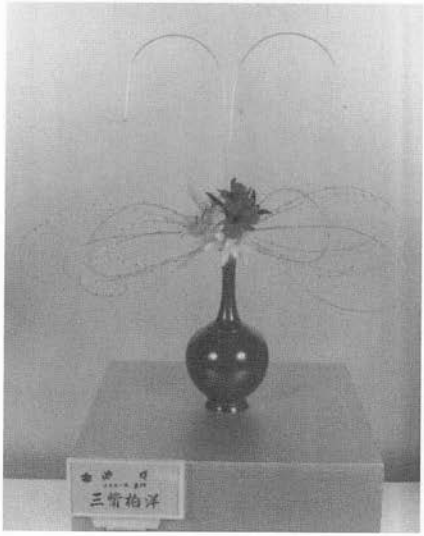
水の記憶の方は、この人は出来ると僕が判断した物理屋にも返答出来ませんでした。どうぞ、ご自分で実験し、考えて下さい。

この文を読まれた方の中に化学専攻の方がおられましたら、水を他の液体に置き換えた実験も考えて下さい。分子集合体の高次構造を反映しているように思います。

③涙が蒸発するから、この対策としてまばたきをすると考えます。細かく言えば、涙の組成や体温にも関係するでしょうが、この効果を無視します。水が蒸発するには、蒸発を促す原因と、これを妨げる効果とが拮抗しているはずです。

上の仮定の下で、水の蒸発阻害要因は液体の形にどのように依存するか？と考えれば、答えは自明でしょう。友人の物理学者は、「そういえばうちのカナリヤは……」と言っていました。ご自宅のペットと暫くにらめっこをしながら考えて下さい。

（追記）読み返してみて、Exploratorium の説明が不足している。興味をお持ちの方は、以下のサイトをご覧下さい。http://www.exploratorium.edu/ またサンフランシスコで時間がとれるならば、訪れるべき施設の候補と考えてみて下さい。



（いけばな・三背柏洋）

かくも愛しき存在—PARTⅣ

岡田昌子（柏原町）

我が愛犬愛ちゃん（ミニチュアダックスフンド・8歳）のもとに、お泊りに来るうさぎがいる。つくばから長女と一緒に電車や高速バスに揺られてやって来る。うさぎであっても久し振りの出会いは楽しいもので、愛ちゃんも私もウッキウキ。（ホンマかいな？）名前は紋ちゃん。女の子であるが、とても気が強い。「家系かねえー」と笑っているが半端ではない。

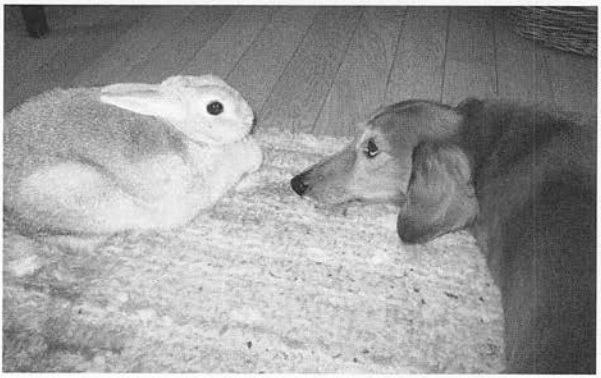
うさぎは天敵に狙われ易いために臆病で神経質らしい。ポジティブシンキングすれば慎重で不安を先取りする能力ありといえるが、ネガティブに捉えるならば、オドオドして懐かず、関係性が取り難いということ。それで納得。ダッコして可愛がれると思いきや、どっこい、そうではないらしく、勘違いのトンデモハップンだった。（わおっ！歳が分かるギャグや！）未だに誰もが抱かせてもらえない。癒しを求めるには、ただ、ただ、つぶらな瞳を〝可愛ゆ～い！〟と、こちらがハートマークの眼差しで、時を忘れ、我を忘れ、唯ひたすら見つめさせていただくくらい。

可愛いことには変わりはないが、紋ちゃんの本領発揮時間帯は我家での発着時。長旅の疲れもあろうが、到着時は機嫌が悪くパニックを来たす。何をされるのか分からない故の恐怖で、当然の反応であろう。が、ケージに移すべく胴をつかまえようとした瞬間に咬まれる。それは本当に素早い。あんまりである。こちらは好意で移させていただいているのに。痛さに懲りて今は手袋が必需品なのだが、うさぎの歯は鋭い。グイッとえぐられ引っかかれる感じ。痛いの痛くないの（どっちやねん？）いつまでもズッキズキ。こちらの歳の関係もあるので一度咬まれたら治りが悪いこと、悪いこと。1週間以上は痕が残る。痛いので思わず手を離す。紋ちゃんは逃げ回り、床を滑りながらの大暴れ。一回では移せない。おひい様のご乱心。下々の者は怪我をしては入れ替わり立ち代り、皆、傷だらけ。

そんな紋ちゃんはネザーランドワークという品種で、ピーターラビットやさる銀行のモデルといえば分

かり易いか。オランダが原産。アナウサギが品種改良され、パンダうさぎが更に小型化されたものという。品種改良が進み、今では一五〇種以上のうさぎがいるというのには驚かされる。

肝心の愛ちゃんと紋ちゃんの関係であるが、最初の出会いは大変であった。愛ちゃんの野次馬根性（誰に似たん？）や皆が紋ちゃんに熱中しているやっかみもあったのか、ケージに入れようと大騒ぎしている最中に、紋ちゃんのお尻にガブッと噛み付いた。匂いを嗅ぎに行ったのかと思った隙のガブリである。これも早業。紋ちゃんは一層パニックに。地肌に達しておらず怪我はなかったが、十円はげのように毛が抜けてしまった。相当のストレスだったらしく、毛が生えそろうのに時間がかかった。今では動物同士のせいか、穴好き同士のせいか、はたまた、先祖の出身地が隣国同士ということもあるのか（ないんとちゃうか？）逢う度に仲良くなり、兄妹のように自然体である。



そんな愛ちゃんも、別れの時はいつも悲しそう。紋ちゃんをバッグに入れる時、「行かないで！」とでも言うかのように間に入って邪魔をする。〝ヒーンヒーン〟と鳴く声が切ない。別れは出会いの始まりと自分を納得させて久しいが、愛ちゃんを見ていると今は亡き母との別れを思い出す。

見送りに来た一人暮らしの母を、柏原駅に残して発つ時は、いつも涙があふれ出し、電車の中でしのび泣いたものだった。歳とともに情念を断つという諦観の必要性を会得したが、愛ちゃんもそんな思いでいるのだろうか。人々との出会いと別れの祭典であるお盆がまた来る。愛ちゃんが親戚の子どもたちに揉みくちゃにされ、気遣いする、楽しくもあり悲しみの増す日々が……。

医学の進歩に期待する

日置孝彦（氷上町）

時代の変化と共に社会の秩序は乱れ、信頼が失われている。しかも不安や不信が渦巻く混沌とした世の中に変貌しているのである。これがいまの世相である事に驚くばかりなのである。本当に暗いニュースが多く、不安が募る世情でもある。

そんな最中、今年二月四日（水）午後七時のＮＨＫ総合テレビのニュースの時間での出来事である。自分自身が一瞬テレビの画面に釘付けになった。ほのぼのとした心に残るニュースだったからなのだ。

それはＩＰＳ細胞（万能細胞）を人体に用いられることが近い将来、実現可能になるであろうという報道であった。ＩＰＳ細胞によって切れた中枢神経細胞を繋ぐ働きをすることが実証されたというのである。ニュースの発信源は、慶應義塾大学医学部岡野栄之教授の研究グループがマウスの実験によってＩＰＳ細胞が成功したということであった。そこでマウスの実験結果が公表されたので、その経緯を辿ることにしよう。

◇マウスの実験は成功

実験には健康なマウス二〇匹を選び、それぞれ二〇匹の脊髄を傷つけ、一匹ずつ透明なケースの中に入れて実験が行われたという。それらの実験用ケースの中では、麻痺した後ろ足は棒のようになってケースの底の部分に横たわり、後ろ足の裏が上を向いた状態である。必死に前足を動かしているにも拘わらず、後ろ足は引き摺ったままの痛々しい姿である。二〇匹のそれぞれが前へ進もうとしている様子が、テレビの画面に写し出された映像から見て取れる。実験では脊髄損傷部分にＩＰＳ細胞を移植する手術がマウス二〇匹のそれぞれに試みられたというのである。ＩＰＳ細胞が移植手術されてから一週間が過ぎても何の変化も起きなかったといわれている。

しかし日数が経つにつれ、マウス二〇匹に変化が現われるようになったというのである。いままで後ろ足を引き摺っていた状態でしかなかったものが、後ろ足

の左右を動かしはじめたのである。これはＩＰＳ細胞が活発に働きだして増殖していることを示したものだとされる。すなわち、ＩＰＳ細胞によって脊髄損傷部分が修復されたことが認められたというのである。

マウス二〇匹のうち、一六匹が三週間で本来の健康なマウスの体型に戻ったことが確認されたというのである。テレビでは、マウスの本来の健康な体型に戻った時の映像が写し出されていたのである。最初にテレビの映像で見た時の実験のマウスであるといわれても、全くといっても良いほどに信じ難いものだった。これが公表された実験の要旨である。驚きと衝撃のあまり、逸る心を抑えながら取るものも取りあえず無我夢中でメモ書きしたのだった。より多くの方々に脊髄の機能と働きについて関心を示して頂くために国語辞典（岩波書店刊行）を紐解いてみることにした。

脊髄とは、背骨の中を通って脳の延髄に続く、灰白色の綱のような器官と説き明かされている。では人体においてどのような働きをするのであろうか。脊髄は、脳と体の各部とを連絡し、知覚運動や刺激の伝達、さらには反射機能を司る中枢神経系統を支配する最も重要な細胞組織であることがわかる。

◇人体に用いられる対象者

ところで、マウスの実験によってどのような人達が対象者であるのかということが問題になるのである。現実社会では、交通事故をはじめとして様々な事故が発生している。例えば高層マンション建築や高速道路工事などでの転落事故によって脊髄や首の骨折による頸髄を損傷して障害者になった人達がいる。

一方、スキー、スケート、サッカー、ラグビーなどのスポーツの事故において脊髄や頸髄の損傷による障害者の人達もいるのである。このような事故による障害者ばかりではなく、パーキンソン病を患った患者も対象者といわれている。事故は人生不意打ちに襲いかかってくるものである。

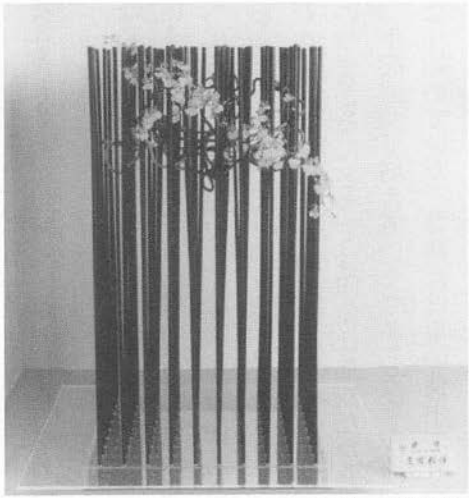
私の場合、平成四年八月六日の夕刻、勤務先から家路へ向かう時だった。いつも通勤に利用する駅の階段からホームに転落し、頸髄損傷になったのは五四歳の時である。首から下の運動機能を完全に失ってしまった。それからは日常生活が人並みに出来ないという深

刻な問題が増大し困窮を極めることになるのである。

事故から六ヶ月後、平成五年二月十七日、横浜市から『身体障害者手帳』が交付された。同手帳には「外傷性頸髄損傷による四肢麻痺一級」と記載されている通り、大変厳しい現実を知ることになる。歳月は容赦なく私を追い越して行く度、悶々とした日々を過ごさねばならなかったことか。しかし私だけではなく、家族が「渡る世間は鬼ばかり」といった辛い思いをしたことも事実なのである。私が事故に遭遇して一番悩み苦しんだのは、他でもない最愛の妻なのであることを理解している。献身的な介護の毎日、妻への感謝の気持ちは言葉では言い尽くせないものである。裏を返せば、介護のために一日、一ヶ月、半年、一年、十年と自由な時間を奪い拘束していることなのである。

◇まとめ

従来のラジオ、新聞、雑誌などの情報に比べ、テレビの映像で知る情報は真実を訴えるものがある。強いて言うならば、説得力のある素晴らしいものであることを実感できるものである。今回、前述してきたマウスの実験の成功は、結果であってさまざまな苦労の積み重ねの上に生まれたものなのである。たかがマウスの実験と侮ることなど、決して出来ないものなのである。今までは夢物語でしかなかったものが手の届くところまで来たということでもあるのだ。現実には一歩近づいたと言うことである。一日でも早く、夢叶う日が必ずや到来することを祈るものである。最後に夢果たすことを信じたい。



（いけばな・三觜柏洋）

山ざるの「ラジオ交通情報」事始め

高見秀史（市島町）

毎月、丹波市役所から送られてくる「広報たんば」で、故郷の様子を懐かしくまた興味深く知ることが出来る。その中で、市内の交通事故発生状況のデータに目が止まった。

今年の前半六ヶ月で、人身・物損事故など一一八五件とある。おそらく殆どが自動車が関わる事故と思われるが、その多さに驚いた。もっとも前年より二〇％くらい減のようなので、交通安全についての地元関係者の努力もあるに違いない。

交通事故は自動車の数にも比例すると思われるが、同じく資料によれば目下市内の台数は六万七千台。一世帯あたりの所有台数は二・八台にもなるようだ。

私が郷里にいたのは昭和二九年まで。その後も年何回かは帰郷したものの、当時はそのような自動車事故などはお目にかかったことはなく、自動車そのものも珍しい存在だったと記憶する。郡内に千台も有ったかどうか。

そんな私が、神戸の大学を出た後、東京のニッポン放送というラジオ局での仕事に就いた。たまの帰郷から職場へ戻ると、いつもその差に驚くのが車の渦。その頃からのモータリゼーションの始まりだった。

さすが大東京とはいえ、自動車の数は驚きであり、田舎出のやまざるにとっては印象は強烈だった。と、同時に、年を追って増えていくであろう車の渦の影響も気になり始めていた。業務には車の使用が許されていたこともあり、私も交通の混雑に悩まされ始めていたこともあった。

車の増加につれて、関連するモノや新たなサービスも登場し、その一つとして「カーラジオ」が開発され、移動中の車内でニュースや音楽を聞くドライバーも見受けられるようになっていた。

そのような背景の中で、当時、ニッポン放送は新たな事業への参入ということで、フジテレビを作り、テ

レビの時代への体制もとり始めていたが、急速に伸びるテレビの普及率から、民間放送としてのラジオの強化が、特に営業的に大きな課題となり始めていた。当時、私の所属は営業部門で、いわゆるスポンサーとしての広告主のメンテと獲得のための活動が日常の業務だった。放送局といっても、誕生してまだ数年の存在であり、社内は極めてフレキシブルで、編成・制作といった他の関連部門との垣根は低く、営業部門といえどもスポンサー獲得のための番組の企画などの提案が認められることも多かった。

新たなスポンサーソースの開発をテーマとしていた私が、どうしても気になっていたのが、この増えゆく車の多さであった。多分、東京住まいが長い人たちは当然のこととして、その状況に気を止めることはなかったに違いない。

最初の交通ニューススタジオ

「車の混雑」と、市場に出始めた「カーラジオ」とが結びつくのではないかと考えた私は、さる大手のカーラジオメーカーにアイデアを持ちかけた。

「都内の交通渋滞箇所の速報」をラジオで番組化できれば、そこを避けるなどドライバーにとって求められる情報になるのではないか。そんな番組を提供することによって、カーラジオの効用と普及が高まるのでは……。実は、内心、実現は至難と思いつつも無謀な構想を提案。

担当者は大乗り気。スポンサーになる！

帰社し、番組編成を担当する部門にその企画を恐る恐る持ちかけた。案の定、即座に却下。当時ラジオはまだテレビが及ばない、お茶の間の主役。

編成部曰く「お茶の間に、そのようなドライバー向けの番組を流せば、他局にダイヤルを変えられてしまう」「交通混雑の情報を取材するソースもない」「ねらい目は判るが……」もっともな理由だった。

広告主に提案した手前もある。引き下がるわけに行かない。今度は、実現した場合、情報ソースを受け持

つことになる報道部への交渉も平行した。ＮＨＫ出身の誇り高い報道部長は、そんな取材なんて報道部がやる仕事ではない……と取り付く島もない。しかし、私の再三の申し出に根負けした部長は「警視庁担当とやってみろ」。

警視庁詰めのキャップが乗ってくれた。交通部に対し、この企画への理解と取材へ再三の執拗な協力の要請。私も連れられて幹部へ何度も足を運んだ。

日を置いて、ようやく警視庁として、ニッポン放送独自での取材で始めることで了承。それを認めてくれたのは交通部長の内海倫さん。今にして思えば、大胆とも思える英断を下した内海さんは、その後、交通政策の権威として折からのモータリゼーションの時代に対処されたが、人事院総裁の後、兵庫県人会の副会長としてお目にかかることになったのは奇遇であった。

そのような経緯でようやく誕生した「交通ニュース」だが、警視庁の承認は得られたものの民間レベルの独自取材とて、都内の混雑が多い一三地点の主要交差点の情報源を煙草屋さんや商店に求めて、放送時間直前に車の交通量などの連絡を電話で受ける。それをスタジオから放送するという手作りの交通ニュースが、毎日夕方五時四〇分から始まった。一三箇所からの電話を受けてなので、最初の連絡は二〇分も前といったタイムラグもあって、放送で空いているといったものが現地は混んでいた……などの問題もあった。

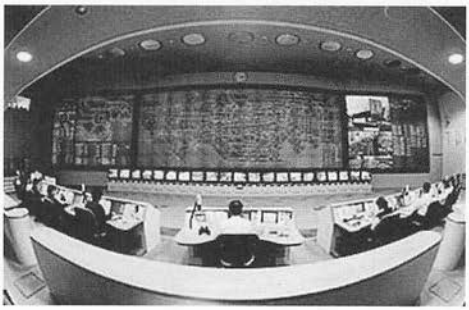
しかし、予想以上の反響の大きさに驚いた警視庁は、本格的に乗り出すこととなり、「交通統制班」を組織してくれ、主な交差点に近接する交番から取材、それを警視庁内に特設した当社放送ブースからアナウンサーが速報する仕組みが出来、信頼度が高まった。一日数回の混雑情報をカーラジオで聞いて、迂回するなどのドライバーも増えて、益々、当社の交通ニュースの人気も上がっていった。これを見た各ラジオ局からの要請もあり、警視庁として情報の強化と公開ということで、「交通情報センター」を開設することとなった。昭和三六年五月。ようやく本格的な交通ニュース体制の誕生である。

その存在は、益々増加一途の交通戦争といわれる中

で、渋滞緩和や安全面の役割も果たすところとなり、警視庁も都市交通の著しい激化に対応して、その強化のためのシステムの開発を更に押し進めていった。時を経て、昭和四九年「交通管制センター」が完成し、コンピューターを駆使した世界最大の交通管制システムの稼動となった。

警視庁内の広大なセンターの正面に、都下の道路が地図表示された電光掲示板が設置され、地図上に各交差点の渋滞の状況が赤やオレンジといった色別で表示

今の交通情報放送ブース



警視庁交通情報センター俯瞰写真

される。それを見ながら、同時に主要な交差点のカメラからの映像をモニターで確認し、ブースのアナウンサーが速報する形となった。

今は、警視庁管内の三千の交通信号機や一万を越える車両感知器からの情報を処理する高度の仕組みによって精度も高まり、更には東名名神の高速道路など全国一三四箇所の拠点と結んでの広域の「日本道路交通情報センター」となって、交通事故・交通渋滞及び交通公害の防止など、我が国における交通上の必要なインフラともなっている。

交通情報の元祖となったニッポン放送も、日にわずか1回の放送から、今は毎日二七回の多くを警視庁のセンターから随時お伝えしている。

首都圏に生活する人々が、いまや通常の情報として何気なく聞いているラジオやテレビの交通情報であるが、その誕生の切っ掛けは、車や渋滞に無縁の丹波のやまざるが抱いた車の渦への素朴な驚きであり、都会人が気づかなかった目であった。

今は昔、半世紀前のことである。

ハルよ、遠きハルよ

矢尾　鐵太郎（柏原町）

毎朝、ハルと散歩に出ます。もう長年の習慣です。十七歳を超えたハルの四肢はもうすっかり衰えて、外へ出るのがやっとです。殆ど歩きません。家の中ではおむつをしています。外へ出てもハルはじっとしています。場所を移動する時は、私が抱きかかえて運ぶことが多くなりました。何か遠くのものを見るような、夢の中のことを考えているような様子でじっとしています。時にはそれが何か深い思索の中にあるように思え、哲学者のように見えることもあります。

二男が大学三年の夏、アルバイト先から子犬をもらってきて、それにハルと命名しました。二男は初めのうちこそ熱心にハルの世話をしていましたが、間もなく、それは私たちの仕事になりました。飼ってみるとハルは実に可愛い犬でした。私たちはすぐハルが大好きになりました。ハルがいるために家の中が明るくなったようでしたし、彼のために皆が少し優しくなったようにも思われました。家族の中で、ハルは大事な存在になっていきました。家族の会話の中で、彼の話題がかなりのウエイトを占めました。

#

若い頃のハルは本当に元気で命にあふれていました。そして、ハルの一番の長所は喜び上手であったことでした。嬉しい時、彼は頭を低くし、ひたと私たちの方を見上げ、懸命に尻尾を振りました。誰が見てもハルが嬉しがっていることがひと目でわかりました。そして、彼が嬉しい時、私たちも嬉しくなりました。サラリーマンをしていた私は、上司とうまくいかないことも多かったのですが、自分にも尻尾があれば……と思ったことも少なくありませんでした。

#

今でもその姿が鮮明に蘇ってくるエピソードがあります。私たち（家内と私）は休みの日など、買い物に行くにもハルを連れて行きました。私たちが買い物をしている間は彼を外に繋いでおくのですが、買い物を終えた私たちの姿を見た時のハルの喜びようといった

ら大変なものでした。ある時、道路沿いの場所にハルを繋いでいたのですが、私達が現れたとたん、彼は喜びのあまり飛び上がり跳ね回り、何度も引き綱に地面に叩き付けられました。それでも彼は止めませんでした。丁度信号待ちで止まっていた車の人達がそれを見てみんな笑っていました。そして、私たちはそんなハルの飼い主であることを誇らしく思ったことでした。

#

ハルにはまた別の特技もありました。私達の住む町では、夕方五時になると「野ばら」の曲が流れます。散歩の途中でそれが始まると、彼は耳をピンと立て、メロディーが流れてくる方向を向き、頭を高く上げて遠吠えをしました。それはその音楽に合わせているようでもあり、対抗しているようでもありました。その姿を見た人達は、一様に表情を和らげ、ちょっと笑ったり、「上手だね」と声を掛けてくれたりしました。このことでも私たちはちょっと胸を張りたい思いでした。

#

ハルは家族の中でも特に私を好いてくれました。私がパソコンに向かっていると、彼は部屋の入口のほうを向いて私の脇にうずくまり、如何にも私を守ってやる、というような様子でした。私が数メートル離れた和室の方に移ると、彼はすぐ付いてきて、和室のふすまの前にうずくまるのでした。あんまり私の後を付いてくるので、家内から「くっつき虫」と叱られていたことが何度もありました。夜寝る時も、私の部屋のドアを前足で押して入ってきて、何事もないことを確認してから自分の寝床に戻るのが常でした。彼が部屋に入ってくると、私はいつも暖かい気持ちになりました。心が休まり、落ち着いたものでした。

#

ハルとの長い年月が過ぎました。私たちも年をとりましたが、ハルはもっと年をとりました。この頃では嬉しい時に尻尾をふることも出来ません。でも、何となく彼が喜んでいるのを私たちはわかります。私たちが出かけるとき、彼が寂しい気持ちでいるのが私たちにはわかります。私たちが外出から戻った時、もう昔のように飛び上がり跳ね回ることはしません。でも、よろよろと玄関まで何とかやって来ます。そんな彼の

顔を両手で包んで、「いい子だったね」と褒めてやります。彼はじっとしているだけですが、きっと嬉しいに違いありません。

#

ハルとはもう一年も暮らすことは難しいでしょう。この夏を越すことだって無理かもしれません。彼は確実に私達の元から彼方遠くへと歩き出しているのです。喜びだけを体全体で表現し、不平不満や怒りは表さず、相手の非を責めることなく、「痛い」とも「苦しい」とも訴えず、彼は自分の命を静かに見つめているように見えます。私たちはいずれ近いうちにやって来る、ハルとの別れに耐えねばならないでしょう。私たちから毎日少しずつ離れていくハルを、もうこちらへ呼び戻すことは無理だ、と私たちもわかっています。今私たちに出来ることは、静かに彼を撫でてやることだけです。

私とどてらい男

荻野禎一（氷上町）

昭和五十七年四月、大学卒業後、大阪の立売掘の機械工具の専門商社山善に入社。家業が自転車店を営んでいた（現在も八十二歳現役）ので、商いに関しては興味もあったように思います。

入社先を田舎の親父に報告した時、「きつい会社やけどやっていけるか？」と言われたが、「大丈夫や」と答えたことを思い出します。

親父が心配したのには理由がありました。昭和四十八年、花登筐氏原作でテレビで放映され、大ヒットした「どてらい男」の会社でした。西郷輝彦が主役をやり、福井の田舎から丁稚奉公に出た少年が太平洋戦争を挟み、戦後に一部上場企業となるまでを描いていました。私が放映を見たのも中学二年から高校生の頃だったと思います。当時、猛烈会社、猛烈社員といった厳しくきつい会社のイメージが親父にはあったよう

です。

大阪採用後、東京に配属になり、希望して2年目で新潟支店の営業に出ました。内勤と違い営業に出るとライバル会社も多く、自分が思ったほど商いも出来ず悔しい思いをしたこともありました。二十六年間の会社勤務の中でいろいろと悩んだ時期もありましたが、創業者現職時は生声で、他界後は〈猛やん語録〉で勇気づけられ、勤務出来たように思います。その一部を紹介させていただきます。

（営業時代）じゃが芋精神

「切られても踏まれても芽を出すのがじゃが芋。人はじゃが芋のような生命力と精神力で何事にも積極的に取り組みたいものだ。」

人生良い事も悪い事もあるが、一喜一憂していては価値ある良い仕事は出来ない。それなら難しくても耐えて跳ね返す精神力を持ちなさい。

（中間管理職時）上司や同僚に気を使うために会社へ来るな。

「自分の仕事が何かを考え、それに全力を尽くすべきで、他人に気を使う必要はない。また自分の悪い所を指摘されて腹を立てるのは反省すべきだ」

（部門長職時・現在）トップの能力

「会社や組織はトップの能力を超えて大きくはならない」

会社や組織は、その長たる人間がどれだけ頭を働かせ、社員の先頭に立って動き努力するかで決まる。長たるものが怠ければ部下も組織も勢いを失い澱んでしまい、成長も止まってしまう。

#

入社以来、関東地区に二十六年在籍しておりましたが、この四月の人事異動で九州支社（博多）へ単身で赴任しました。九州各県も一通り担当営業とも同行しましたが、関東とはまた違った九州の人情溢れるお客様と接し、商いをさせていただいております。

今思うに、我が社も物を販売しておりますが、物を売る前に人間作りだと思います。人間力のある社員を育成すれば、自ずと商品は売れると思います。丹波の里で育ったことに感謝し、丹波人として今後も商道を歩いていきたいと思っております。

折々の記(6)

井本義一（柏原町）

○毎日が月曜日。自分に自由な毎日。それは昔（勤務時代）と違って、束縛されず自分で時間を好きなように創り出せる毎日だ。巡り来る新しい毎日（月曜日）に価値があり、ヒト、モノ、コトとの出会いが楽しい。そんな月曜日（毎日）がわたしは好きだ。自分なりに出会いとして対応できる感性を大切にしたい。三年前の六月二十九日、教育テレビ「視点・論点」で詩人長田弘氏の〝一日の特別な時間〟の話。漱石の「人生とは人の日々の時間に対する態度である」言葉を前置きに、ごく平凡な普通の時間を特別な時間にすることだと言って、例えば緑陰の時間、対話の時間、午睡の時間、食事の時間……にと。ひるがえってわたしは次元低く一F全室室内清掃完了。あとラジオを聞きながら恒例の確定申告書作成、計数事務処理作業が新鮮。納付額前年比較わずかに減少、小さい喜び。今日夫婦の日。（20・2・2日）

○三月二十五日～三十日、墓参を兼ねて帰省、多くの出会いの旅をした。実家で弟妹たちと久しぶりの出会いに始まり、長弟の運転で男兄弟四人、城崎温泉へ十年ぶりになろうか、入浴、食事をしながら両親を偲んだ。八十歳の従兄との出会い、丹波の森公苑と後ろ向き歩きによる再会も。六時前であったが、丹波霧には出会えなかった。二十八日、中学校同窓男子三名、女子二名と三年四ヶ月ぶりの再会をした。懐かしい思い出話のなかで、複数男性教師による女生徒へ胸タッチなど、今で言うセクハラがあったことを五十七年経て初めて聞き、この道は今昔変らないなと思った。二十九日、柏原喜作にて柏高（5回生―1953年卒）卒後五十五周年記念同窓会。出席者八五名、因みに黙祷を捧げた同窓の物故者累計七〇名。五年ぶりの再会者のほか、関係知己の友人で卒業後五十五年ぶりの友人八人との出会いが特に嬉しかった。わたしはクラスを問わず知己と言える知り合いの女性諸氏に「いい女になったね」と言って、彼女達の明るい色気を感じて嬉しかった。また両日を通して持って出ていた井本オ

リジナルの「健康生活目標図」のコピーを、参考にまたは自分の近況のお知らせとして、八～九組（商業科）を中心に知己の諸氏に配った。夜郎自大でなく長年マイペースで実践してきて今現在、体調好調を持続しているこのいいことを独り占めすることはないと考えたからだ。話はできなかった学友にも、見交わす目と目で同窓の友としての心は通じており、男女を問わず再会の喜びの握手を繰り返し、元気をもらったことだった。まさに感激あれ人生のひとときであった。わたしは中学、高校の卒業写真帳を持って出て、それぞれのクラスメートに見てもらい盛り上がった。ふと目覚めた今朝三時台、ラジオ深夜便「にほんのうた」で、荒井由美作詞作曲、ハイファイセットの歌で「卒業写真」のラスト／……あなたはわたしの青春そのもの！。涙（なだ）そうそうではないが、特別の感慨をもって聞いた早朝だった。（20・3・31日）

○帰省中の実家で見た三月二十九日で終わった「ちりとてちん」。小浜での登場人物たちの言葉を聞いていると、実家で、すねかじりをしていた頃、遠い昔の生活を思い出して懐かしかった。「ほんまけ」「そうけ」「ほうけ」「まだ言うとんけ」「どうにかしなはれ」。主人公の母が言った「生きとったら、なんなとあるわいな」の「なんなと」など、全てがすべて記憶が定かではないが、実家で朝から晩まで聞いていたように思う。また小浜界隈から毎日のように二十年以上になろうか実家へ、魚介類の行商にきておられた小母さんと母を思い出した。月～土曜日まで毎朝、故郷を思い出させてくれるとともに、わたしを惹きつけたのは主人公の「どんくさ」さだった。わたしの実社会へ出たてから大阪市内の支店で、もみに揉まれるまで、まさに「どんくさ」さそのものであったからだ。主人公の友人の言葉であったか、「一生懸命のあほほどやっかいなものはないで」「そのやっかいなものがいとおしい」の台詞。特別の感懐をもって受けとめたことだった。今わたしの最もいましめとしている言葉、フロントランナー（朝日）掲出の某社社長の処世訓から、「死而後己」死してのちやむ（死ぬまで一生懸命努力して、死んで初めて全うしたことになる）だが、このドラマ、文学の世界ではあるものの、この主人公のその後を見たい気もする。

（20・4・1日）

○連休四～五日、慌しくとんぼがえりした娘からメール。「パパは腰曲がりがちだから、常に意識して姿勢まっすぐね！　日々の細かい意識の仕方で、この先、はっきりと、年齢の重ね方が変ってくると思う。テレビなどで、かくしゃくとした元気な八十代、九十代の方々が出てくると、必ず皆さん姿勢がいいです。」（以下略）妻と娘から両日にわたり「パパ！腰！」と言われ続けてきたことの駄目押しの便りだった。日常作業で重いものの持ち運びや、清掃、ベランダでの布団干し、庭作業、リュックを背負って三〇分近く歩くなどのあと、必ず曲がりがやってきて、それが鈍い腰痛をともなってくるから厄介だ。自分なりに平素から鍛えているつもりだが、時たま畳の上の薄い一枚ものの上敷きや、洗面所に敷いたカーペットの端につま先を引っ掛けるのも、足が上がってないことにも関係があるのだろうか？　対策は、繰り返しになるが、畳の上に仰向けに寝て腰を伸ばすと正常に、真っ直ぐに戻るのは嬉しい。日課の昼寝（主として昼食後）に連動させている。また公園で日課の腰伸ばし運動のほか、昨秋から月曜日～土曜日のスポーツクラブで、ベルト・バイブレーターを使いながら、尾骨と胃の真後ろあたり二箇所を各五分間、捻りながら右手親指で左胸を、ついで左手親指で右胸を軽く叩くようにして、捻りを加えて矯正しているのは腰骨まわりと左右前腹の筋肉の補強だ。

　ともすれば萎えかかり、諦めそうになる腰曲がりに対して、娘の有難い助言とともに、あのレスリングの浜口親子の「気合だ！」でもって、まっすぐな正しい姿勢をとり戻したいものだ。また、いっとき曲がっても正常に戻す復元力を、繰り返しねばり強く鍛えておけばいいのではないかと考えている。（20・5・7日）

○わが家のかすがいケイスケ＝けいにゃん。二台のテレビチャンネルの取り合い（スカパーが見られるのは一台のみ）など些細なことでわれわれが意地を張って口喧嘩していると、緊張して心配しているのだろうか、身動きせず見つめてくる。「あー、また、やっちゃった。我慢、忍耐」と反省しきり。えさはかかりつけの医師で購入している尿疾患予防用の固形えさの上に、かつおぶしをかけている。早朝から二～三袋ぺろ

り、一マイルドパック（一〇袋）二日間持つか持たないかで、もっと欲しい時は鼻ですりよってきて催促する。もう一つのえさ皿は「青まんま」こと、水菜を文房具用のはさみで細分している。水皿は絶えず水道音高く出し新しくしたのを好んで飲んでいる。排泄用砂はおからから作ったもので大便の場合、最近彼も加齢からか、出したまま砂をかけないケースも出てきた。この場合、彼の発信は、板の間を足音高く全速力で駆け抜けることだ。間髪入れず砂箱内処理に飼い主A型氏の登場となる。ともかく甘えん坊で、「かわいい！　可愛い」「いい子！　いい子」とふたりで彼に接するので、よく判らないが、彼は自分を猫と思ってないのではないかとも。対話不能、遊び相手がいない（二匹飼うのがベターのようだが）ので彼にもストレスがたまるのか、障子紙に細く爪を立てて破る意思表示もしだした。妻の腕枕で寝るのは定番だし、わたしには抱き方が下手なのを知っているのか？　来ないが、妻には前足で両膝上まで伸び上がり「だっこ」をせがむ。わたしの昼寝時のほか、最近毎朝のわたしの外出前（NHK朝の連ドラの時間帯）テレビを見ながら、畳の上で背筋伸ばしをしていると、腹部の上に座り込み毛ずくろいしたり、わたしを上から眺めたりする。ここまでなついてくれて嬉しいのと、お腹は重いが、背筋伸ばしに上からの重しで結果よしと都合よく考えて出来るだけ我慢している。

この春から嬉しいことが増えた。陽あたりの良い日「二階へ上がって寝んねしてきなさい」と言うと、ベランダ隅の日照のよい場所で柵にもたれて昼寝をしだした。また、口内ケアで、わたしのひざの上で両手の高指の腹で、左右のするどい二本の猫歯周辺を直にマッサージできるように、口を開けてくれるように、昨秋からなったことだ。「ケイスケ」「ケイニャン」「ニャンニャン」われわれの三種の呼び声に、尻尾の先で

畳、床上を叩いて答えてくれる嬉しさ、家族としての絆は深まるばかりだ。今朝八時四十三分、岩手宮城内陸地震日。その時間わたしはボランティアに、妻は庭に出ていて震度三は体感せず。愛しのケイスケのみが怖い思いをしたことだろう。かわいそうにと思うとともに、ケイスケを含むわれわれの「老老介護」のこれからに思いを馳せた突発日でもあった。

（20・6・14日）

○十六日夜、二年前の悪夢の再来かとひやりとした。巨人、中日戦をテレビ観戦しながら、直近で扇風機の風にあたっていると身体が冷えたのだろうか、座っていた椅子の上で、なにげなく身体を捻った瞬間、大きなくしゃみがでて、それが二年前あの痛い目にあった左横腹胸郭骨下の肉離れの古傷に影響したのだろうか、またそこにピンポイトの痛みがきた。すっかり完治していたのにまたもや一ヶ月くらい痛みが治まるまで用心しなければならないのだろうか？

翌十七日スポーツクラブで、知人のI氏（七十三歳）が自宅床上で、昨夜転んで右手人さし指を突き、捻挫をしているか、骨折しているかもと痛い話を聞いた。同氏とわたしはともに自然治癒主義者で普段話が合っている仲だが、彼の痛みの程度はわからないが、今回はどうするのだろうか？　超高齢化社会を反映して整形外科医院で三～四時間を、ごくあたりまえのように待たされるのが、どうしても我慢できない二人だからだ。今日、スポーツクラブで、わたしより一歳上今年後期高齢者の知人O氏がニコニコ顔で「昨日かかっている先生から前立腺がんを宣告されました。骨その他の箇所に転移しているかもしれないので精密検査を受けることになりました」。年間二～三回世界各地を旅行されていて、ふだん元気で顔色のいい方なのになんで？　と突然聞いたわたしは、うろたえて返す言葉を失った。（二十九日付朗報―他所へ転移なし・当該個所のみ手術）十六日わたしにはじまった一連の痛い事件。まさに「一寸先は闇」「人生の行方には暗い大きなマンホールが口を開けて待っていることもある」のだ。今月七日前後友人に出状した暑中見舞の添え書きに「加齢とともに毎日繰り返す日常作事（動作と事柄）を以前よりたいそう（おおごと）に、また面倒に思うとき『これが普通なのだと』と、唱えながら前向きに

行動しています」としたためたが、自身の心中を前向き、積極的に徹したい、また絶対（は、あり得ないかもしれないが）に転倒しない足腰を維持しようと、思っていても何が起こるかもしれないのだ。痛く、つらく、怖い年齢層にますます深入りしていくのだ。これはわたし自身だけでなく、栄養面をはじめ、わたしの健康全面を支えてくれている妻と、癒しの家族ケイスケにも起こり得るのだ。変事のない平凡な日々であることが幸福なんだとほんとにそう思う。考えてみれば「明日は我が身」、予測できない負の突発事に常にさらされていることが意識のどこかにあり、それが適度のストレスとなってわたしの生き方にめりはりを加えていると思う。ねばり強く、緊張感をもって、より慎重な生活態度で毎日を送りたい。（20・7・19日）

○極めてシンプルな生活目標「健康生活」各項目を毎日実践しているだけだが、今月の猛暑・酷暑続きには正直参った。肉体的にダウンはしなかったが、精神的になまけ心をいかに克服するか？　すべき複数項目は変わらないが、室外・室内作業等が加わると、その日その日により、また体調、気分により心中嫌だなーとなまけ心出てくる。加えてスポーツテレビ観戦（高校野球、オリンピックなど）誘惑真っ盛りの当月だったから。わたしは嫌だなーと思うことを先にかたずけることにしている。頚椎を痛めていることもあり、最も嫌な天井近くの冷暖房用換気扇のフィルターを取り出しての清掃作業完了、次いで嫌なことを終えた軽い気分で青竹踏み五分間、あと室内清掃をといった具合だ。早朝雨続きの最終週（二十五日～三十日）早朝ウォーキングは二十七日を除き、雨降りまたは雨気配で五日間休んだのは初めてで、怠け心とは違う意味で天からの贈り物とありがたかった。行動記録記号式日誌（手帳）にウォーキング途中、能が谷大地の丘緑地で必ずしているⒶとⓀ（以前は室内でしていたが今は外で脚腰屈伸一五〇回）の予定記録を朱線で消して、上部に「降雨中止」と朱書している。若い時は少々の雨でも出かけたが、加齢とともに思い切って取りやめ身体を休ませて運動を中断する勇気も肝要だ。（20・8・30日）

○十三日（土）、孫の亮から保育園経由で、十五日の敬老の日にむけてわれわれに往復ハガキが送られてきた。往信のあて名は母親が書き、複信のあて名は担当

の保育園の先生が書かれたのであろうか。保育園の住所、園名の左に「井本　亮行き」とあった。本人の絵手紙（ハガキ）は上から青空のなかに赤い太陽、右側縦に緑の葉っぱの帽子をかぶった茶色の木、その幹の上下にくっつけて、ちいさな紫と緑のブドウの房が二房描かれていて、下茶色の地面と思われるところの左側にオレンジ色の三葉の草を、すべて色鉛筆で描いていた。本文左側余白、左から右に横書きで「りょう」とサインがあった。妻と返信作成。妻がハガキ中央下部寄りに三分の二を使って大きなポケモンのピカチュウの全身像を色つきで描き、文はわたしが考えて書こうとしたが、下手な字は進まず結局書いてもらった。上から二段書きで「おてがみありがとう」「ぶどうがりたのしかったね」ついで今話題の映画から「ポニョポニョのうたうたってね」そしてピカチュウの胴体部分下部右側に「まちだおじいちゃんおばあちゃんより」とした。携帯・メール万能の時代に思いがけず愛する孫から可愛い便りを受けうれしかった。微力ながら家族のきずな教育に加えさせていただいて、妻とともに楽しい気分を味わった。今朝六時前に返信ハガキを投函した。

（20・9・14日）

○先月十七日、本誌編集部の池田さんから39号の筆者校正依頼として、校正ゲラを拝受した。依頼文の欄外に（誤解のないように原文のままで）「大変申し上げにくいのですが、過日の編集委員会でこの私的なテーマで一〇頁以上の文章は長すぎるのではないかという意見が出ました。検討願えれば幸甚です。池田拝」とあった。即、ふりかぶるわけではないが、我が国憲法の「……、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。（第3章―第21条）」の文言が頭にちらつくともに、圏外に出ているこのコミュニティー（地域社会共同体）同好誌編集部に違和感とともに閉鎖性を見た。34号（15年11月）九六頁、35号（16年11月）一〇八頁、36号（17年11月）一〇四頁、37号（18年11月）一二八頁、38号（19年11月）一二〇頁、今回39号（会員名簿スペース五二頁を除いて）一二四頁。貴重な年一回の発行であることに加えて、本郷友会の要（かなめ）だけに、たとえば一五〇頁台に増頁しても現在の当会の財務状況面からも問題ないと考えますが如何でしょうか。それには原稿大募集（今回号―四九頁）欄の原稿枚数四〇〇字詰

×四〜五枚程度とあるが、頭から制約せずに広く投稿者に門戸を開くには四〇〇字詰×たとえば最長一〇枚（？）までで枚数自由（テーマにより、筆者の考えや好みにより長短あってもいいのではないか？）とするのも一考だと。また本誌の編集方針について関知しませんが、一つには初めての投稿者（大歓迎）が書きやすい環境を整えることが肝要ではないでしょうか？

以上編集作業の専門的なことに無知のうえ偏見を記述したかも知れません。本誌の更なる充実拡大＝本会の発展を願うのみにて他意はありません。追ってわたしは冒頭の校正依頼ゲラから、五月三十一日付と八月十五日付分（三ページ位だったか？）の記述を削除しました。池田さんの立場を考慮して。（20・10・27日）

○ボランティア。市有樹木林下の雑草刈り取り用に、二年越しになろうか待望の混合ガソリンを燃料にした電動刈り払い機一台が入った。先月十二日、二十五日と自転車のハンドルのような操作個所を両手で持って先端についている、高速回転（回転速度は調節可能）の丸型のこぎり刃を右から左へと各種雑草の根元近くをくまなくなぎ切り払う。左肩から右腰へ斜めへのベルトに、丁度自動車の安全ベルトの装着と同様に燃料タンク付きエンジン部と、前記の前下に伸びた刈り払い金具部及び駆動部を、吊り下げて前方左右に進み刈り払い作業をする。左肩と腰と両足に約五kg（？）の負担がかかり、つまずきによる転倒リスクもつきまとうが、これまで五〜九人でやっていた場所（面積）をこの一台で短時間で刈り取れて、作業後の仕上がりもきれいに終了するのが気持ちいい。

わたしにはテレビなどで見ていたが初体験作業で作業後腰曲がりを助長するが、今年八月からスポーツクラブの大浴場隅で、水中で開脚屈伸一五〇回を実行しているのがプラスになっているのか、これまでのお尻を落としての手鎌による刈り取り作業より腰の痛みは少なく、今後この機械作業を担当する機会が多くなりそうだ。叩き込まれた古い仕事人間には作業効率が上がる実感と、共に作業している他の方々にとって少しでも楽になり、役立ちしていることが密かに嬉しい。

「今日の作業は斜面で機械作業は危ないので手鎌で」との代表者の指示あり、鎌を使っての刈り取り作業に終始した。今日「いい夫婦の日」、家へ帰ると思いが

けずクラブでの八十二歳の友人からケーキハウス津曲のケーキを宅急便でいただいた。汗にまみれ地をはいずりまわるように鎌をふるい精一杯働くことができ、誰かに見守られ支えられていることに感謝した一日だった。

（20・11・22日）

○今日天皇誕生日。一歳下の皇后はわたしと同年齢。最近天皇は体調を崩され、その主原因は、諸報道によれば皇統問題、雅子妃殿下のご病状などからくるご心痛と拝聞する。われわれ国民と同様に舅、姑と子供たち、その配偶者、孫たちのことでお悩みと拝察し、古風にいって貴賤の別なくあらためて健康の大切さを思った。

健康の大切さと言えば十月十二日から十三日の深夜便「心の時代」で、たしか七十四歳、体操家のキクチカズコ（聴いているのであえてカナで）氏が、「身体は鍛えるのではなく育てるのです」と言って、手、足先に至るまで動かすことが育てることだと。それには動きのよくない箇所に心を働かせて（小生註―よく動くように念願するということだろうか？）必ず動くのだと信じて運動をしなさい。同時に感謝の気持ちを忘れないでといった趣意であった。半ば眠りながら聞いていたが、わたしにとって、この面で今年最大の啓示同様に受けとった言葉（身体を育てる）であった。因みに同氏は幼女時に右手であったか、囲炉裏に突っ込んで全ての指がくっつく大やけどを負われた方で、成人後卓球で一流選手になられたとか。現在は全国各地で体操教室を主宰されているそうだ。（かさねて眠りつつ聞いていたので、記憶に若干の誤りがあるかも知れません。）

今年の漢字は「変」。九月のリーマン・ショック以降は「崩」が妥当かと思うが、先ず来るべき〇九年は、さらにどう変わっていくのか、あるいはさらに崩れ過ぎていくのだろうか？　それにしても総理が三人も変ったのはさておいて、今年の総括としてグローバルで考えると、地球環境問題も、米国発の世界各国を襲った経済危機、同時大不況の根源は人間のあくなき欲望（国益というそれも）であり、他に競り勝つのと、奢りからもたらされた人的災害だと思う。現代の先哲、諸賢人をはじめ優秀な人材が内外各国にごまんといるのに、人間は各地での戦争も同様だが、繰り返しどう

して、こんなにも愚かなことを引き起こすのだろうと、底冷えのなか玄関前門扉のペンキ塗り作業をしながら寒心に堪えない祝日であった。（20・12・23日）

○「不変」について。二年前の同期入社同窓会の近況スピーチでS氏が、「特に変わったことはなにもしていません。毎日を二人とも健康で平凡に送日できていることが、ありがたく、変わったことがないのが嬉しくそれで幸せだ」との趣旨の話を思い起こした。たしかに健康面で「変わらないこと」に同感。加齢とともに心身が弱く、また悪くなり健康を損なうことは必然で、それは医療費が増加することであり、年金生活者には極言すれば貧乏への道につながるからだ。

変わらないと言えば、健康のベースである生活習慣を毎日、毎週、毎月、毎年変わらずに、あきることなく勤務感覚でもって消化できていることが嬉しい。わたしにはくりかえし変わらずに実践することと、その嬉しさが相乗効果となって明日への活力になっている。たとえば四年前完全リタイアした翌日から、日曜日と休業日を除きクラブ行きの乗車時間のこと。徒歩で家を朝八時三十分に出て、八時五十八分の電車に乗る、そして乗降車場所も後から四両目の一番後ろといったこの些細な、ありふれたことを雨風の日も、毎日違わずに実行し今日にいたっていることが、精神衛生上喜ばしいのだ。

今年の年賀の出状は昨年三月久々に出合った同窓会友を中心に増えて一七二枚に。全状に添え書きを。今年の元旦は「今年も日々感謝し、感動との出会いを楽しみに、ねばり強く攻めの姿勢を保ちます。よい年でありますように」とした。この手書きによる添え書き習慣も五～六年前の勤務時代から変えていない。元旦に自分に宣言することは自分自身に鞭をあてることだと考えている。（21・1・10日）

床間に活けた寒桜満開の21年1月16日・記

山行記

山と温泉に魅せられて・Ⅲ

山本喜則（市島町）

昨年の十月十二日に戸隠高原にある高妻山（二、三五三m）に登山後入浴した「戸隠神告げ神社温泉」が1千ヵ所目となりました。長い名前ながら私の温泉歴を記念するに相応しいと思った次第ですが、その後はどうもペースが上がらず、現時点で一、〇五八ヵ所となっております。訪れた温泉の都道府県別ベストファイブは長野（一一六）、北海道（七八）、福島（七二）、群馬（七一）、栃木（六六）です。

今年は念願だった北海道東部の温泉にも幾つか入ることが出来たが、まだまだ興味あるところがたくさん残っており、いつか時間を掛けて廻ってみたいと思っております。

#

百名山登頂については、前回寄稿時より丁度一年が経過したが、その後の登頂歴は空木岳、越後駒ケ岳、平ヶ岳、高妻山、雌阿寒岳、燧ヶ岳、幌尻岳、早池峰山、鳳凰山、黒部五郎岳、薬師岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈岳、鳥海山、大朝日岳で合計八四座となりました。これまでのところは自分で思っていたとおりのペースで進行しており、何とか再来年には完登したいと願っております。

#

ここ一年間で最も印象に残っているのは七月中旬の幌尻岳登山で、今回はこれについて、もう少し詳しく述べたいと思います。

この山は北海道の日高山脈にあって標高二、〇五二mで、そう高くはないのだが、通常は標高九五〇m地点にある幌尻山荘に一泊しての登山となる。但し、小屋では食料を持参しての自炊のみ、また定員五〇名程でシーズン中は予約を取るのが難しく、それに加えて、登山口から小屋に至るまでに二〇回位の渡渉（川を渡ること）が必要で、雨天で増水すれば進退窮まる状況となる。山小屋から下る前に天候が悪化すれば足止めとなり、長期に亘ると持参した食料が無くなり、救助

を求める事態となる。

そのため、今回は単独行は止めて、ツアーに参加しての登山を選択しました。

#

男性四名、女性九名、添乗員二名の総勢一五名で前夜、地元のホテルに宿泊して、初日は林道を車で進むこと約一時間、更に徒歩で一時間かけて渡渉開始地点に至り、そこで地元山岳会のガイドと合流。前夜からの雨は止んだとはいえ、ガイドさんも寡黙で、山小屋までの二時間強の歩行は難しいだろうと暗示している。参加者の心の内は皆同じで、折角ここまで来たのにキャンセルになったらどうしよう！（途中、中止になっても多額の費用の払い戻しは無し）。中には四度目の正直という女性もいた。

北岳頂上にて

#

現場で待機して数時間が経過するも、増水した川の水の減り方がいつもより遅く、しかも濁っているということで、ガイドからはゴーのサインが出ないが、過去に強行して命を落とした人が少なからずあることを知っているだけに、文句を言う者は誰もなく、ただ沈黙が続くのみであった。結局、この日は危険を回避出来ないということで中止にして、翌日は天気も回復するはずだから、二日分の行程を一挙に消化することとなった。この日はガイドの紹介で、地元にある山岳訓練所に急遽宿泊することになったが、かなり古い建物

ながら、我々には充分過ぎる施設であった。

#

この日の夕食は、山小屋で使う予定の、お湯を加えるだけのアルファ米の簡易食だったが、物足りないということで急遽、町に買出しに行き、ジンギスカンの材料と少々のアルコールを調達し、ささやかな宴会となった。ツアーの場合は、メンバーが集まり登山して、別かれていくだけで、お互いに関知しないのが当りまえだが、この夜は、お互いに自己紹介を行い親近感が大いに強まる。

#

翌朝は二時半に起床、三時半に朝食、昨日の行程を辿り渡渉開始地点に至る。昨日と比べるとかなり減水しているが、まだかなりの水量で、沢シューズに履き替え、緊張しながらのスタートとなった。途中、腰までつかる箇所もあったが、無事山小屋に到着。登山靴に履き替え、大きい荷物をデポして頂上をアタック。昨日とは打って変わった好天で絶景を満喫。往復七時間の行程を終え、満足して山小屋に戻って来ると、トムラウシ山で遭難事故があり、八名が死亡したとの信じ難いニュースが飛び込んで来る。

#

前日、我々が行くか行かざるか思案していた頃、そこから百キロも離れていない山で、しかも夏に、このような大惨事が起きたことに、ただ一同驚愕するのみ。思えば、六月に雌阿寒岳に登山した翌日の斜里岳登山の開始早々、前夜からの雨で川の増水がひどく、しかも予想以上の雪渓で単独行は無理と判断し、急遽温泉めぐりに切りかえたこと、そして又、昨日の中止と、やはり時には退くことの決断が肝要と強く心に刻む。

#

その後の調査で遭難の原因として、装備の不備があったと指摘されている。小生も出発前には、ザックに何を入れるかいつも迷い、軽量化しようという思いと、万が一の場合には、との思いの葛藤で、結局余分の物を持参する傾向が強いが、今回の事故を他山の石として、引き続き万全な装備で慎重な山行に努めたいと思っている。

合掌。

（平成21年10月2日・記）

山行記

北アルプス・薬師岳縦走記

川端教子（青垣町）

八月二日の夜行バスで発ち、三泊四日で立山から薬師岳縦走を計画したものの、富山地方はいつまで経っても梅雨明けしない。七月三十一日の天気予報を見て決行と決めたものの、現地に着いて状況次第ではルート変更の可能性も大いにあった。

二日、東京地方は朝から雨が降ったり止んだり。インターネットで立山室堂付近のお天気をチェックするが芳しくない。夕方、ベランダのミニトマトに簡易給水装置をセットし、二十時半に家を出て、同行のH氏と竹橋で合流し、定刻に立山に向かって出発した。

三日、バスが立山有料道路に入り、弥陀ヶ原辺りまで来ると青空が拡がり、剱岳も見えてきた。自称「晴れ女」の私は、この様子では今日のお天気は晴れと期待しつつ、七時、室堂バスターミナルで下車した。

湧水の所で先行のMさんと合流。水筒に水を補給し、七時四十分に出発した。雄山に登ってから五色ヶ原に向かう予定だったが、コース変更し、浄土山に向かう。一時間程の緩やかな登りが終わり、雪田を渡ると登山口からは急登となり、ザックの重さを感じる。アオノツガザクラ、コイワカガミの可憐な花が咲いているのを見ると、これから先に咲いている花々を思うと現金なもので、ザックの重さも気にならなくなる。九時半、浄土山に着く。目の前に聳える雄山を眺め、軍人霊碑にお参りする。ここからはアップダウンがあるものの稜線歩きとなる。富山大立山研究所で、一息入れる。我が家のベランダ育ちのミニトマトを食べる。大きさは不揃いだが、瑞々しく、いつも以上に美味しく元気が出てきた。

龍王岳に向かって暫く行くと、「グェッ」という鳴き声が聞こえた。辺りを見回すと、いたいたハイマツの枝の上に雷鳥が。しかも、ヒナが4羽動き回っている。急いでカメラを取り出し、シャッターを押した。若い母鳥なのか、少し小さいように見えたが、これから餌を一杯食べ、4羽のヒナと共に大きく育って欲し

いと願う。

鬼岳東面の雪田を滑らないようトラバースし、獅子岳へ急登後、のんびりと稜線歩きを楽しんでいると、右側にクロユリの群生地を発見。思わず先を歩いているH氏、Mさんに「急いでバックしてここを見て！」と声を掛けた。オレンジ色のクルマユリはあちこちのお花畑で見かけたが、クロユリは双六岳のキャンプ場横で咲いていたのを見て以来7年振りである。

クロユリをカメラに納め、足取りも軽い。獅子岳手前のピークでお昼を食べ、ピークを越すと今度は急坂の下りとなる。ズルズル滑りながら1時間余り掛かって漸くザラ峠に着いた。右手の立山カルデラを眺めながら十五分程休みを取り出発。三十分登り返すと、五色ヶ原。チングルマ、コバイケイソウの群落地の木道を行き、十五時前に五色ヶ原山荘に着いた。環境保全のために石けん等は使えないが入浴でき、汗を流したら昨夜からの疲れが一度に吹っ飛んだ。

四日、五時頃御来光を迎える。朝食後、お昼用のα米にお湯を入れ、お昼のご飯の準備完了。ドリップコーヒーを点て、モーニングコーヒーを飲んで、六時二十分出発。鳶山へ緩やかに登って行く。左手に五色ヶ原が拡がり、昨夜泊まった山荘や池塘、遠くに剱岳も見える。七時十五分頃、鳶山を通過し、越中沢乗越へ下ると、今度は広い尾根をジグザグに登っていった。九時に越中沢岳に着き、少し長めの休憩を取る。今日もよく晴れて稜線歩きにはもってこいのお天気。赤牛岳や雲ノ平、黒部五郎岳、槍ケ岳、笠ケ岳などの峰々が行く手に広がる。ここから先はザレていて、しかも急坂。注意して下って行くと露岩帯が現れた。逆行する

登山者とバッティングし、トラロープが付いている岩壁を降りるのに時間が掛かったが急坂を下り、鞍部で一息入れる。スゴ谷から吹き上げてくる風が心地良い。汗が引いたところで気を取り直し、約九〇mの急登を一気に登り、十一時十五分にスゴノ頭に着いた。今日の泊まりはスゴ乗越小屋。コースタイムでは後二時間弱。少し長めのお昼にしようと、コッフェルにお湯を沸かし、インスタントみそ汁を作り、ゆっくりお昼を食べていた。ところが、途中でガスがかかり始めたかと思うと、あっという間に周りの山々も見えなくなる。大急ぎ片づけ、スゴノ頭を後にした。風も心持ち強くなったが、ガスは取れない。岩場に付けられた白いペンキを頼りに慎重に下る。

十五分程で、漸く岩場から脱出でき、十二時四十分にスゴ乗越に着きホッとした。ミヤマツボスミレやツマトリソウの花を撮ったりしながら休んでいると、男性一人が到着。「あれ、先程岩場でお会いしませんでしたか？」と声を掛けた。スゴノ頭で五色ヶ原方向への標識が分からず、こちらに下りてしまったとのこと。晴れている時は問題ないが、ガスったり、悪天候になった時にはどっちの方向に進むのか、より慎重に行動しなければいけないということが分かった。四十分程登り、十四時前にスゴ乗越小屋に着いた。

夕食後、同じテーブルにいた富山市在住のJ夫妻と仲良くなり、今までに登った山や高山植物の話で盛り上がる。昨日見たクロユリの話になったが、どうやらお二人とも気づかずに通過された様子。時間さえ許せば引き返して見に行きたいくらい悔しがられていたので、下山後、写真をお送りしますよ、とお互いの住所を交換した。

五日、六時に小屋を出る。樹林帯を抜け、朝日を浴びながらザレた広い尾根道を登り、七時、間山に着く。休憩をした後、崩壊地を十分程トラバースしたら、広い尾根道になり歩きやすくなった。雲ノ平、槍ケ岳、穂高の峰々もだんだん大きく見えるようになってきたが、九時頃から槍ケ岳方面にガスがかかり、槍ケ岳は見えなくなってしまった。

しばらくして私達が休んでいると、富山大学の学生さん達が通過。体育の授業の一つとかで、縦走すれば体育の何単位が取れると引率者らしき方から教えても

らった。さすが県内に北アルプスを有する富山にある大学と、少々羨ましく思われた。

九時半、北薬師岳に到着。先程、私達が道を譲った

薬師岳山頂にて筆者

K大山岳部の六人パーティーが休んでいた。彼らは夏合宿中で、この後槍ケ岳を越えて、上高地へ下山予定とか。やはり担いでいるザックは半端じゃない。彼らにエールを贈り、十時十五分、薬師岳に向け出発した。ここからは岩場のヤセ尾根が続き、西側の谷からはガスが上がって来る。東側は雪渓が残る金作谷カールが拡がる。途中で一度小休止を取り、最後のガレ場を登り、十一時、二、九二六メートルの薬師岳の頂上に着いた。

薬師岳の頂上は、中学生や高校生のグループや大勢の登山客で賑わっていた。薬師如来の祀られた祠で無事の下山を祈り、写真を撮った後、頂上から少し離れた場所でお昼にした。

悪天候の場合は登山道を外さないよう気を付けねばならないが、見通しの良い日は全く問題なく、薬師岳の広い下りを、ザッザッとリズミカルに下って行ける。暫くすると、愛知大の遭難碑が建っていた。昭和三十八年一月、猛吹雪に遭い、東南稜に迷い込んで一三人の尊い命が失われた。私達は碑の前で、亡くなられた方々のご冥福を祈り、薬師平に向かった。

途中で、薬師岳を目指す多くの登山者ともすれ違う。登山道の脇にはチングルマ、シナノキンバイなどのお花畑が拡がり、その素晴らしさに思わず歓声を上げる。何時間もお花畑の中で過ごしたい気分だったが先を急ぎ、十三時十五分薬師平に到着した。後一時間程で太郎平小屋。少し休みを取った後、沢を下り、薬師峠のテント場に着く。ここからはほんの少し。草原の中の木道を登り、二時半に小屋に着いた。黒部五郎岳を縦走して以来である。この小屋は登山道の要所にあり、相変わらず大勢の登山客で賑わっていた。

六日、いよいよ下山。簡単な食事を摂り、四時半に小屋を出る。曇ってはいるが、少しずつ明るさを増すなか木道を下る。五時十分、途中で忘れ物をしたことに気づき、探しに戻ったが見つからず、諦めて下山する。六時十五分、先行者に追い付くことが出来た。雲が取れ、有峰湖も見える。樹林帯の中の急坂を下って行き、登ってくる大勢の登山者とバッティングで時間が掛かったが、八時折立に無事下山出来た。

折立発九時のバスに乗り、亀谷温泉で途中下車。ここで四日間の汗を流し、生ビール片手にお昼を食べ、立山から薬師岳までのロングコースを縦走出来たことを祝った。

十四時半、新宿行きのバスに乗車。四九名乗りのバスに亀谷温泉から乗り込んだのは私達三名だけ。立山からの乗客を合わせても総勢八名。一人で二人分の座席を占め、車窓の景色をのんびり眺めながら、北陸道、上越道を走った。しかし、途中でバスが故障し、小布施パーキングエリアに緊急停車。直ぐに修理は出来ないとのこと。一時間待って来たマイクロバスに乗り換え、十八時に小布施を後にした。

長野、群馬を通過する時、大雨に見舞われ、スリップしないかとヒヤヒヤしながらのドライブであったが、二十一時、新宿駅に無事到着し正直ホッとした。

雨に始まり、雨で終わったけれど、事故もなく皆元気で帰って来られ、満足のゆく山行となった。来年はと言うと鬼に笑われそうだが、どこかの山を歩きたいと思っている。

（平成21年8月・記）

旅のエッセイ

旭川・富良野・美瑛を巡る旅

生田清弘（柏原町）

洞爺湖サミットも終り、北海道も静けさを取り戻した二〇〇八（平成二〇）年七月一五日から一七日まで短い旅だったが旭川に行ってきた。

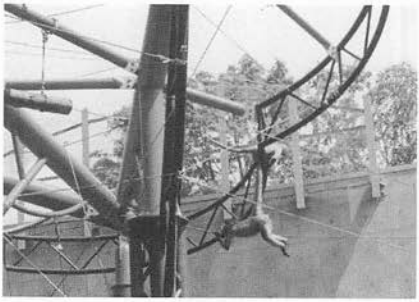
旭川と言えば、北北海道の中心都市。歴史的には、一八七五（明治八）年に設置され一九〇四（明治三七）年に廃止されるまで北海道の開拓と警備を担った屯田兵、旧陸軍第七師団司令部の設置から現・陸上自衛隊第二師団のあるところということになる。今では、旭川旭山動物園が全国的、いや海外でも人気がある。

○

旭山動物園は、一九六七（昭和四二）年に我が国最北の動物園として開園。東門から入ると、地形的にはこの辺りが最も高くて、なだらかな下り坂の通路を行くと楽だ。園内はシャトルバスが運行しているので利用するのもよい。

オランウータン館、チンパンジーの森、アザラシ館、ホッキョクグマ館、ペンギン館や、最近オープンしたレッサーパンダの吊り橋、オオカミの森などに人気があるようだ。

この人気の源は、動物たちの生態や本能を悉（つぶさ）に研究し、「行動展示」と呼ばれる方法により、動物たちの見方を変え、より面白く、より楽しめるようにしたからだ。例を挙げると、ホッキョクグマ館では、大きな白熊が水中にとび込んだと思うと方向を変えて見物人の眼前のガラス越しに突然その巨体を現わし、びっくりさせる。泳ぐ時の体毛のなびく姿や、大きな足の裏まで見せてくれる。迫力のある他では見られない瞬間で、う



旭山動物園の「くもざる館」

まく行動し易い水路がつくられていた。また、アザラシ館では水槽と水路をつなぐ径一・五メートルの円柱の中を縦方向にアザラシが上下する躍動感をまのあたりにすることができるのも楽しい。ペンギン館は、水中につくられたトンネル型の通路から見ると、群れをなすペンギンがまるで空を飛んでいるようで普通は見られぬ光景が印象的だった。

本園の動物たちはみんな活動的で、それぞれの動物本来の動きを見せる「行動展示」に工夫を凝らしてきた動物園の職員並びに関係者の尽力の賜で、従来の動物園とは確かに違っていることを実感した。

○

旭川まで来ると是非再訪してみたいところがあった。それは優佳良織工芸館である。旭川市街を一望できる高台に広大な敷地をもつ北海道伝統美術工芸村がある。この村には、染織の優佳良織工芸館、日本初の染色の国際染織美術館、雪をテーマにした雪の美術館の三館があり、その中核となるのが一九八〇（昭和五五）年に開館した優佳良織工芸館。私が前回訪れたのは一九九二（平成四）年五月なので一六年振りの再訪だった。館内には、流氷、摩周湖、雪の紋章、白鳥、ナナカマド、ハマナス、ミズバショウ、クロユリ、エゾスカシユリ、サンゴソウなど思い出の数々の作品、資料が並び、いずれも北国の自然をモチーフにしたもので心に残るものだった。

優佳良織は、今までの手織り工芸にはなかった「独創的な技法」で羊毛を素材にした糸づくりから始まる。数十色、数百色に染め分けたバラ毛から色糸をつくるため、よく混ぜ合わせ色を調合し、手つむぎする独特の工程が特徴だ。通常一本の色糸は七、八色で構成され、一つの織物に数十本の色糸が用いられると、全体では二〇〇色から三〇〇色になるという。つむぎでは、細糸、太糸、ふし糸など用途に応じ様様な糸をつむぎ、整経では、整経台で織物の寸法、密度に応じて必要な本数の経糸を整え、機の準備を行い織りへと進む。手織りは平織り、浮織り、綴織りなどがある。最後は仕上げ工程となる。いずれの作業も熟練と緊張が必要とされ、それだけに織りあげた喜びは格別なのである。

特筆すべきは、木内織元の織物に取り組む姿勢が立派なことだ。作品の構想段階から自らが納得するまで、

自然の風物を追い求め何度も僻地も厭わず足を運び、観察し、創作する旺盛な精神力は、本人自らの著述を読んでも頭が下がる思いがした。一つの作品が完成するまでに三年、五年もかかることもあると聞いたが、織りの内容を知れば知る程よく理解できるような気がする。北海道の厳しい寒さと、澄みきった空気と、四季の変化も美しい広大な風土の中、優佳良織はこの美しさを求めて生まれ、愛情に満ちて育った世界に誇る織物なのである。

○

翌朝、九時三〇分頃ホテルを出て旭岳に向う。旭岳は北海道の最高峰で、標高二二九一メートル。大雪山はこの旭岳を中心とする火山群の総称で、石狩山地の北西部に位置する。一帯は大雪山国立公園に指定されている。

旭岳ロープウェイの山麓駅から一〇〇人乗りが運行していて約一〇分で姿見駅に到着。天気は、かなりの霧に包まれ、眺める景色は幻想的。駅を起点に散策路が整備されていて、暫く歩くと擂鉢池と鏡池が道の両側にあり、さらに進むと姿見の池に着く。これから先は帰りコースとなり、周回路は全行程を歩くと約一時間かかる。夏場は、この散策路一帯に高山植物のチングルマやエゾツガザクラなどの群生が見られる景色の素晴らしいコース。春は雪に埋もれていた池が徐々に水面を覗かせる。山麓では雪解け水が流れ込む湿地にミズバショウが春の訪れを告げ、季節に応じて山の様子も変化して、秋の赤、黄、緑と色付く山々も見事。旭岳の紅葉は八月末に始まり一〇月初めには麓の温泉付近まで降りてくるという。冬は樹氷と深雪。クリスタルのように煌めく銀世界となる。土地の人々にこのような様子を聞かされると、自然の雄大さと四季の色彩りに恵まれた美しさを誇る大雪山国立公園は折々に訪れてみたいところ。

○

美瑛町に拓真館という瀟洒な建物の写真ギャラリーがある。かつて小学校の体育館として使われていた建物を改修して一九八七（昭和六二）年に開館。我が国を代表する風景写真家・前田真三氏の作品が常時八〇点余展示され、訪れる人々を楽しませ感動を与えている。美瑛の丘が最高の被写体となり、魅力的な輝きを

増す瞬間をとらえた一つ一つの作品に愛情とメッセージが込められている。四季折々の丘に咲く見事な色彩の花や、作物の風景は、作者のこよなく愛した美瑛の丘、薫が一面に漂うような花々の鮮やかさが印象的なギャラリーだった。

○

「四季彩の丘」へ立ち寄る。大人気のノロッコ号と呼ぶトラクターの牽引する観光用の列車に乗って花畑を一周した。花の香り漂う中、カーペットを敷きつめたような色彩豊かなだらかな傾斜地をのんびり縫うように列車は進む。乗り心地は良くないが、幾つかの見所に停車して、撮影のための時間を設けてくれる。

花の種類は多くて覚えるのが大変だが、年度予定があって季節毎の計画に基づいて花畑を整備しているようだ。因みに、使用される主な花をあげると、百日草、ひまわり、ケイトウ、キャッスル、サルビア、ルピナス、オリエンタルポピー、ラベンダー、金魚草、オダマキ、コスモスビッキー、ハナビシソウ、フロックスなど。

この丘からは、大雪山系の山々を眺望でき、北海道ならではの気温もほどよく清々しさを感じる花見を満喫できた。今の季節、この辺りは何処へ行っても外国人観光客が多いが、中でもアジア各国から訪れる人が多いようだ。

○

三日目は、富良野の「ファーム富田」を訪れた。ファームに着いた瞬間、ラベンダーの美しい色合いと香りに包まれ、ここに立つ幸せと安らぎを覚え、胸を強く打たれた。ラベンダーは他の花とともに、見事な絨毯模様を織り成し、花畑の大きなカーブに沿う曲線美も加わり人々を惹きつけてあちこちで歓声を呼ぶ風物詩ともなっている。ファームの通路を歩きながら次から次へと出合う花の様子などをカメラに収める。幸い天気に恵まれ、遠くの全景を撮ったり、近づいて花を拡大して撮ったり、櫓に上り高所から撮ったり、このファーム全体の美しさをいつまでも頭とフィルムに焼きつけておこうと思った。

ガイドの説明と「ファーム富田」に関する資料から得たエピソードを紹介しよう。

このファームのルーツは曽田香料㈱の創始者・曽田

政治氏が一九三七（昭和一二）年にラベンダーの種子五キログラムをフランスから輸入したことに遡る。その後、開拓農家であった富田忠雄氏が二一歳の時、上富良野でラベンダーに出合い、その爽やかな香りと、美しさに魅せられラベンダーの栽培を決意したという。時を経て、美しい花から香料が採れることと農家への助成金の交付が後押しとなり、当地のラベンダー栽培熱が一挙に高まり、参加者の熱意と努力が続く中、採取オイルの蒸留工場を共同経営とするなどの合理化も進み、この事業も順調な歩みを見せていた。

ファーム富田の花畑

ファーム富田の花畑（絨毯模様）

ところが、一九七〇（昭和四五）年頃にはラベンダー栽培は減少に転じてきた。それは輸入の自由化に伴い、海外からオイルが入るようになったことや、合成香料製造技術が進歩したことなどから国産オイル価格が急落したことによるものだった。富田氏も安定した収入の道を模索する日々が続き、ラベンダーを諦めざるを得ない窮地に追い込まれた。しかし、どうしても共に歩んで来たラベンダーと決別できなかった。かくて富良野のラベンダーは「ファーム富田」を残すのみとなった。

我慢に我慢を重ねて来た富田氏に転機が訪れたのは一九七六（昭和五〇）年のことだった。国鉄（当時、現ＪＲ）のカレンダーに「ファーム富田」のラベンダー畑の写真が採用され、忽ち話題となり予期しない大きな反響を呼んだ。各地から

カメラマンが大挙してやって来たという。だが、見物人は増えても収入には結びつかなかった。やがて、芳香を楽しむため、乾燥した花や香料を混合したラベンダーのポプリをつくり発売したところ、これがヒットして、ラベンダーの栽培から加工まで幅広い作業を一貫生産し、かつ製品枠を増やして、現在のラベンダーを中核に観賞し、体験し、賞味できる多くの人々の楽しい憩いの場「ファーム富田」を築いたのである。

一九九〇（平成二）年にその功績を称え、プロバンスから「ラベンダー・ナイト」の称号が与えられた。

○

富良野から美瑛につながる広大な多彩で美しい丘と、それらを取り巻く遠くの山々の風景をしっかり記憶にとどめ、しみじみ北海道の良さを感じている間に後藤純男美術館に着いた。今回予定した旅の終点だ。

入館すると広い展示室に通され、画家の経歴と日本画の特長と観賞の仕方などを学芸員から説明される。後藤画伯は、一九三〇（昭和五）年、千葉県の真言宗仏門に生まれ、一六歳で山本丘人に師事。のち田中青坪に師事し日本画を修業し、一九五二（昭和二七）年院展で「風景」が初入選。その後は日本美術院の中心的な画家として活躍。一九八八（昭和六三）年から一九九七（平成九）年まで東京芸大教授として後進の指導にあたる。この美術館は一九九七（平成九）年に開館した。現在、画伯は日本美術院同人理事、中国西安美術学院名誉教授として国際的にも活躍している。

大小の展示室は合計七室あり、古都奈良や京都の風景を描いた作品や、中国やヨーロッパの自然を描いた作品など素描を含め一五〇点余の絵画が鑑賞でき、中でも約七メートルの長さの大作「十勝岳連峰」は北の大地の雄大さを余すところなく表現した圧巻。大迫力に圧倒された。

画伯は若い頃から、日本の風景美を求めて全国を巡ったといわれ、四季折々の景観に感動し、写実と仏徒故（ゆえ）に鍛えられた精神世界を自在に往来する画伯が最後に選んだのは、北の大地だったという。

十勝岳展望テラスでは連峰を一望でき、都会の美術館とは趣を異にした、遠く足を運んで満足出来る美術館だった。

（二〇〇九年八月記）

私の職場

ニュース制作システムの開発

電機メーカーのもの造り現場

近藤利春（春日町）

郷里を離れて三十七年近く時が流れた。巡りあわせて神奈川の地で生活している。私の職場について三つの視点から書き記す。

◇ある一日

朝、八時半のバスに乗り、一つ手前のバス停で降りて会社まで歩く。九時頃に職場に着く。出社している人は、まだ三割。フレックスタイムの九時半に大半が出社する。パソコンの電源を入れ、社内HPのニュースを確認する。予定をチェックし、メール受信する。大体五〇通から一〇〇通程度。新着メールを仕分けていく。メールは英語と日本語が四割と六割。返信のみのメールを片付けてから、重いテーマの作業に移る。調査や推敲しながらメール返信しているとすぐ昼休みになる。

昼休みのチャイムは無く、気づかないで仕事していることもよくある。職場の人はほとんど食堂へ向かう。かつては職場で集まって食事していたが、今は数名でそれぞれ食事している。私は煩わしいので手持ち弁当にしている。食堂メニューは偏りがあるので弁当が丁度良い。ここまで、会議や電話がなければ、ほとんど喋らない。体も動かさないので、あえて昼休みに社内のコンビニへ行く。外の空気に触れ、知り合いに会える機会でもある。午後も作業は同じだ。仕事はメールが中心となる。ただ、隣の人にメールで会話するようなマネはしないよう心がけている。

メールはインターネットができれば、どこでもリモート接続できる。気になる仕事があれば自宅でメール作業することもある。が、始めるとキリがない。会社と家庭の切り替えが大切だ。最近は極力、自宅で仕事はしない。

仕事のコミュニケーションはメールの他、会議がある。それもマーケットと開発拠点が海外に多いので、テレビ会議が日に一～二回ある。会話は英語だ。近年、中国との連携もあるが、それも英語。学校で英語はパッとしなかっ

たが、おかげでTOEICスコアが上がった。

ただし、テレビ会議では、交渉事は消化しにくい。重要な打ち合わせになると海外出張する。毎月、出張することもある。海外へ出ると、職場の様々な連絡が少ないので解放された気分がする。

最近、欧米人や中国人と仕事する時に感じることがある。交渉では、英語が上手に越したことはないが、それよりも「相手と指しで向き合えるかどうか」が肝心と。日常スピードで英語を喋られると、劣勢に感じることもあるが、分からなれば説明を求め、分かった振りをしてはいけない。相手が日本語を話せないから英語で話しているわけで、過去の歴史の勝ち負けで英語圏が広がっているだけとも言える。さらには「何の為にビジネスをやっているのか」という芯が試される。

職場の日常に戻る。退社時刻になると三分の一は退社するが、大半は八時～九時頃まで残業している。ただし水曜は特別。「ノー残デー」と称して、定時退社を推進している。私は、かつて「休日入れて月に百数十時間の超過勤務」という頃もあったが、今は早めに退社し自宅で食事するようにしている。金曜は、元気があれば歩いて帰る。約一時間の歩きは良い運動だ。このように職場の一日は終わる。

◇もの造り

仕事は会社として知られているテレビやビデオカメラではなく、業務用機器の開発設計である。ニュース映像を制作するシステムで、各国の放送局がお客様だ。

いつも見ているニュースの制作には放送局の多くの人たちが携わっている。まず、ディレクターがニュースのシナリオを作り、素材を組み立てた映像ストーリーとナレーションを作成する。それを受け、記者とカメラマンが取材と撮影をする。映像に入るテロップ文字は別チームで作成される。

これら全ての素材が本番オンエアの数時間前に編集マンに集まってくる。編集マンは映像ストーリーに沿って映像を繋ぎ、テロップ文字を重ね、アナウンサーの声を録音して、オンエア用映像を完成する。これらの作業をオンエアの数分前まで続けていることもある。間に合わなかったら本番に穴が開く。

テープの時代には、完成したカセットを持ってオンエア室へ走っていった。オンエアでは完成した映像をニュースキャスターの語り

で繋いでいく。新鮮さが価値で速さが勝負だ。本番前の緊張が毎日続く。当然、使用するニュース映像制作システムには高い信頼性・操作性が求められる。

それでは、設計している、ニュース映像制作システムとはどのようなものか。一般のパソコンやハードディスクと比較してみる。まず、市販パソコンの一〇数倍の速度のコンピュータを五〇台程度、繋ぎ合わせる。映像データは、約一〇〇個のハードディスクを筐体に入れた機器に保存する。

さらに、これらの機器を一般の一〇〇数倍程度の高速ネットワークと光ファイバで接続する。このシステムに、ディレクター、カメラマン、編集マン、テロップ制作、記者など、二〇～三〇名のオペレータが、各々のコンピュータ端末から接続し、撮影映像を取り込み、読み出し、編集加工して、オンエア用の映像を完成させる。

このシステム製品の付加価値を最も左右するのは、各コンピュータ上で動作するソフトウェアだ。このソフトウェアを設計するのが開発設計部隊の本業である。放送局の各オペレータ操作手順を詳細に分析し、全てを網羅し、正確にソフトウェアとして記述する。一カ所でも記述違いがあれば、そこが不具合となる。データ損失など不具合があるとオンエアトラブルを引き起し、夜中でも連絡がくることもある。

もう一つ、ソフトウェアを評価する品質保証も重要な役割だ。「評価していないものは保証できない」が原則だ。ところが、機器の組み合わせ、コンピュータの基本ソフトの組み合わせ、さらには、システム操作上の条件組み合わせ、全てを挙げると現実時間では評価不可能な条件数が浮上する。統計的アプローチを最小にするものの飽和気味だ。

この設計と評価を日本と中国、アメリカで連携して進めている。人員は総勢一〇〇名程度、その過程では様々な格闘模様が浮かび上がる。例えば、日本では守備範囲外の部分も互いに補間することが多い。しかし、その慣習がない場合には、互いの連携を細かく定めないとすれ違いが起きる。また文書に記述され確認したこと以外は期待してはいけない。それは文化的な差であって、個人の資質ではない、と考えるようにしている。

このようにして、製品をお客様へ納めるまでには、その規模の分だけ多くの事柄が発生し、その過程で、メールやテレビ会議、出張で英語、日本語、そして中国語が

飛び交うことになる。
いま丁度、日本の放送局で設置からオンエアを目指す時期にある。思うに、日本でテレビ放送が開始されたのが昭和二十八年。私の生まれた年と同じなのは偶然ではない気がしている。

◇変　化

私は三十数年前に、軽い気持ちでこの会社の経験者募集を見て、軽い気持ちで採用試験を受けたら合格した。その頃会社は"Research makes the difference"がセールストークだった。関東に知り合いもなく、若かった自分は「やっていけるだろうか」と不安だったが、職場の中はそれほどでもなく少し安心した。
自分で動かない限り誰も助けてくれないものの、社内は自由な雰囲気で考えを素直に言うことができた。設立趣意書にある「自由闊達ニシテ愉快ナル理想工場」は的を射ていた。マネジメントは独自技術の進むべき方向性をもっており、失敗はあっても常に挑戦する気概があった。
社員は仕事の裏で、俗称「密造酒」と呼ばれた新しい技術を内緒で試作機として造り、マネジメントに直訴して商品化へ進めることもあった。またオフサイトミーティングと称して会社の外に宿を借り商品戦略など、泊まり込みで話し合った。
最後はお酒が入るが、この話し合いで、方向性が定まり、次の日から、遮二無二商品化へ突き進むプロジェクトも多かった。魅力ある仕事ができ、世の中へ商品を送り出し、社会の役に立てば、それが最高で、残業や徹夜などは苦にならなかった。
時は流れ、全てのものは止まってはいない。
最近、会社を辞めた同僚と飲み会をもった。妙に話が弾む。彼は様々な経験を重ねており、東海岸、中南米、フロリダの海外赴任で、その都度新たな商品を手がけてきた輩だ。昨今は短期的な目標が多く、技術的ビジョンや新しいものを生みだす気概が少なくなり、方向性が見えにくくなった、と言う。自分も、流れに翻弄されて、大切なものを見失って来たことや、次の世代を真剣に育ててこなかったことに改めて気づく。
しかし、過去にもこのような時期はあった。状況は変わっても、エンジニア一人一人が「もの造り」の原点に立ち返り、常に挑戦していく気構えがあれば、変化を乗り越えて、新しい流れを切り開けると信じている。

召しませ丹波「鹿肉料理」

荻野佑一
（丹波新聞編集部長）

「山ざる」の原稿を書き始めた私の手もとに、丹波市観光協会が出しているパンフレットがある。そのパンフレットには、鹿肉料理やもみじ鍋（鹿肉）を提供している丹波市内の飲食店が紹介されている。数えてみると、十六軒ある。このように丹波市では今、鹿肉料理がちょっとしたブームを呼んでいる。鹿肉料理を、丹波市の名物として売り出そうという動きがある。

なぜ市内関係者が鹿肉に着目したのか。それは、取りも直さず鹿による農林業被害の深刻化にある。青垣町に一昨年にできた兵庫県森林動物研究センターによると、鹿による農作物被害は兵庫県下全体で一億八千万円（平成十九年度）。全国でワースト3にある。丹波市と篠山市の被害額は計千百六十万円。看過できない額である。

昔と違って人が里山に入らなくなったため、鹿が里山に侵入。里の味を覚えた鹿が畑を荒らし、農家を悩ませている。栽培意欲を減退させる要因にもなっている。有害獣として鹿の捕獲が進んではいるが、繁殖率が高いため、生息数は減っていない。

兵庫県森林動物研究センターは、人と野生動物との棲み分けを調査研究し、その成果を地域に普及させている、全国でも珍しい施設だ。所長は、林良博東京大学教授。その林所長が、センターの近くにある宿泊・宴会施設「もみじの里　青垣」に鹿肉の料理開発を提案した。一昨年の秋のことだ。

「もみじの里　青垣」（電０７９５・８７・２２４４）を運営している三十二歳の料理人、鴻谷佳彦さんにはとまどいがあった。鹿肉は硬くてくさいと思い込んでいたからだ。そのとまどいは、近所のおばあさんとの出会いで吹っ飛んだ。

腰の曲がったおばあさんが一人で、畑に木の柵をこしらえていた。聞けば、畑の白菜が鹿に荒らされたとのこと。しかし、翌日になると、柵は鹿によって壊されていた。その光景に、鴻谷さんは「鹿を食

べて、鹿を減らさなければいけない」と発奮した。さっそく地元で購入した鹿肉のスライスを湯がき、何の味付けもせずに食べてみた。硬くもないし、くさくもない。鹿肉に対する固定観念が消えた。

次から次に鹿肉料理を考え、朝昼晩、三食とも鹿肉料理。家族や従業員に食べてもらい、反応をみた。およそ半年間。考案した料理は百二十種類に及んだ。こうして出来上がったのが、「しか幕の内」（千五百七十五円）だ。六種類の鹿肉料理を盛っている。

しぐれ煮風は、山南町の特産である薬草のトウキの葉と一緒に煮込んだ。ヘルシーな食材である鹿肉は女性向きで、トウキも婦人病に効果があるといわれている。まさに女性にもってこいの一品だ。ほのかにトウキの苦味が口の中に広がり、健康に良さそうに感じられる。生姜醤油につけこみ、オリーブオイルで揚げた鹿の肝も乙な味わいがある。

水煮したあと、オリーブオイルや香草、にんにく、醤油などを加えた特製調味料につけこんだもも肉の煮込みは、ローストビーフと言われても納得できるような味。スペアリブもうまい。鹿肉は脂質が牛肉の約八十分の一しかない。それはヘルシーである半面、物足りなさにつながるが、このスペアリブについては十分に満足できる。その証拠に、明石市内でこのスペアリブを出したところ、とりわけ子どもに人気で、二日で八百本も出たという。生姜醤油につけこんだもも肉の天ぷらも子どもや若者向けで、ビールに合う。地元産のコシヒカリに、ニンジン、ゴボウなども加えた鹿肉の炊き込みご飯も美味。

「しかくぃ鍋」（三千八百円）と名づけたメニューもある。金箔を散らした鹿の生肉でネギを巻き、だし汁にくぐらせて食べる。赤みの強い鹿の生肉を目にしながら食べるので、『鹿を食べた』という実感がわく。ちなみに「しか幕の内」「しかくぃ鍋」とも要予約。

鹿肉料理を提供する店は、丹波市内で着実に増えて

いる。その一方で、丹波や但馬で獲れた鹿を仕入れて加工し、都市部のホテルやレストラン、地元の料理店に納める会社が三年前の秋、氷上町内に設立された。「株式会社丹波姫もみじ」（電０７９５・８２・６３３３）という。

同社は、安全で安心な肉の提供をポリシーに掲げる。わなや檻で捕まった鹿でも、散弾銃で撃たれた形跡を残しているケースもあるため、金属探知機を導入。形跡が見つかった場合、その肉は廃棄する。鹿を仕入れるたびに、いつ、どこで、誰が捕ったかを記録し、肝臓の一部を五年間、冷凍保管するなどトレーサビリティ（流通履歴が確認可能なシステム）も万全を期している。

社長は、丹波市役所の産業経済部長を早期に退職した柳川瀬正夫さん。公務員時代、鹿被害の対策に追われたのが会社設立のきっかけになった。設立以来、受け入れた自治体や農林関係者らの視察は四十件を超える。近隣府県はもとより、四国や関東方面からの視察もあった。鹿の対策に頭を痛めている関係者がどれほどいるかが、この数からもわかる。

鹿肉の加工や販売、鹿肉料理の提供は、鹿対策の一翼を担うことは間違いない。しかし、「鹿肉に対する抵抗感は、会社を始めた時点と比べると、薄れてはいるが、まだまだある」と、柳川瀬社長が言うように、乗り越えるべき壁がある。鴻谷さんも、「今のメニューは現段階での最強レシピだが、完成形ではなく、これからも改良を加えなければ」という。鹿肉料理の普及は緒に就いたばかりなのだ。

鹿肉に対する消費者のイメージが改まることが肝心だが、それだけでは「鹿肉も食べられる」にとどまる。さらに進んで「鹿肉を食べたい」と、消費者が思うようにならなければ、鹿肉料理は普及しない。柳川瀬社長は「丹波市の鹿肉を、ぼたん鍋で知られる篠山の猪肉に匹敵するような特産にしたい」と意気込む。

鹿肉は俗に「もみじ」という。ご存知のように、丹波市内にはもみじの名所がいくつもあり、紅葉シーズンには多くの観光客が訪れる。もみじ（紅葉）を眺めながら、もみじ（鹿肉）を味わう。そんな人たちでにぎわう丹波市になることを願っている。

県知事と神戸大学長が調印

このほど、県が大学に委託する3年間の協定事業、「地域医療連携推進事業に関する協定書」が結ばれた。

大学は、県立柏原病院を現場の第一号として教員を派遣し、診療支援を行いながら、地域医療の在り方に関する研究を行う。背景には深刻な医師不足による地方の医療崩壊がある。

知事は「地域医療の振興と医師の確保との観点から、柏原病院をモデルとして始め、県の全地域医療再建のスタートとしたい」、学長は「それぞれが独自に努力しても地域医療は充実できない。県と大学、病院が連携して支えあうシステムを構築していく」と述べた。（平21・3・12）

3教授が県立柏原病院着任へ

県と神戸大学の間で締結された「地域医療連携推進事業」により、同大学の特命教授3人が4月1日付で人事発令され、同病院へ週に1～2度勤務することになった。3人は、同病院の医療行為に加わるのみならず、この支援を通して、地方において若手医師が技術を学ぶ環境をどう整えるか、地域医療機関とのネットワークの構築や、人口規模に合わせた医療の最適化をいかに実現するか、など、兵庫県のみならず全国共通の課題の研究に取り組む。（平21・3・12）

柏原赤十字病院でも「病院再生計画」

平成18年4月に常勤医が引き上げ以来休診となっていた外科だが、4月1日付で常勤医2人の着任を迎え、諸設備のリニューアルも終えて外科系診療を再開する。また、平成17年5月から離脱していた丹波医療圏域の2次救急輪番にも、5月から復帰する。病床数は100床へ（現59床）増やし、入院患者受け入れによって、現在の赤字を2年後に黒字経営に転じる目標。

（平21・3・29）

柏原病院の新病院長にインタビュー

4月1日付で、県立柏原病院の新院長に就任した（前神鋼加古川病院副院長）大西祥男氏は、循環器内科医として同病院の内科の充実に向けた一歩を踏み出した。就任後2カ月を前に抱負と現在の手ごたえを聞いた。

―就任後にまず取り組んだことは、「主治医制をチーム制にして、みんなで患者を診ようと申し合わせたこと。これにより医師の疲労が緩和された」。

―診療機能の回復は、「紹介患者を中心に入院機能を充実したいと市内の開業医を訪問して伝え、協力体制を作ろうとしている。一次患者らは開業医に、入院の必要な患者は病院が診るというシステム構築に地域全体の同意を得ていきたい」。

―教育機能は、「大学から豊富な人材を得て、指導医がマンツーマンで教えられる環境が整った。大学の医学部生や研修医を対象に見学ツアーも企画し、大学と当病院と往来する研修プログラムも考えにある」。（平21・5・24）

◆東　満千子さん

北国に住まいを移して三十五年、毎回「山ざる」誌を読んで、ふるさとを思い出しております。お送りくださましてありがとうございます。十月十三日、NHKの「いのちの対話」の公開放送の司会者は、「ラジオビタミン」を担当されている村上アナウンサーでした。ホスト役のかたがたにはもちろん、スタッフや観客の皆々様へのお心遣いは素晴らしく、楽しいひと時を過ごさせていただきました。本当にありがとうございました。（平20・11・13）

◆足立和巳さん

青垣の田舎に帰って通りすがりの遠阪小学校の子供に聞きますと、一年生から六年生の全児童数が僅かに六十三名だそうです。（平20・10・21）

◆足立三義さん

現代医学の世話をうけながら、げんきでやってます。（平20・10・27）

◆飯田光雄さん

昨年の「ふるさとの会」では黒豆をいただき、おかげ様で良いお正月を迎えられました。ありがとうございました。（平20・10・18）

◆井徳正吾さん

当日は、少年野球の公式戦が入っており、指揮をとらねばならず、残念ながら欠席させていただきます。（平20・10・27）

◆上田正文さん

先月下旬、北京での第二回日中犯罪学シンポジュームに出席しました。交通犯罪がテーマで、おもしろいものでした。（平20・11・4）

◆植田憲雄さん

五月三十日に齢八十歳を迎えました。貴会でもお祝いをしていただける由。喜んで参加させていただきます。会員の皆さんにお会いできるのを楽しみに。（平20・10・26）

◆上村邦子さん

おかげさまで元気に暮らしています。毎朝ウオーキングと、たまにゴルフに行っています（スコア抜きで）。（平20・10・20）

◆大槻作治郎さん

当日は、自治会代議員会で、ゴルフ場との「自然環境保全協定」を解消する策を無効にしなければならないため郷友会は欠席します。（平20・11・15）

◆大野善三さん

歳を取るほど過去のことを想い出します。故郷がいつも浮かんできます。悪いことも良いことも、好きなことも嫌いなことも共に。（平20・10・22）

◆可部美智子さん

十一月二日から十二日まで都美術館にて「全陶展」が開催されます。役員もしているので結構いそがしいですが、〝ひかりの中で〟という題で、聖徳太子の幼年像を出品しています。

（平20・10・22）

◆菊池洋子さん

三十九年つとめた音大を二年前（〇六年三月）に終えて、いままで片手間だった家事にせいを出しています。日に三度、食事を用意し食べるということは、かなり大変なことですね。でも楽しんでいます。（平20・10・22）

◆久下　誠さん

平成二十年三月、退職いたしました。病気療養中のため、リハビリ等に励んでいます。

（平20・10・28）

◆国村きぬゑさん

山ざる誌十九号、（昭和六十三年四月号）に「ふるさとの言葉」の題名で、日常に使っていた言葉が掲載されておりました。たいせつにしていましたが、引越しで紛失してしまい、大変残念に思っております。思い出の手引きとしておりましたので、お手許にありましたら、コピーさせていただきたいので、お願いします。

（平20・12・9）

〈編集部より〉19号所載の〝ふるさとの言葉〟リポーター足立源治氏。22号所載の「方言調査」＝氷上郡＝リポーター渡邊隆男氏の二記事を複写して、お届けしました。

◆久保春雄さん

相変わらず土浦と丹波の二地域居住のような生活をおくっております。ちょっと遠いので大変ですが……。

（平20・11・4）

◆小谷　崇さん

わたくしと同じように八十歳になったり、さらにそれを上回ってお元気なかたがたが、おおぜいいらっしゃることは、うれしい限りです・若いかたがたも、年よりも世の中の困難に負けず、たのしく生きましょう！

（平20・10・28）

きのう（十一月二十八日）「JAたんばひかみ」から、とてもすてきな「山の芋」がどっさり届きました。

（抽選の景品です＝編集部注）大好物なので、さっそく味見をしましたが、そのへんの東京のスーパーで売っているものより格段にすぐれた味と風味があります。こんなのをいただくと、また来年以降もいかなければ……という気になります。まことにありがとうございました。

（平20・11・29）

◆小松京子さん（俳号京華）

平成十九年春、宝塚から横浜に移り住みました。よろしくお願いいたします。京華の作句

丹波市とや丹波小富士の霧衣

（金子兜太入選）

丹波篠山壱億余万年草食恐竜
移り住みて横浜の街百千鳥
（平20・10・25）

◆小山とし子さん
今年も元気で郷友会のお知らせをいただくことができましたことを、うれしく思います。（平20・11・5）

◆篠原よね子さん
青垣町のかたがたはあまり出席されませんので……、もう少し席の順など……、そして誘い方など考えてほしいですネ。（平20・10・31）

◆鈴木和榮さん
六月末に上野原市に転居しました。名簿の中から近くにお住まいの下滝出身の村上さんが目に止まり驚きました。早速電話を入れました。「山ざる」誌、毎年の表紙が暖かく楽しみです。（平20・11・7）

◆大録和代さん
毎年お便りありがとうございます。届くたびに、一年が過ぎるのが早いと感じます。みなさま、お元気でお過ごしください。（平20・11・1）

◆高田美佐子さん
後期高齢者医療制度に反発しています。
〝高齢者値上げラッシュに音を上げる〟（平20・11・12）

◆谷　敬三さん
十一月にベルディのレクイエムの合唱に参加します。年明け一月は第九と続きます。油絵も年に二度ほど展覧会に出品しています。こんな毎日です。（平20・11・12）

◆常岡幹彦さん
二〇一〇年、春と秋の個展に向かってドロウイング三昧の毎日です。（平20・11・5）

◆出町京子さん
丹波通いも丸二十年。毎月出向いて都会と田舎の二重生活を過ごしています。（平20・11・4）

◆中里安子さん
父母の介護で忙しく致しております。東上線上板橋駅近くのイトーヨーカドー横で、長男が十年位前よりpositiveという理容・美容室を営業致しております。（平20・10・22）

◆西川宣孝さん
今年は中・高校の同級会や氷上ゴルフ同好会で丹波の友と親しく過ごしました。（平20・10・28）

◆能勢初代さん
おかげさまで健康な生活を送っております。屋敷が広いので、雑草の草取りに精を出しております。（平20・10・21）

◆堀井隆川さん

郷里の近況や変化・情報を知る上で参考になるのが「山ざる」誌です。第四十号の特集を期待しています。

（平20・10・25）

◆松本栄二さん

柏原中学二年の折に敗戦。キリスト教との出会い。戦災孤児（女子）福祉施設に飛び込む。それから六十年。思いがやっと実現して、福祉実践の現場で働いて十二年が経ちます。認知症の人々と生活。十三名を看取り、改めて今、老人の担うべき役割を考え始め、ホスピスの建設に努力しています。

（平20・11・5）

◆前田和秀さん

二十年二月十五日付。健康上の理由で勤めをやめました。今は歩くのが苦痛ですので、車で移動できる場所のみでかけています。（平20・10・21）

◆山口和久さん

前回ふるさとの会で当たった神戸ポートピアホテル宿泊券で、京都の旅を楽しみました。ありがとうございました。詳細は「山ちゃん5963」http://plaza rakuten.co.jp/yamaguchi03301 見てくださいね。

（平20・10・21）

◆依藤廣次さん

雲は行き、水は流れ、時は休みなく過ぎ去って行きます。しかし、わたくしの丹波への想いは、年を経るほど去らずに強く迫ってくるのです。貴方どうかして！

（平20・10・24）

◆訃報

平成二十年十月から二十一年八月までに事務局にご連絡いただいたものです。掲載して謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

長谷川　尚殿　平成十七年
旭　　弘殿　平成十八年八月
足立省一郎殿　平成十九年十一月十四日
松本　富子殿　平成十九年
東田　　實殿　平成二十年一月十七日
藤岡　京子殿　平成二十年一月
牛込　経世殿　平成二十年四月
星野千枝子殿　平成二十年
大塚富久子殿　平成二十一年四月
井上　和三殿
常岡千紗子殿

■郷里について書かれた本――

田健治郎著・広瀬順皓編
『田健治郎日記』
芙蓉書房発行／定価7140円

安政二年に柏原下小倉で生まれ、昭和五年に東京上野毛で没するまで、官僚・政治家・貴族院議員として明治・大正時代を駆け抜けた郷里の大先輩、田健治郎の名を知らぬ郷党はいない。逓信大臣、台湾総督、農商務大臣兼司法大臣、枢密顧問官を歴任し、もちろん関東氷上郷友会の設立にも携わっている。

彼の日記は以前から刊行されているが、漢文の原文が読めない近代史研究家が増えてきたので、読み下し体に翻刻し昨秋出版された。

編者の広瀬順晧さんは、早大で政治学を修め、駿河台大学教授として史料管理論や文化情報学を講じる日本近代史の碩学である。この分野では『太政官期地方巡幸研究便覧』（柏書房）や『参謀本部丁史便覧』（ゆまに書房）などを上梓しておられる。

この日記全体が明治末から昭和初期に至る情報を含んだ、日本近代政治史研究の貴重な史料であることは言うまでもないが、本書はその1であり、明治三九年～四三年を収録している。

明治七年に上京した田は、内務省警保局の官吏となったが、明治二三年、逓信大臣の後藤象二郎の知遇を得て逓信官僚に転身する。内務省も強力な官庁だが、逓信省も郵政・通信のみならず鉄道・交通をも所管とし、日本近代化を担う新しい役所であった。

一時、出向して民間鉄道会社の社長を務めた後、次官にまで登りつめ、伊藤博文の知遇を得て代議士となる。すぐに政友会幹部を批判して除名されるが、逓信省に戻り、再度、次官を務めてから退官し、貴族院勅選議員になるという途方もない人物である。この日記の始まる明治三九年が、その退官の年であった。

初の文官出身台湾総督として語られる田であるが、通信電子に携わってきた評者には、一般の官僚や政治家がよく理解できない逓信という新事業に精通した貴重なテクノクラートと思える。大正八年に逓信大臣を辞任した後、台湾総督を拝命するが、その裏には台湾の鉄道・通信の飛躍と、それを指導できる総督の必要性があったのだ。

（徳田八郎衛）

■郷里について書かれた本 ――

松崎晴雄監修
『あなたの好みで味わう
おいしい日本酒ガイド』
実業の日本社発行／定価1400円

瀧本洋一著
『酒屋のおやじが薦める
旨酒186蔵』
扶桑社発行／定価1400円

「関東ならではの田舎でウォーキングをやりたい」という級友たちが関西から来訪することがなければ、こんな本を下戸の評者が八重洲ブックセンターで手に取ることはなかったであろう。水郷の潮来を皮切りに香取神宮を経て佐原まで歩かせる。最後に伊能忠敬の旧跡を見せ、「前期高齢者よ、大志を抱け」と訓示するわけだが、ここで酒についての知識が必要になる。

五〇歳を過ぎてから全国を測量して回った忠敬であるが、その前に、経営不振だった家業の造り酒屋を再興している。その技術や経営のノウハウを引き継いだ弟子が文政八年に創業したのが佐原の銘酒「二人静」を醸造する東薫酒造である。最近の日本酒離れもあって経営に苦しんでいたが、忠敬のような名経営者が買い取りピンチを脱した。

そこで「地震のない国ドイツの地震学者」よろしく、下戸が酒を講釈のため読んだのがこの二冊であるが、佐原よりも郷里のことが気になってきた。全国の銘酒が味のタイプ別や地域別に紹介されているが、伏見や灘の有名蔵元や歯の浮くようなコマーシャルに懸命なブランドに蹴落とされていないか。恐る恐る開いてみたが、さすがに丹波を代表する西山酒造場は登場していた。

『あなたの……日本酒ガイド』では「『雅』濃厚な甘口の酒」という区分で「小鼓」と「路上花有」が、「酒屋のおやじが……」では「風雅漂う奥丹波の薫り」という表題で「小鼓」と「西山居」が紹介されている。もっとも「杜氏は代々地元の丹波杜氏で、若い八島公玲さんが丹精込めて……」と記されているが、後日、西山裕三会長から紹介された八島さんは関東出身だった。

「小鼓の特色は、西日本では珍しく北関東系の10号酵母を使っている点。これを原料の山田錦、丹波の軟水と融合させて酸を抑えた口あたりのやわらかい女性的な酒を生み出している」とあるが、八島さんが東西融合の立役者だったのかは未だ確認していない。

下戸には判りづらい「原酒しぼりたて生酒」「通年の生酒」などの定義も講釈し、実に面白い教科書である。

（徳田八郎衛）

公演

◉足立さつきリサイタル

丹波が生んだ歌姫・足立さつきさん（春日町黒井出身、柏原高昭和55年卒）のリサイタルが今年も開かれます。

さつきさんは、武蔵野音大・大学院やミラノ音楽院への国費留学を経て、二期会所属。「椿姫」「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」など数々のオペラへの出演、国内外のオーケストラとの共演など、清冽な声と華のある舞台姿で観客を魅了し、人気を博しています。今回は先年、大人気となった20周年記念リサイタルと同じ紀尾井ホールにて開催されます。同郷の皆様もぜひ参加して、さつきさんにエールを送り、名曲の数々をお楽しみください。

足立さつき　ソプラノ・リサイタル

◇日時　12月6日（日）午後2時開演

◇会場　紀尾井ホール（四谷駅6分＝JR・丸の内線・南北線／赤坂見附駅8分＝銀座線・丸の内線）

◇出演　ソプラノ　足立さつき

ピアノ　田中明子

◇料金　S5千円，A4千円，B3千円

◇お申込み先　ジャパンアーツぴあールセンター☎03・5237・7711

足立さつきさんから同郷の皆様へ

今回のリサイタルでは、日本とフランスのコラボレーションのプログラムを組みました。前半は、歌い続けてきた愛しい日本の歌を数曲、そして今回のリサイタルのために作曲していただいた新作を歌います。委嘱をお願いした中西覚氏（旧姓大江・柏原高昭和27年卒）は、私と同郷の丹波ご出身の作曲家であり、器楽曲から歌曲、オペラまで数々の作品を生み出されています。実は私の幼少の頃からのピアノとソルフェージュの先生であり、私の音楽への道をつくって下さった大恩師です。今回のリサイタルのための新作を、快くお引き受け下さいました。これまでの想いを込めながら歌わせていただきます。

後半は、10年ほど前から歌ってきたフランス歌曲、そして今回新たに取り上げるフランス・オペレッタのアリアをお楽しみいただければと思います。人生の試練や恋の苦悩を事も無げに明るくコケティッシュに乗り切ってしまうような音の連なりに、自分の身をゆだねることができれば……。

日曜日の午後のひととき、皆様ぜひ、いらして下さいませ。

◉丹波西崎会20周年記念公演

丹波西崎会20周年記念の「西崎祥舞踊公演」は、去る7月5日(日)午後12時30分から丹波の森公苑ホールで開かれました。この日の公演は古典舞踊の第一部と歌謡曲を振付した第二部からなり、20年余にわたり養成した社中一門の洗練された踊りに満杯の会場は華やかな雰囲気に包まれました。

西崎祥さんは「柏の若葉」(写真)「鳥刺し」の古典舞踊を披露しました。

〈西崎祥さんのごあいさつ〉「光陰矢の如し」と申しますが、私の丹波通いも21年目を迎え、平成元年に結成した丹波西崎会もお陰様で20周年記念の公演を開催することが出来ました。この20年はよき門弟にも恵まれ、地域の皆様のご声援もあり、いつも森公苑大ホールを満員にして下さるご贔屓(ひいき)もあって、私にとりましては充実した年月でありました。

丹波新聞のカルチャー教室も10年を経て、熱心な生徒達も人前で踊れるようになり、全員が公演に向ってすごい情熱を見せて稽古に励んでいるのを見て、私も感無量でした。

今回も全部のお客様に席に座ってゆっくり観て頂きたいと、入場を制限させていただきましたが、入場券も早くに完売し、私ども出演者も入念な準備をして当日を迎えました。

第1部は、日本舞踊の真髄である古典舞踊を、そして第2部は親しみ易い歌謡舞踊と、出演者41名が最後の曲「サライ」まで精一杯心を込めて踊りました。

展覧会

◉常岡幹彦さんの個展

〈丹波〉

◎日時＝平成22年2月16・17・18日

◎会場＝丹波新聞社3階ホール

写生と本画を比較できるように陳列します。写生したものがどのような作品になるかを見ていただければ面白いかと思います。写生7点、日本画20点、父文亀の写生も数点出品しますのでご覧下さい。

〈東京〉

◎日時＝平成22年11月22日～28日

◎会場＝ギャルリ・コパンダール企画

東京都中央区京橋2-7-5　京二小林ビル1階03-3538-1611

／約15点、新作を出品

◉可部美智子陶展のお知らせ

・第39回全陶展
日時＝平成21年11月2日～11月12日
会場＝上野公園・東京都美術館

・可部美智子陶展
去る7月22日～28日間、小田急百貨店アートサロンで開かれ、来観者で賑わいました。

同窓会

◉平成21年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

平成21年6月28日（日）恒例の九段会館にて開催されました。折悪しく雨模様となりましたが、昨年を大きく上回る記録となる135名のやまざる勢が集いました。

今年の実施担当の幹事役は昭和38年卒・15期の17名。皆さんのご苦労で、いくつかの新趣向も加わって、楽しく盛り上がった1日となりました。

総会は、この1年の物故会員10名への黙祷で始まり、会務・会計・監査の各報告が承認されました。

本年、同窓会本部会長の交代により、新会長にご就任の芦田拓郎様と前会長の田中洋行様のご挨拶のあと、母校深田俊郎新校長からスライドを駆使しての近況報告を頂きました。

恒例のセミナーは幹事学年の15回生で丹波竜の第一発見者である村上茂さんによって「恐竜が丹波にもたらしたもの」と題して、恐竜化石の発見から今日までの経緯と丹波竜にまつわる話題がスライドと共に興味深く披露されました。丹波市役所の「恐竜を活かしたまちづくり課」村上課長も、わざわざ現地の化石工房に展示されている貴

重な恐竜模型を持参され、恐竜がもたらしつつある故郷の全国的な話題の盛り上がりと今後の期待に、在京会員が夢を膨らませました。

当日のご来賓には、本部新旧会長及び新校長のほか丹波市辻市長・中川企画部長、県東京事務所森所長、同窓会阪神稲継・京滋酒井・東海竹内の各支部長、そして西山酒造会長には沢山のお酒をご恵贈賜り、故郷の銘酒での乾杯で懇親会の幕開けとなりました。

例年、矍鑠として参加される高女昭和12年卒竹内恵美子様にはめでたくお迎えの卒寿のお祝いを致しました。

市長からは、市の現況のお話と、ふるさと寄付金へのお願いを致され、会員からそれぞれの気持ちをボックスへ入れていただきました。ジャンケン合戦による恐竜グッズプレゼントなども織り交ぜて、時を忘れた4時間が過ぎていきました。

今年、新たなテーマとした同窓会各支部会員との交流も図るということで、他支部から15回生を中心に27名の会員を迎え、親睦の輪が更に広がりました。

更に、オプションとして企画した「隅田川と東京湾ナイトクルージング」には満席の60名が参加、雨上がりで眺望抜群となった夜景と沢山の料理に満足しての1日となりました。

来年は6月13日です。多くの同窓の皆様のご参加をお待ちしています。

なお、同窓会東京支部のホームページも、閲覧数が4千になります。総会・懇親会やナイトクルージングの写真も一杯です。是非ご覧下さい。

（支部長・高見記）

同好会

◉氷上ゴルフ同好会、回を重ね 次回は116回目を迎えます！

年4回開催で実に29年の歴史を誇る我が「氷上ゴルフ同好会」。熱心な会員の皆様に支えられどんどん記録を伸ばしています。

どのゴルフ場も歴史のある氷上会に驚きの声でご協力を頂きいつも胸を張っての開催です。

現在会員数60余名（グロスは70点代～130点代といろいろです）、会員の紹介もあり良いゴルフ場で安いプレー代を心がけ、茨城、千葉、埼玉、神奈川等と会場を回りながら年4回の開催で各回の参加者30名前後で推移しています。

丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓も更に進めていきたく思っています。丹波弁が楽しいゴルフ会です、都合の良い会場の時だけでも参加されませんか、気楽にお声を掛けて下さい新会員大歓迎です。

この1年の成績は次の通りですが大会の雰囲気のスナップや成績は下記のホームページを御覧下さい。

◇

第115回大会参加者

○第112回（東筑波カントリークラブ／20年09月12日）

優勝　野村　修己
2位　直田　正
3位　矢持　信行

第113回（日本カントリークラブ／20年12月03日）

優勝　坂上　勝郎
2位　塚口　恭一
3位　安達　健一郎

第114回（ザ・ゴルフクラブ竜ヶ崎／21年03月13日）

優勝　荻野　晴一朗
2位　岡林　逸男
3位　大野　冨士夫

第115回（筑波カントリークラブ／21年06月12日）

優勝　谷口　浩章
2位　川畑　明光
3位　赤井　紀男

http://www.pcc-taiyo.co.jp
又は「氷上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

氷上ゴルフ同好会事務係　岡　吉明
電話　048—460—1601

◉囲碁で八尾鐵太郎氏が快挙

八尾鐵太郎氏は「囲碁研究」誌主催の指導碁で、プロ棋士の強豪片岡聡（さとし）九段に四子を置いて四目勝ちを収める快挙を遂げられました。棋譜と解説は「囲碁研究」誌平成21年8月号に掲載されています。八尾氏は、プロ相手に終始冷静に打ち進め、解説子も再三の賛辞を贈るほどの棋譜を残されています。

対戦の片岡聡九段は、昭和50年、24歳で天元位を獲得したのをはじめ、かずかずのタイトル戦の常連として、その名が知られています。

ほかにも囲碁愛好家で、プロの指導を受けておいでの郷友が多くいらっしゃると思いますが、自慢の一局がありましたら、お知らせください。

❖ 本誌にご協力有難うございました

猿友会

井田悦子　笹倉郁子　塩見みつえ

大石佐代子　篠原よね子　渡邊貴美子

小田明子　千葉淳子

可部美智子　長尾貴美代

小糸イキ　安原三智子

本誌にご協力有難うございました ❖

コンピュータ・データ処理　－少量でもお任せください－

株式会社　**サイモン・デジタル・センター**

仕事内容：入力代行（名刺、ハガキ、アンケート、エクセルシート　ほか）
出　　力（宛名ラベル、直接印字、帳票出力　ほか）
そ の 他　データ管理・メンテナンス・事務局代行

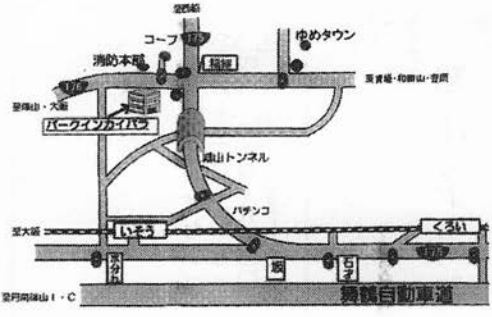
専務取締役　塚口　　智（氷上町油利）
営業部長　藤田　　徹（市島町今中）

〒134-0088　東京都江戸川区西葛西6－16－7
第２白子ビル501
TEL 03－5679－8344

パークイン

(株)柏原ビジネスホテル
TEL. 0795-72-3525
FAX. 0795-72-3495
〒669-3311 兵庫県氷上郡柏原町母坪380

ご宴会・帰省の際のご宿泊に



・会議室、宴会場完備
・駐車場（50台、大型バス駐車可）

ＪＲ福知山線柏原駅よりタクシー5分
近畿自動車舞鶴道春日インター7分

●お食事は

蔵出し料理　**あじくら**

TEL. 0795-72-3715

❖ 本誌にご協力有難うございました

① 丹波新聞　嘱託記者「丹波人ＮＯＷ」のコラムニスト
http://tanba.jp
② ＮＰＯ法人アジアの新しい風・理事・事務局長
http//www.npo-asia.org

上　　高　子（氷上町出身）

〒 154-0016　東京都世田谷区弦巻２－18－22－414
TEL ／ FAX 03 － 5426 － 6714
e-mail　takako-ue@t05.itscom.net

①在京の丹波人をインタビュー取材しています。取材対象についてお心当たりの方はお知らせ下さい。
②アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生たちを支援するＮＰＯを立ち上げました。日本語学習支援と草の根の相互理解を目指しています。**会員募集中!!**

akeland

エクステリア専門商社

株式会社 トコナメエプコス

代表取締役　広 瀬　寿 和（山南町和田）

〒160-0003　東京都新宿区本塩町23 第２田中ビル
TEL 03－3354－0211　FAX 03－3354－7767

本誌にご協力有難うございました ❖

柏13回・はくとみかい

柏高 昭和36年卒　氷上ゴルフ同好会会員

安達　巧
上野　忠明
大賀　勝恵
大野　冨士夫
岡　吉明
荻野　智司
堀　博之
山田　良一

あなたの町の「石屋さん」
そんな石屋をめざしています！！

墓石・霊園・建築石材・造園石材

(株) 丹波総合石材

代表取締役　堀　公二　柏高 昭和36年卒

いしやは　ここよ

0120-1480-54

工場・事務所　TEL 0795-72-3032
FAX 0795-72-4343

丹波市柏原町母坪425　http://www.tanba-sekizai.com

❖ 本誌にご協力有難うございました

自動車補修部品販売

株式会社　京　浜

代表取締役社長　上武　正次　柏高 昭和 36 年卒

本　社　〒292-0826　千葉県木更津市畑沢南 1-2-37

TEL 0438-36-0211(代)

営業所　市原営業所・千葉営業所

株式会社　アイ・ケイ・アイ　I.K.I co.,LTD

株式会社　ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアブリックス・アパレル・雑貨全般

輸入卸＆生産管理　＆　小売り

代表取締役社長　岸田　勇　柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木　村　つ　た　江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2－39－5
電話 03－ 3300－6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士（電気部門）登録証　第15810号
エネルギー管理士（電気）免状　第 2857号
エネルギー管理士（熱）　免状　第 5191号

若森技術士事務所

所長　若　森　敏　郎

〒302-0023　茨城県取手市白山5－4－13
TEL・FAX 0297－72－0907

❖ 本誌にご協力有難うございました

みんなで作るから楽しい

みんなの掲示板
読者どうしで情報交換。
▽譲ります・譲ってください
▽メンバー募集▽ボランティア募集ーなどなど。

自由の声
あなたの主張やメッセージ、「ちょっと一言」など、どしどしお寄せください。

ふるさとクイズ 丹Q
丹波地方に関するクイズです。

ケータイでパチリ
ケータイカメラで撮った“あなたのベストショット”写真を紙上に!!。家族、ペット、花、身近な風景…などなど、コメントと一緒に『Let's送信』。
アドレスは patiri@tanba.jp

同窓会ひろば
同窓会でのひとときを紙面で紹介します。簡単な文章と、写真を送って下さい。
いい記念になりますよ。

関東からのご応募を歓迎します

丹波新聞社
〒669-3309 丹波市柏原町柏原201
tel.0795-72-0530 fax.0795-72-1956
Web http://tanba.jp E-mail tanba@tanba.jp
週2回(日・木)発行 1ヶ月1,220円(郵送料200円)

60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌【さすが&されど】好評発売中

書く・読む・交流する雑誌

年間購読料 3700円（税・送料込み）見本誌進呈

時代と共にあなたの歴史
自分史年表
書く・読む・調べる便利な歴史年表
定価 1,800 円（税・送料込）

これから書き継ぐ生活ノート
メモリー50
1年2頁、50年間書ける気軽なメモ帳
定価 1,800 円（税・送料込）

あなたの本つくりませんか
安心の35万円システム（100頁・100部）お気軽にご相談下さい。
自分史・評伝・記念誌・小説・エッセイ・句集・詩歌集・写真集

株式会社ホンゴー出版 〒247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町1-1-1
TEL045(895)2712 FAX 045(895)4338

本誌にご協力有難うございました ❖

芦田重秋

足立かをる

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科　非常勤講師
足立和孝
〒347—0015 加須市南大桑字下鳩山一六二〇—一
TEL〇四八〇—六五—五九八八
FAX〇四八〇—六五—六〇九七
E-mail : kazu358@pastel.ocn.ne.jp

株式会社ナレッジリンク
足立国際会計事務所
代表取締役
税理士・米国公認会計士 (Certificate)
足立知佳子
〒152-0035 東京都目黒区自由が丘一—一三—四 藤タワービル六〇二
TEL〇三—三七一八—八〇四七 FAX〇三—三七一八—八一四七
E-mail : cadachi@aia.gr.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
EMネット埼京理事
足立和巳
〒183—0051 東京都府中市栄町一—一五—二七
TEL・FAX〇四二—三六四—七二二七

足立静雄

❖ 本誌にご協力有難うございました

飯田光雄
〒285—0045
千葉県佐倉市白銀三—八—十一
電話〇四三—四八五—〇五〇三

生田清弘
東京都世田谷区成城一—七—七
電話〇三—三四一五—一八九三

井本義一

上野重喜

氷上郷友会監事
臼井小五郎
（丹波市氷上町絹山出身）
〒275—0025
習志野市秋津一—一—四—五〇二
TEL〇四七—四五三—八八五七

有限会社 PPC大洋
岡吉明
〒351—0014
朝霞市膝折町四—四—三〇
TEL〇四八—四六〇—一六〇一
FAX〇四八—四六〇—二三九七
http://www.pcc-taiyo.co.jp

本誌にご協力有難うございました ❖

岡田昌子

岡林逸男

〒177—0051 東京都練馬区関町北二—七—一七

小田富士夫

梶原清

やす子

金出一郎

木呂子惠美子

❖ 本誌にご協力有難うございました

久保春雄
〒300—0031 土浦市東崎町十三—二—六〇四
電話〇二九八—二二—二九七八

栗田功

坂上勝朗

坂上登
山口泰男
仲一聰
仙台市在住

合唱指揮者
笹倉強
〒352—0014 新座市栄四—五—二五
TEL・FAX〇四八—四七七—五六四〇

高見嘉都司
〒173—0025 東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話 〇三—三九五六—〇六〇〇

本誌にご協力有難うございました ❖

高見秀史

柏陵同窓会東京支部のホームページは検索サイトで「柏陵同窓会東京支部」でご覧いただけます。

谷口浩章

株式会社 シードコーポレーション
代表取締役 千種倫幸
〒104—0061 東京都中央区銀座一丁目二一—九
電話 〇三—三五六七—九七〇〇

日本画家
常岡幹彦
〒357—0205 飯能市白子一七三—七
電話 〇四二—九七八—一〇九八

鶴田宏

日本舞踊 西崎祥
端唄 根岸妙
〒224—0027 横浜市都筑区大棚町五〇〇—八
電話 〇四五—五九一—六六五五

❖ 本誌にご協力有難うございました

原谷洋美

青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑（都営八王子霊園隣り 第二期墓地分譲案内中）
住職 堀井隆川
〒193—0821 東京都八王子市川町四九三—二
電話 〇四二—六五二—二〇一一

村上末吉

山口和久
恵理子・賢一・寧々・藤吉郎秀吉・
由佳・愛々・茶々・凪人・愛莉・思温
〒196—0031 東京都昭島市福島町二—一〇—二七
電話 〇四二—五四四—八八六一
http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi 0330/

PHP文化フォーラム 埴生の宿
代表 吉住自由造
〒216—0033 川崎市宮前区宮崎五—五—三五
電話 〇四四—八六六—三六二二

渡邊隆男

編集後記

★「ふるさとトピックス〈丹波新聞〉から」を担当。小田社長からトピックスの切り抜きを三〇件余り選んでもらい、それをさらに三分の一に絞り込んだら、ほぼ昨年と同じく「丹波竜関連」「医療関連」、そして「町おこし関連」（本号では割愛）に集約された。昨年の医療は崩壊色一辺倒だったが、今年は経済と同じく底打ちして明るい話題が多くなっている。また丹波竜も新しい発見が続き、町おこしもさまざまな動きが見られる。ふるさと、頑張れ！　遠くから応援しています。（上）

★木彫りの上手な丹波中竹田の友人から還暦祝に丹波竜を頂戴した。近くの神社から伐り出された楠で彫られた、佳い香りのする、掌に包み込める親子竜である。狭庭の芝生に置くとなんとも可愛い（本誌26頁「ふるさと随想」タイトルバック）。寝っ転がって見ると、丹波竜が立ち現われ、懐かしい上久下の川風が吹き渡った。自分の立ち位置がスタンダードではないこと、目線を変えてみることもまた大切と小さな丹波竜が教えてくれた。（原谷）

★今号からお手伝いさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。昭和四十一年に創刊された『山ざる』は今号で40号になります。内容の濃い会誌を連綿と繋いで下さった先輩たちの努力に頭が下がります。また、投稿して下さる方々、読んで下さる皆様に感謝しつつ、微力ながら頑張ってまいる所存です。皆様のご投稿をお待ちしています。（岡田）

★郷土の撮影に銀輪行脚を続けています。山を迂回すれば平地伝いでどの里へも行けます。駅に貸し自転車を置き、自転車道を整備すれば散在する歴史遺産を愛でに訪れる人も増えるのでは？　有料道路として造られたけれど採算が採れないので国道に格下げとなった建設省遺産を見上げながら痛感します。バスが間引かれ、遠阪や神楽から来る生徒は自転車通学に戻りました。（徳田）

★本号の原稿締切りを例年より一か月早め七月末としたため、その時点での集まりが悪く心配しましたが、編集委員の熱心な働きかけにより最終的には総ページ一六四ページ、まさに創刊40号記念にふさわしいバラエティに富んだ大作となりました。ご協力に感謝致します。（池田）

山ざる　第40号

平成二十一年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　井徳正吾
上　高子　上田正文　岡　吉明
岡田昌子　木呂子恵美子　坂上勝朗
常岡幹彦　鶴田ゆき子　徳田八郎衛
原谷洋美　藤原ひさ子　本城英明

発行者　関東氷上郷友会会長　坂上　勝朗
〒351-0014　埼玉県朝霞市膝折町4-4-30
関東氷上郷友会事務局（岡　吉明）
☎〇四八（四六〇）一六〇一
振替〇〇一一〇―三―一二三一三〇
製　作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

人材募集!! 関東地区　関西地区

当社は三井化学（株）、大日本印刷（株）、アサヒビール（株）、ダイキン工業（株）、沖電気工業（株）、三菱商事（株）などを主力荷主に持つ総合物流会社です。東京、名古屋、大阪に主要倉庫を持ち、関東・関西圏の物流をつなぎます。

日本で一番大きなトレーラーが毎日、東海道を走っています。

平成19年秋完成。本格稼動に入った草加物流センター　倉庫規模5600坪（5階建）（埼玉県草加市）

丹波事業所 開設準備！

キリンビール（株）神戸工場（三田）、大日本印刷（株）小野工場を中核に、丹有地区の基盤強化のため、西神戸物流センター及び丹波事業所・丹波物流センターを新設（準備中）

三協運輸 株式会社

代表取締役社長　岸本勲（氷上町出身）

本　　社　東京都足立区保木間 1-1-3　TEL.03(3860)8112
大阪支店　大阪府大東市新田中町 3-3　TEL.072(806)2821
埼玉支店　埼玉県桶川市加納峯 3-7-9　TEL.048(728)9380

物流倉庫所在地　東京　埼玉　神奈川　名古屋　大阪

B5判変型（260×190㎜）・上製布貼表紙・函入・総3056頁

通常価格：50,400円（税込）

郷友会々員特別価格：40,320円（税込）

大書源

二玄社創立五十周年記念出版

全三巻＋索引冊

［附録：DVD・書道史年表］

●書体字典の最高峰。未曾有の二十一万字収録！

漢字の姿は、一つではありません。

三千年の歴史の中で、数多くのスタイルが生まれました。

◉魚の例……

殷の甲骨・金文から清末の斉白石まで、あらゆる時代の様々な書体を収集し、二十一万を超える史上最多の字例を収載しました。二玄社の半世紀に亘る出版活動で蓄えた膨大な資料を基礎に作り上げた、書体字典の決定版です。

＊詳細カタログをご請求ください。

二玄社　会長 渡邊隆男

〒101-8419 東京都千代田区神田神保町2-2 Tel.03-5210-4733 Fax.03-5210-4723 http://nigensha.co.jp